有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第12集

矢加部町屋敷遺跡Ⅳ
蒲船津西ノ内遺跡
蒲船津水町遺跡

福岡県柳川市大字矢加部・蒲船津所在遺跡の調査

２０１２

九州歴史資料館

蒲船津水町遺跡
蒲船津西ノ内遺跡
矢加部町屋敷遺跡Ⅳ

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第12集

二〇一二　九州歴史資料館

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第12集

矢加部町屋敷遺跡Ⅳ
蒲船津西ノ内遺跡
蒲船津水町遺跡

福岡県柳川市大字矢加部・蒲船津所在遺跡の調査

1．矢加部町屋敷遺跡遠景
（北上空から）

66図8

2．矢加部町屋敷遺跡５次調査
出土手形付摺鉢

49図12

49図17

49図20

49図16

49図21

49図42

3．矢加部町屋敷遺跡５次調査
出土漆器

序

福岡県では、平成14年度から国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所の委託を受けて、有明海沿岸道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

本報告書は平成16・18・19年度にかけて行った、福岡県柳川市大字矢加部に所在する矢加部町屋敷遺跡、大字蒲船津に所在する矢加部町蒲船津西ノ内遺跡･蒲船津水町遺跡の記録で、矢加部町屋敷遺跡の調査報告としては４冊目になります。

矢加部町屋敷遺跡は江戸時代の街道である「久留米柳川往還道」沿いに位置しており、本書に報告した調査区では久留米柳川街道の東側溝の南側が発見されました。このほかにも、明治期に排水用の土管が使用されていることや、大正期まで鋳物師が存在していたことが明らかになりました。蒲船津西ノ内遺跡は中世後期の集落跡であり、蒲船津城との関係が想定されます。蒲船津水町遺跡では平安時代前期の多くの墨書土器が発見され、蒲船津地区の重要な場所であったことがわかりました。

今回の調査ではこのように矢加部・蒲船津両集落の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。本書が文化財保護思想の普及及び学術研究・生涯学習への一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の作成に当たりましては、関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成24年３月31日

九州歴史資料館
館長　西谷　正

例 言

1．本書は有明海沿岸道路建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県柳川市大字町屋敷に所在する矢加部町屋敷遺跡と、大字蒲船津に所在する蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡の記録で、有明海沿岸道路建設関係埋蔵文化財調査報告では第12集に当る。矢加部町屋敷遺跡調査報告書としては第４冊目であり、本書では５次調査区の遺物と１次調査の遺構・遺物を報告する。
2．本遺跡の発掘調査・整理報告は国土交通省九州整備局福岡国道事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が実施した。
3．本書所収遺跡は有明海沿岸道路調査地点の第11･16･17地点にあたる。
4．本書に掲載した遺構写真は、矢加部町屋敷遺跡については秦憲二が、蒲船津西ノ内遺跡については進村真之が、蒲船津水町遺跡については小川泰樹が撮影した。なお、空中写真は矢加部町屋敷遺跡・蒲船津西ノ内遺跡については九州航空株式会社に、蒲船津水町遺跡は(株)東亜航空技研に委託した。出土遺物については九州歴史資料館北岡伸一が撮影した。
5．本書に掲載した遺構図は秦・進村・小川が作成し、発掘作業員が補助した。
6．出土遺物の整理作業は、福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所および九州歴史資料館において、濱田信也･新原正典･小池史哲の下に実施した。
7．出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館に保管している。
8．本書に使用した分布図は国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「羽犬塚」を改変したものである。本書に掲載した遺構図の方位は全て日本座標の座標北(G.N.)である。
9．平成23年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改変のため、九州歴史資料館に移管された。
10．Ⅲ－４の自然科学分析は赤色顔料分析については九州歴史資料館文化財調査室保存管理班加藤和歳が行い、骨貝種子同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
11．Ｘ線ＣＴスキャンは図版１については九州国立博物館で、図版20については九州歴史資料館で実施した。
12．本書は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－１～３を秦が、Ⅲ－４を九州歴史資料館文化財調査室保存管理班加藤とパリノ・サーヴェイ株式会社佐々木由香・バンダリ　スダルシャン・中村賢太郎が、Ⅲ－５を進村が、Ⅲ－６を小川が執筆し、 編集は各執筆者の協力を得て秦が行った。

目次

序
例言
目次
図版目次
挿図目次

Ⅰ．はじめに…… 1
　1．調査の経過…… 1
　2．調査の組織…… 4
Ⅱ．位置と環境…… 6
Ⅲ．調査の内容…… 9
　1．矢加部町屋敷遺跡５次調査の出土遺物…… 9
　2．矢加部町屋敷遺跡１次調査…… 86
　3．矢加部町屋敷遺跡のまとめ…… 201
　4．矢加部町屋敷遺跡の自然科学系の分析…… 217
　5．蒲船津西ノ内遺跡…… 231
　6．蒲船津水町遺跡…… 239

図版目次

巻頭図版１　1．矢加部町屋敷遺跡遠景(北上空から)
　2．矢加部町屋敷遺跡５次調査出土手形付摺鉢
　3．矢加部町屋敷遺跡５次調査出土漆器
図版１　５次調査出土土器・陶磁器
図版２　５次調査出土土器・陶磁器・土製品
図版３　５次調査出土瓦・石製品
図版４　５次調査出土金属製品
図版５　５次調査出土金属製品・ガラス製品・木製品
図版６　５次調査出土木製品１
図版７　５次調査出土木製品２
図版８　５次調査出土木製品３
図版９　５次調査出土木製品４
図版10　５次調査出土木製品５
図版11　1．矢加部町屋敷遺跡遠景(西上空から)　2．１次調査区全景(上空から)
図版12　1．１号土坑(北東から)　2．３号土坑(南東から)
　3．４・33号土坑(北から)　4．４号土坑遺物出土状態(西から)
　5．６号土坑(東から)　6．７号土坑(南東から)
　7．８号土坑(西から)　8．９号土坑(北東から)
　9．11・22号土坑(北から)　10．12号土坑(北東から)
図版13　1．15・19・41号土坑(南から)　2．16号土坑(南西から)
　3．16・17号土坑(北東から)　4．21号土坑(北東から)

	５．23・25号土坑(南東から)	６．23号土坑遺物出土状態(北西から)
	７．27号土坑(北から)	８．28・35号土坑・１号井戸(西から)
図版14	１．30・39号土坑(北西から)	２．31・36号土坑(西から)
	３．32号土坑(南西から)	４．34号土坑(南から)
	５．41号土坑(南西から)	６．37号土坑(南西から)
	７．２号廃棄土坑(南西から)	８．１号大土坑(北西から)
図版15	１．３号大土坑(北から)	２．４号大土坑(南から)
	３．２号大溝排水管(南西から)	４．同上(西から)
	５．１・2号埋甕(南西から)	６．３号埋甕(南から)
	７．４号埋甕(西から)	８．５号埋甕(北東から)
	９．６号埋甕(西から)	10．７号埋甕(南から)
	11．８号埋甕(南から)	12．９号埋甕(北から)
図版16	１次調査出土土器・陶磁器	
図版17	１次調査出土陶磁器	
図版18	１次調査出土瓦	
図版19	１次調査出土土・金属・鹿角・貝製品	
図版20	１次調査出土石製品・鋳型	
図版21	１次調査出土ガラス・木製品	
図版22	１次調査出土木製品１	
図版23	１次調査出土木製品２	
図版24	１次調査出土木製品３	
図版25	１．蒲船津西ノ内遺跡全景(西から)	２．同上全景(北から)
図版26	１．１号土坑(東から)	２．２号土坑(南から)
	３．灰だまり(南から)	
図版27	１．１号溝状遺構(東から)	２．１号溝状遺構(西から)
	３．２号溝状遺構(南から)	
図版28	１．２号溝状遺構(南から)	２．西壁土層(東から)
	３．西壁土層(東から)	
図版29	１．トレンチ(北東から)	２．トレンチ(南から)
	３．全景(南東から)	
図版30	１号土坑、２号溝状遺構、遺構面出土土器	
図版31	１．蒲船津水町遺跡全景(北上空から)	２．同上全景(上空から)
図版32	１．１号土坑(西から)	２．２号土坑(南から)
	３．３号土坑(南から)	
図版33	１．４号土坑(北から)	２．５号土坑(西から)
	３．６号土坑土層(北西から)	
図版34	１．6号土坑(西から)	２．7号土坑土層(東から)
	３．7号土坑(南から)	
図版35	１．8号土坑土層(南から)	２．８号土坑(東から)
	３．9号土坑土層(南から)	
図版36	１．9号土坑(東から)	２．10号土坑(東から)
	３．11号土坑(南から)	
図版37	１．12号土坑土層(南から)	２．12号土坑(東から)

３．13号土坑土層(南西から)
図版38　１．14号土坑土層(南から)　２．14号土坑(南から)
３．15号土坑土層(南から)
図版39　１．16号土坑(西から)　２．17号土坑(南から)
３．遺物包含層掘削状況(北から)
図版40　出土遺物１
図版41　出土遺物２

挿図目次

第１図　柳川市位置図 …… 1
第２図　有明海沿岸道路調査地点図(1/50,000) …… 2
第３図　周辺遺跡分布図(1/50,000) …… 7
第４図　矢加部町屋敷遺跡調査範囲図(1/4,000) …… 9
第５図　矢加部町屋敷遺跡５次調査遺構略配置図(1/200) …… 11
第６図　５次調査１号土坑出土陶磁器実測図(10は1/4、他は1/3) …… 12
第７図　５次調査２～４号土坑出土土器･陶磁器実測図(４は1/4、他は1/3) …… 14
第８図　５次調査４・５号土坑出土陶磁器実測図(１・２・10は1/4、他は1/3) …… 15
第９図　５次調査６～11号土坑出土陶磁器実測図(６は1/4、他は1/3) …… 17
第10図　５次調査12･13号土坑出土陶磁器実測図(４は1/4、他は1/3) …… 19
第11図　５次調査14号土坑出土陶磁器実測図(11は1/4、他は1/3) …… 20
第12図　５次調査14・16号土坑出土陶磁器実測図(５～７・13は1/4、他は1/3) …… 21
第13図　５次調査17号土坑出土土器・陶磁器実測図(９～11は1/4、他は1/3) …… 22
第14図　５次調査18～20号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 24
第15図　５次調査21・23・24号土坑出土陶磁器実測図(１・７・８は1/4、他は1/3) …… 26
第16図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図１(1/3) …… 28
第17図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図２(1/3) …… 30
第18図　５次調査１号大土坑出土土器･陶磁器実測図(1/3) …… 32
第19図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図３(1/3) …… 34
第20図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図４(1/3) …… 36
第21図　５次調査１号大土坑出土磁器実測図(1/3) …… 38
第22図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図５(1/3) …… 40
第23図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図６(1/3) …… 41
第24図　５次調査１号大土坑出土土器･陶器実測図１(５～８は1/4、他は1/3) …… 43
第25図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図１(1/4) …… 44
第26図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図２(1・2・3は1/4、他は1/3) …… 45
第27図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図３(1/4) …… 46
第28図　５次調査１号大土坑出土土器･陶器実測図２(７は1/4、他は1/3) …… 48
第29図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図４(１・４～６は1/4、他は1/3) …… 49
第30図　５次調査１号大土坑出土土器･陶器実測図３(３は1/3、他は1/4) …… 50
第31図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図７(1/3) …… 51
第32図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図８(1/3) …… 52
第33図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図９(1/3) …… 54

第34図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図５(1/4) …… 55
第35図　５次調査１号大土坑出土土器実測図(1/6) …… 56
第36図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図10(1/3) …… 58
第37図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図11(1/3) …… 60
第38図　５次調査１号大土坑出土土器･陶磁器実測図５(1/3) …… 62
第39図　５次調査１・３号溝状遺構出土土器･陶磁器実測図(1/3) …… 63
第40図　５次調査ピット出土土器･陶磁器実測図(２は1/4、他は1/3) …… 64
第41図　５次調査包含層・２号胞衣壺・排土出土土器･陶磁器実測図(1/3) …… 66
第42図　５次調査出土土師質瓦実測図１(1/6) …… 67
第43図　５次調査出土土師質瓦実測図２(1/6) …… 68
第44図　５次調査出土瓦実測図(1/6) …… 69
第45図　５次調査出土土製品実測図(1/3) …… 70
第46図　５次調査出土土・石製品実測図(1/3) …… 72
第47図　５次調査出土金属･鹿角製品実測図(７は1/2、他は1/3) …… 73
第48図　５次調査出土銭実測図(1/2) …… 74
第49図　５次調査出土木製品実測図１(22は1/4、他は1/3) …… 76
第50図　５次調査出土木製品実測図２(1/6) …… 77
第51図　５次調査出土木製品実測図３(1/6) …… 78
第52図　５次調査出土木製品実測図４(1～2は1/2、6･9～11･14･15は1/4、他は1/3) …… 80
第53図　５次調査出土木製品実測図５(16は1/3、他は1/4) …… 81
第54図　５次調査出土木製品実測図６(9～11は1/12、他は1/6) …… 85
第55図　矢加部町屋敷遺跡１次調査遺構配置図(1/200) …… 87－88
第56図　１次調査１・３～９号土坑実測図(1/60) …… 91
第57図　１次調査10～12・14～17号土坑実測図(1/60) …… 93
第58図　１次調査18・19・21～24・26・27号土坑実測図(1/60) …… 95
第59図　１次調査28～37・39号土坑実測図(1/60) …… 97
第60図　１次調査38・40・41号土坑実測図(1/60) …… 99
第61図　１次調査１・３・４号大土坑実測図(1/60) …… 101
第62図　１次調査１・２号廃棄土坑、２号井戸実測図、８号埋甕土層断面図(４は1/30、他は1/60) … 103
第63図　１次調査１号土坑出土陶磁器実測図(1/3) …… 106
第64図　１次調査３号土坑出土土器・陶磁器実測図１(1/3) …… 108
第65図　１次調査３号土坑出土土器・陶磁器実測図２(12は1/6、６～９は1/4、1/3) …… 110
第66図　１次調査４号土坑出土陶磁器実測図(８・９は1/4、他は1/3) …… 111
第67図　１次調査５号土坑出土土器・陶磁器実測図(５・６は1/4、他は1/3) …… 112
第68図　１次調査７・８号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 114
第69図　１次調査10号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 115
第70図　１次調査11・12号土坑出土土器・陶磁器実測図(１・２・５～７は1/4、他は1/3) … 116
第71図　１次調査12号土坑出土陶器実測図(２・３・５は1/4、他は1/3) …… 117
第72図　１次調査14号土坑出土土器・陶磁器実測図(14は1/4、他は1/3) …… 118
第73図　１次調査15号土坑出土土器・陶磁器実測図(10・11は1/6、他は1/3) …… 120
第74図　１次調査16～18号土坑出土土器・陶磁器実測図(６は1/4、他は1/3) …… 122
第75図　１次調査19号土坑出土土器・陶磁器実測図(16・17は1/4、他は1/3) …… 123
第76図　１次調査21・22号土坑出土土器・陶磁器実測図(15は1/4、他は1/3) …… 125

第77図　1次調査23号土坑出土土器・陶磁器実測図（３・５は1/4、8は1/6、他は1/3）…… 126
第78図　1次調査24・26・28号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 127
第79図　1次調査29・33号土坑出土陶磁器実測図（５・９は1/4、他は1/3）…… 129
第80図　1次調査35～37・41号土坑出土土器・陶磁器実測図(11は1/4、他は1/3) …… 130
第81図　1次調査１号廃棄土坑出土土器・陶磁器実測図（８は1/4、2は1/3）…… 131
第82図　1次調査２号廃棄土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 133
第83図　1次調査１号大土坑出土土器・陶磁器実測図１(1/3) …… 134
第84図　1次調査１号大土坑出土土器・陶磁器実測図２（２～４は1/4、他は1/3）…… 136
第85図　1次調査３号大土坑出土土器・陶磁器実測図（７・８は1/4、他は1/3）…… 138
第86図　1次調査４号大土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 139
第87図　1次調査１号埋甕実測図(1/12) …… 140
第88図　1次調査２・３号埋甕出土土器・陶磁器実測図（１は1/6、４は1/4、他は1/3）…… 140
第89図　1次調査４号埋甕出土土器・磁器実測図(1は1/3、2は1/6) …… 142
第90図　1次調査５号埋甕出土土器・磁器実測図(1は1/6、2は1/3) …… 143
第91図　1次調査６号埋甕出土土器・陶磁器実測図（１・２は1/6、他は1/3）…… 144
第92図　1次調査７号埋甕出土陶磁器実測図（４は1/4、他は1/3）…… 145
第93図　1次調査８・９号埋甕出土土器・磁器実測図（５は1/4、他は1/3）…… 146
第94図　1次調査１号大溝出土土器・陶磁器実測図（４は1/4、他は1/3）…… 146
第95図　1次調査２号大溝出土陶磁器実測図１(1/3) …… 147
第96図　1次調査２号大溝出土陶磁器実測図２(1/3) …… 148
第97図　1次調査２号大溝出土磁器実測図１(1/3) …… 150
第98図　1次調査２号大溝出土磁器実測図２(1/3) …… 152
第99図　1次調査２号大溝出土陶磁器実測図３(1/3) …… 154
第100図　1次調査２号大溝出土土器・陶磁器実測図１(1/4) …… 155
第101図　1次調査２号大溝出土陶器実測図(1/4) …… 156
第102図　1次調査２号大溝出土陶磁器実測図４(1/3) …… 157
第103図　1次調査２号大溝出土土器・陶磁器実測図２(5は1/4、他は1/3) …… 158
第104図　1次調査２号大溝出土土器・陶磁器実測図３(1/3) …… 160
第105図　1次調査２号大溝出土土器実測図(3は1/4、他は1/3) …… 161
第106図　1次調査２号大溝出土土器・陶磁器実測図４（２は1/4、他は1/3）…… 162
第107図　1次調査２・３号大溝出土土器・陶器実測図５(19～21は1/6、22は1/4、他は1/3)　164
第108図　1次調査１号大溝出土土器・陶磁器実測図(10は1/4、他は1/3) …… 166
第109図　1次調査２～４・６号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図（１・７は1/4、他は1/3）… 167
第110図　1次調査７号溝状遺構・南西部クリーク出土土器・磁器実測図（２は1/4、他は1/3）… 169
第111図　1次調査２号井戸、鋳造炉上面出土陶磁器実測図(8・9は1/4、他は1/3) …… 169
第112図　1次調査ピット出土土器・陶磁器実測図(12・13は1/4、他は1/3) …… 170
第113図　1次調査整地層出土土器・陶磁器実測図（６は1/4、他は1/3）…… 172
第114図　1次調査大正包含層出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 173
第115図　1次調査撹乱土坑出土陶磁器実測図（５・６は1/4、他は1/3）…… 174
第116図　1次調査出土土師質瓦実測図１(1/6) …… 175
第117図　1次調査出土土師質瓦実測図２(1/6) …… 176
第118図　1次調査出土瓦実測図(1/6) …… 177
第119図　1次調査出土土製品実測図(1/3) …… 179

第120図　１次調査出土土・金属製品実測図(1～5は1/4、他は1/3) …… 181
第121図　１次調査出土るつぼ実測図(1/3) …… 182
第122図　１次調査出土砥石実測図(1/3) …… 184
第123図　１次調査出土石製品実測図(1･9･10は1/2、7･8は1/6、他は1/3) …… 185
第124図　１次調査出土石塔部材実測図(1/3) …… 187
第125図　１次調査出土ガラス・鹿角・貝製品実測図(13は1/2、他は1/3) …… 188
第126図　１次調査出土銭実測図(1/2) …… 190
第127図　１次調査出土木製品実測図１(19は1/4、他は1/3) …… 191
第128図　１次調査出土木製品実測図２(1/3) …… 192
第129図　１次調査出土木製品実測図３(4･17は1/4、他は1/3) …… 193
第130図　１次調査出土木製品実測図４(4・5は1/2、他は1/3) …… 195
第131図　１次調査出土木製品実測図５(1/3) …… 196
第132図　１次調査出土木製品実測図６(1/6) …… 197
第133図　１次調査出土木製品実測図７(1/3) …… 198
第134図　矢加部町屋敷遺跡１～５次調査遺構変遷図１(1/800) …… 202
第135図　久留米柳川往還路線と現存する往還道跡 …… 202
第136図　矢加部町屋敷遺跡１～５次調査遺構変遷図２(1/800) …… 203
第137図　藩境木位置図と推定復元図 …… 203
第138図　矢加部町屋敷遺跡１～５次調査遺構変遷図３(1/800) …… 204
第139図　矢加部町屋敷遺跡１～５次調査遺構変遷図４(1/800) …… 205
第140図　桟瓦・軒平瓦瓦当文と刻印の比較図 …… 207
第141図　「クド造り」「漏斗造」家屋の分布と柱配置模式図 …… 210
第142図　矢加部町屋敷遺跡出土鋳造関係遺物とこしき炉の例 …… 211
第143図　矢加部町屋敷遺跡出土の主要な土人形(６・７は1/4、他は1/3) …… 212
第144図　福岡・北九州・筑後市域出土の土人形(1/2) …… 213
第145図　摺鉢(上)・硯(下)付着赤色顔料蛍光Ｘ線スペクトル図 …… 218
第146図　蒲船津西ノ内遺跡調査区位置図(1/1,000) …… 232
第147図　蒲船津西ノ内遺跡遺構配置図(1/200) …… 233
第148図　１・２号土坑・灰だまり実測図(1/30) …… 234
第149図　１・２号溝状遺構土層実測図(1/30) …… 235
第150図　１号土坑・２号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(１～５は1/3、他は1/4) …… 236
第151図　遺構面出土土器・陶磁器実測図(13～16は1/6、他は1/4) …… 237
第152図　蒲船津水町遺跡周辺地形図(1/2,000) …… 239
第153図　蒲船津水町遺跡遺構配置図(1/300) …… 240
第154図　１～６号土坑実測図(1/30) …… 242
第155図　１～４・６号土坑出土遺物実測図(1/3) …… 243
第156図　７～10号土坑実測図(1/30) …… 245
第157図　７～10号土坑出土遺物実測図(1/3) …… 246
第158図　11～17号土坑実測図(1/30) …… 249
第159図　11～15・17号土坑出土遺物実測図(1/3) …… 250
第160図　包含層出土土器実測図(1/4) …… 251

表目次

表１　有明海沿岸道路調査一覧 …… 3
表２　５次調査出土土器・陶磁器観察表１ …… 13
表３　５次調査出土土器・陶磁器観察表２ …… 16
表４　５次調査出土土器・陶磁器観察表３ …… 18
表５　５次調査出土土器・陶磁器観察表４ …… 23
表６　５次調査出土土器・陶磁器観察表５ …… 25
表７　５次調査出土土器・陶磁器観察表６ …… 27
表８　５次調査出土土器・陶磁器観察表７ …… 29
表９　５次調査出土土器・陶磁器観察表８ …… 31
表10　５次調査出土土器・陶磁器観察表９ …… 33
表11　５次調査出土土器・陶磁器観察表10 …… 35
表12　５次調査出土土器・陶磁器観察表11 …… 37
表13　５次調査出土土器・陶磁器観察表12 …… 39
表14　５次調査出土土器・陶磁器観察表13 …… 42
表15　５次調査出土土器・陶磁器観察表14 …… 47
表16　５次調査出土土器・陶磁器観察表15 …… 53
表17　５次調査出土土器・陶磁器観察表16 …… 57
表18　５次調査出土土器・陶磁器観察表17 …… 59
表19　５次調査出土土器・陶磁器観察表18 …… 61
表20　５次調査出土土器・陶磁器観察表19 …… 65
表21　５次調査出土瓦観察表 …… 69
表22　５次調査出土土製品観察表 …… 71
表23　５次調査出土土・石製品観察表 …… 74
表24　５次調査出土金属製品観察表 …… 75
表25　５次調査出土木製品観察表１ …… 79
表26　５次調査出土木製品観察表２ …… 82
表27　５次調査出土木・ガラス製品観察表 …… 84
表28　１次調査出土土器・陶磁器観察表１ …… 107
表29　１次調査出土土器・陶磁器観察表２ …… 109
表30　１次調査出土土器・陶磁器観察表３ …… 113
表31　１次調査出土土器・陶磁器観察表４ …… 117
表32　１次調査出土土器・陶磁器観察表５ …… 118
表33　１次調査出土土器・陶磁器観察表６ …… 119
表34　１次調査出土土器・陶磁器観察表７ …… 121
表35　１次調査出土土器・陶磁器観察表８ …… 124
表36　１次調査出土土器・陶磁器観察表９ …… 125
表37　１次調査出土土器・陶磁器観察表10 …… 127
表38　１次調査出土土器・陶磁器観察表11 …… 128
表39　１次調査出土土器・陶磁器観察表12 …… 132
表40　１次調査出土土器・陶磁器観察表13 …… 135
表41　１次調査出土土器・陶磁器観察表14 …… 137
表42　１次調査出土土器・陶磁器観察表15 …… 141

表43　１次調査出土土器・陶磁器観察表16 …… 149
表44　１次調査出土土器・陶磁器観察表17 …… 151
表45　１次調査出土土器・陶磁器観察表18 …… 153
表46　１次調査出土土器・陶磁器観察表19 …… 159
表47　１次調査出土土器・陶磁器観察表20 …… 163
表48　１次調査出土土器・陶磁器観察表21 …… 165
表49　１次調査出土土器・陶磁器観察表22 …… 168
表50　１次調査出土土器・陶磁器観察表23 …… 171
表51　１次調査出土土器・陶磁器観察表24 …… 174
表52　１次調査出土土器・陶磁器観察表25 …… 175
表53　１次調査出土土器・陶磁器観察表26 …… 177
表54　１次調査出土土器・陶磁器観察表27 …… 178
表55　１次調査出土瓦観察表 …… 178
表56　１次調査出土土製品観察表１ …… 180
表57　１次調査出土土製品観察表２ …… 182
表58　１次調査出土金属製品観察表 …… 182
表59　１次調査出土土製品観察表３ …… 183
表60　１次調査出土石製品観察表 …… 186
表61　１次調査出土ガラス・鹿角・貝製品観察表 …… 189
表62　１次調査出土銭観察表 …… 190
表63　１次調査出土木製品観察表１ …… 194
表64　１次調査出土木製品観察表２ …… 199
表65　矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体 …… 220
表66　矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体種名表 …… 226
表67　矢加部町屋敷遺跡出土の魚類、爬虫類、哺乳類、鳥類 …… 227
表68　矢加部町屋敷遺跡出土の貝類 …… 228

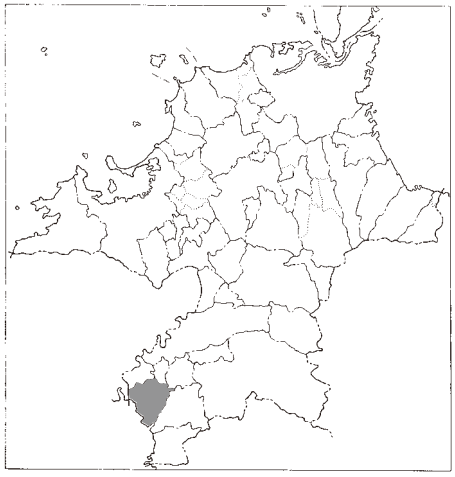
写真目次

写真１　久留米市柳川往還道跡1(北東から) …… 202
写真２　久留米柳川往還道跡2(北東から) …… 202
写真３　土師質瓦使用状況…… 209
写真４　使用変色のある土師質瓦…… 209
写真５　焼塩壷の蓋と見られる小皿と蛍光Ｘ線分析試料写真…… 216
写真６　矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体（１）…… 223
写真７　矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体（２）…… 224
写真８　矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体（１）…… 229
写真９　矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体（２）…… 230

Ⅰ．はじめに

１．調査の経過

ここに報告する遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設工事に伴って発掘調査されたものである。有明海沿岸道路は福岡県大牟田市から柳川市・大川市を経由して、佐賀県鹿島市に至る概略延長55㎞の国道208号のバイパス路線である。高規格道路として整備され、渋滞解消とともに佐賀空港や三池港などの交通拠点と連結するもので、地域間流通の活性化のために早期建設が望まれていた。



第１図　柳川市位置図

平成６(1994)年12月16日に計画路線として指定され、路線は大牟田高田道路・高田大和バイパス・大川バイパスに３区分されている。大川バイパスは柳川市三橋町徳益から大川市大野島までの延長10.0㎞区間であり、平成10(1998)年12月18日に柳川市三橋町徳益から柳川市西蒲池までが整備区間が指定された。

平成12(2000)年10月28日に建設工事が起工され、このうち大牟田市から大川市にいたる区間は暫定供用区間とされたことから、平成20(2008)年３月29日に、大牟田ＩＣから大川中央ＩＣ(23.8㎞)の内、高田ＩＣから大和南ＩＣを除く21.8㎞が暫定開通し、平成21(2009)年３月14日には全区間が暫定供用されている。

文化財調査についてはまず、平成12(2000)年11月16日付で、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所から福岡県教育庁文化財保護課に対し、この区間に係る埋蔵文化財の有無確認の依頼があり、これを受けて同課が平成15(2003)年10月６から８日に試掘調査を実施した。その結果、本調査を要する15遺跡が確認された(表１)。

本書に所収する遺跡の所在する３遺跡のうち、柳川市矢加部地区については平成15(2003)年10月６から８日に試掘調査を実施し、江戸時代の溝や土坑などが確認されたことから本調査が必要と判断された。蒲船津地区については、平成16から18年に試掘調査を実施し、平成18年３月22・23日に字水町で井戸か柱穴と思われる遺構が検出され、うち１基からは12世紀代の土器が出土した。平成18年８月17・22・23日に西ノ内地区で、土坑２基と中世後期の土器・陶磁器が発見され、それぞれ蒲船水町遺跡・蒲船津西ノ内遺跡として本調査の対象に加えられた。

矢加部町屋敷遺跡は、用地取得の終了した範囲から工事の工程にしたがって、平成16(2004)年６月15日から10月４日に矢加部町屋敷遺跡１次調査として調査区南東部から本調査を実施した後、県道西側のクリークの高架工事を行う必要が生じたため、２次調査を平成16(2004)年６月15日から10月４日に、３次調査を平成17(2005)年３月17日から４月24日に実施した。４次調査については、県道東側で柳川農林事務所が工事用地内のクリークの付け替え工事を先行して行うため、県道東側の用地内に工事用道路を設置することから西側を調査することとなり、平成

第２図　有明海沿岸道路調査地点図(1/50,000)

表１　有明海沿岸道路調査一覧

地点	市町名	大字名(区間)	遺跡名	H19.4.1現在対象面積(㎡)	試掘確認調査		発掘調査		報告書作成		遺跡の概要	
					試掘年度	未試掘面積(㎡)	調査年度	面積(㎡)	作成年度	面積(㎡)	主な時代	特記事項
1	大川市	津(終点～県道新田榎津線間)		12,900	H18	0						試掘済み、遺跡無し
2	大川市	津(県道新田榎津線～大字境)		25,700	H14･15･18	0						試掘済み、遺跡無し
3	大川市	幡保		15,400	H15･18	0						試掘済み、遺跡無し
4	大川市	坂井	坂井長永	3,820	H17･18	0	H17 H18	1,820 1,200	H19	3,020	鎌倉時代	・条里の区画溝
5	柳川市	西蒲池	西蒲池古塚	14,200	H16	0	H16 H17 H18	4,390 9,460 350	H19	14,200	平安時代 鎌倉時代 室町時代	・条里の区画溝 ・墨書土器
6	柳川市	西蒲池	西蒲池将監坊	4,400	H16	0	H17	3,400	H19	3,400	古墳時代 奈良時代	・条里の区画溝
7	柳川市	西蒲池	西蒲池古溝	4,530	H16	0	H17	4,530	H19	4,530	平安時代	・条里の区画溝と畑畝跡
8	柳川市	西蒲池	西蒲池下里	2,800	H16	0	H17	2,800	H19	2,800	平安時代	・条里の区画溝
9	柳川市	東蒲池	東蒲池榎町	5,700	H14	0	H15	5,700	H16	5,700	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代	・中世の集落遺跡
10	柳川市	東蒲池	東蒲池大内曲り	1,200	H16	0	H17	1,200	H18	1,200	古墳時代 平安時代 鎌倉時代	・中世の集落遺跡
11	柳川市	矢加部	矢加部町屋敷	4,855	H15･16	0	H16 H17 H18 H19	2,040 430 1,820 565(860)	H17整理 H18 H21 (H22～23)	1,500 880 860 560	江戸時代 明治時代	・江戸時代の町屋跡 ・水田焼の銘入り土器 ・鉄湯釜の鋳型とるつぼ ・街道側溝らしい大溝
12	柳川市	矢加部	矢加部五反田	4,000	H17	0	H18	4,000	H20	4,000	戦国時代 江戸時代	・戦国時代の集落遺跡
13	柳川市	矢加部	矢加部南屋敷	10,470	H16	0	H17 H18	6,000 4,470	H20	10,470	戦国時代 江戸時代	・戦国時代の集落遺跡
14	柳川市	三橋町柳河		4,700	H18	0						試掘済み、遺跡無し
15	柳川市	三橋町蒲船津	蒲船津江頭	9,700	H16	0	H17 H18 H19	4,700 3,300 1,700	H20 H21 (H22)	4,800 3,300 (1,600)	弥生時代 古墳時代 古代・中世	・弥生～中世の複合集落遺跡 ・弥生時代後期の礎板(掘立柱建物の柱の基礎)多数
16	柳川市	三橋町蒲船津	蒲船津水町	4,500	H17	0	H19	(1,400) 4,500	(H22)	4,500	弥生時代 鎌倉時代	・弥生～中世の複合集落遺跡
17	柳川市	三橋町蒲船津	蒲船津西ノ内	2,280	H16～18	0	H18	2,280	(H22)	2,280	戦国時代	・戦国時代の集落遺跡
18	柳川市	大和町徳益		4,500	H17・18	0						試掘済み、遺跡無し
19	柳川市	大和町豊原		25,000	H17・18	0						試掘済み、遺跡無し
20	柳川市	大和町塩塚	塩塚地蔵面	22,740	H17～19	0					江戸時代	一部本調査必要(塩塚地蔵面遺跡) 一部試掘済み、遺跡無し
21	柳川市	大和町栄	慶長本土居跡	64,500	H16～18	0			H20		江戸時代	・柳川市指定史跡慶長本土居跡 一部試掘済み、遺跡無し
22	高田町	黒崎開	新開村旧隄記碑	－		0	H14 H19	 －	H20	－	江戸時代	・敷粗朶工法(葦など植物を敷く工法)
23	高田町	黒崎開	黒崎堤防	300		0	H16	移設作業 300	H20	300	江戸時代	・福岡県指定史跡旧柳河藩干拓遺跡

18(2006)年５月９日から平成19(2007)年１月に着手した。最後に、５次調査を平成19年６月15日から開始し、９月25日に埋め戻しを終了し、矢加部町屋敷遺跡の調査が完了した。

蒲船津水町遺跡は柳川市三橋町蒲船津534－1･2･11～14番地を対象範囲とした約1,800㎡を、平成19(2007)年５月10日から８月31日にかけて調査した。

蒲船津西ノ内遺跡は柳川市三橋町蒲船津314－1～4･5A番地を対象とした900㎡を、平成18(2006)年12月４日から平成19(2007)年１月31日にかけて調査した。

これらの調査成果の報告書作成業務については、矢加部町屋敷遺跡は、平成16年度の１次調査の遺構と遺物、平成19年度の５次調査の遺物について行い、蒲船津水町遺跡と蒲船津西ノ内遺跡の報告内容と合本して報告することで協議が整った。なお、福岡県教育委員会の組織改変により、これまで文化財保護課で行っていた国の機関等の受託業務は、平成23年度以降九州歴史資料館で実施することとなった。

２．調査の組織

遺跡の発掘調査・整理報告に関わる平成16年から19年度、21年から23年度の関係者は次のとおりである。

国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
所長	増田　博行	増田　博行 (～H17.8.1) 小口　浩 (H17.8.2～)	小口　浩	小口　浩	森山　誠二	山本　悟司	山本　悟司 (～H23.8.31) 富山　英範 (H23.9.1～)
副所長	後田　徹 徳留　忠	後田　徹 佐々木英明	春田　義信 佐々木英明 (～H19.6.30) 桑林　正純 (H19.7.1～)	春田　義信 佐々木英明	白川　逸喜	白川　逸喜 柳田　誠二	白田　雅彦 柳田　誠二
建設監督官	松尾淳一郎	松尾淳一郎 今村　隆浩	今村　隆浩 鵜林　保彦	今村　隆浩 鵜林　保彦	山北　賢二 鵜林　保彦	山北　賢二 柴尾　照雄	伊藤　康弘 柴尾　照雄
調査第二課長	小椎尾　優	鈴木　昭人					
調査課長			鈴木　昭人	鈴木　昭人	今里　英美	今里　英美	清時　義雄
調査係長	長友　浩信	松木　厚廣	松木　厚廣 (～H18.9) 川原　一哲 (H18.10～)	川原　一哲	矢野　幸樹	藤木　厚志	藤木　厚志
専門員	相島　伸行	相島　伸行	伊東　良二	伊東　良二	田中　博明	田中　博明	北御門繁己 大川優一郎
国土交通技官	柳瀬　純矢	柳瀬　純矢	谷川　勝	谷川　勝	猿澤宗一郎	猿澤宗一郎	猿澤宗一郎
工務課長	田中秀之進	堀　泰雄	堀　泰雄	堀　泰雄	今田　一典	山口　隆	山口　隆

福岡県教育委員会

	平成16年度（発掘調査）	平成17年度（発掘調査）	平成18年度（発掘調査・整理）	平成19年度（発掘調査・整理）	平成21年度（整理報告）	平成22年度（整理報告）	平成23年度（整理報告）
総括							
教育長	森山　良一	森山　良一	森山　良一	森山　良一	森山　良一	杉光　誠	
教育次長	三瓶　寧夫	清水　圭輔	清水　圭輔	楢崎洋二郎			
総務部長	清水　圭輔	中原　一憲	大島　和寛	大島　和寛			
総務部副理事兼文化財保護課長			磯村　幸男	磯村　幸男			
文化財保護課長	井上　祐弘	井上　祐弘	井上　祐弘		平川　昌弘	平川　昌弘	
副課長			佐々木隆彦	佐々木隆彦	池邊　元明	伊崎　俊秋	
参事兼課長技術補佐	川述　昭人		池邊　元明	池邊　元明	小池　史哲	小池　史哲	
	木下　修		小池　史哲	小池　史哲			
参事			新原　正典	新原　正典			
参事兼課長補佐	久芳　昭文		安川　正郷	中薗　宏			
課長補佐		安川　正郷			前原　俊史		
庶務							
参事補佐兼管理係長	古賀　敏生						
管理係長		稲尾　茂	井手　優二	井手　優二	富永　育夫	富永　育夫	
事務主査	宮崎　志行	宮崎　志行	野中　顕		藤木　豊	藤木　豊	
主任主事	末竹　元	石橋　伸二	渕上　大輔	渕上　大輔	近藤　一崇	近藤　一崇	
	秦　俊二	末竹　元	柏村　正央	柏村　正央	野田　雅	内山　礼衣	
				小宮　辰之	仲野　洋輔	仲野　洋輔	
				野田　雅			
調査・整理・報告							
参事補佐兼調査第二係長	中間　研志	中間　研志	飛野　博文	飛野　博文	飛野　博文	飛野　博文	
参事補佐			濱田　信也	濱田　信也	新原　正典	新原　正典	
						池邊　元明	
技術主査			小川　泰樹	秦　憲二	秦　憲二	秦　憲二	
主任技師	秦　憲二	秦　憲二	秦　憲二				
			進村　真之				

九州歴史資料館

	平成23年度（整理報告）
総括	
館長	西谷　正
副館長	南里　正美
庶務	
企画主幹兼総務室長	圓城寺紀子
企画主査	塩塚　孝憲
主任主事	熊谷　泰容
主任主事	近藤　一崇
主事	谷川　賢治
整理・報告	
企画主幹兼文化財調査室長	飛野　博文
参事補佐	小池　史哲
文化財調査班長	小川　泰樹
保存管理班長	加藤　和歳
技術主査	秦　憲二
	進村　真之

なお、発掘調査及び整理期間中には、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所・有明海沿岸道路出張所・柳川市教育委員会をはじめとする関係各位の御理解・御協力を得ることができた。特に、発掘作業員として参加された地元を中心とする多数の方々には、悪天候、悪条件の中、御協力いただいた。また、地元の方々にはひとかたならぬご理解をいただき、無事に発掘調査を終了することができた。ここに深甚の謝意を表します。

Ⅱ．位置と環境

地理的環境

遺跡の所在する柳川市は福岡県南西部に位置し、筑後平野南西部の有明海沿岸部に位置している。筑後平野・佐賀平野の有明粘土を基盤とする沖積地は標高10m以下の低平な平地であり、水田の灌漑・排水のためのクリークが網の目のように走る独特な景観を呈している。柳川市内は矢部川の支流である沖端川・塩塚川が東西に走っており、川の間の微高地や自然堤防上に集落が形成されている。平成17年２月５日付けで柳川市・三橋町・大和町が合併し、現柳川市となったが、合併後の市域でも最も内陸部で標高４m前後という低平地である。第３図には入っていないが、沿岸部には近世以降の干拓地が鱗状に広がっており、河口には干潟が発達している。

本書所収の矢加部町屋敷の所在する矢加部地区は柳川市の北東端の微高地上に展開する村矢加部集落の南西にあり、調査地点の町矢加部は県道23号線沿いに所在する。蒲船津西ノ内遺跡・蒲津水町遺跡の所在する蒲船津地区は柳川市中心部の東に位置する。蒲船津西ノ内遺跡は微高地の中心部の国道443号沿いにあり、蒲津水町遺跡は沖端川と二ツ川に挟まれた自然堤防上に位置する。

歴史的環境

柳川市域では旧石器・縄文時代の遺跡は確認されておらず、集落が進出したのは弥生時代前期末以降である。市北部では蒲池遺跡群(注１)を拠点的な集落として、中期には微高地上に小集落が点在していたようだ。西蒲池扇ノ内遺跡(注２)では支石墓の上石と見られる巨石が発見されており、三島神社楼門前の石橋に使用された１枚石もこの巨石の１つといわれている。このほかに発掘調査の行われた弥生時代の遺跡としては、中期の磯鳥フケ遺跡(注３)や、後期の蒲船津江頭遺跡(注４)があり、後者では礎板が伴う掘立柱建物跡が多数検出されている。

古墳時代・古代の遺跡は散布地があるものの、実態のわからないものが多かったが、近年の有明海沿岸道路建設に伴う発掘調査によりわずかながら当該期の遺跡が発見されている。律令制下には市北部は三潴郡、市南・東部は山門郡に属したであろうが、その境界は不明である。平安時代に入ると柳川市東部の三橋町域は瀬高下庄に属しているが、一部は瀬高横手庄であった可能性もある。

遺跡が増加するのは中世になってからである。柳川市北部地域には、蒲池氏の居城である蒲池城が造られ、城の西には東蒲池門前・西門前遺跡(注５)、南からは中世前期の東蒲池大内曲り遺

跡(注６)・東蒲池榎町遺跡(注７)が確認されている。その他にも中世後期の矢加部南屋敷遺跡(注８)などの集落や、西蒲池古塚遺跡・下里遺跡・将監坊遺跡・古溝遺跡、坂井長永遺跡など西蒲池地区で条里跡が発見されている(注９)。

戦国時代末期には、蒲池地区を本拠地として勢力を持っていた蒲池氏が滅亡し、天正15(1587)年立花宗茂が立花城から柳川城に移り、三潴・下妻・山門の三郡を支配した。立花氏はその後関ヶ原の戦いで西軍に与して改易となり、替って田中吉政が筑後国主となり、慶長６(1601)年に入国した。

田中吉政は「慶長本土居」の建設、掘割の掘削、街道整備などの多くの土木事業を行い、領国整備に努めた。慶長本土居は、慶長７年(1602)に柳川市大和町鷹尾から大川市酒見に及ぶ堤防を補強した総延長32キロメートルに及ぶ干拓堤防で、この「慶長本土居」を起点として、その後の干拓が行われることになる。掘割は、飲用、農業用、舟運や戦時の防衛の目的で整備しており、市内の水路の総延長は、実に470キロメートルものぼる。この掘割が現在の「水郷柳川」の景観を形成している。

本遺跡の中央を走る県道23号線は、「久留米柳川往還」と呼ばれる街道であり、田中吉政が整備

1 矢加部町屋敷遺跡	15 蒲池焼窯跡	29 逆井出遺跡	43 一本松遺跡	57 新町遺跡
2 矢加部五反田遺跡	16 三島神社貝塚	30 浮島天神遺跡	44 赤太郎遺跡	58 細工町遺跡
3 矢加部南屋敷遺跡	17 蒲池遺跡群	31 内新開遺跡	45 松の木三十六遺跡	59 坂本町遺跡
4 玉垂命神社遺跡	18 西蒲池下里遺跡	32 西馬場遺跡	46 サヤモト遺跡	60 柳川城跡
5 阿弥陀屋舗遺跡	19 扇ノ内遺跡	33 江崎城跡	47 中村遺跡	61 国指定名勝松濤園
6 磯鳥フケ遺跡	20 西蒲池古溝遺跡	34 垂見古墳	48 大藪条里遺跡	62 県指定建造物戸島邸
7 東小路遺跡	21 西蒲池将監坊遺跡	35 垂見遺跡	49 天満宮遺跡	63 国指定名勝戸島氏庭園
8 南矢ヶ部遺跡Ⅰ	22 西蒲池古塚遺跡	36 垂水城跡	50 江鶴遺跡	64 東蒲池西門前遺跡
9 南矢ヶ部遺跡Ⅱ	23 坂井長永遺跡	37 大坪遺跡	51 上久末城跡	65 東蒲池畠中遺跡
10 東蒲池榎町遺跡	24 蒲船津江頭遺跡	38 白鳥城跡	52 場口遺跡	66 浦田遺跡
11 東蒲池大内曲り遺跡	25 蒲船津水町遺跡	39 東中道遺跡	53 田脇昭代地区条里遺跡	67 池田遺跡
12 東蒲池蓮池遺跡	26 蒲船津西ノ内遺跡	40 地蔵堂遺跡	54 条里跡	68 池淵遺跡
13 東蒲池門前遺跡	27 徳益八ッ枝遺跡	41 ヘータカサン遺跡	55 慶長堤防	69 蒲船津西古賀遺跡
14 蒲池城跡	28 今古賀城跡	42 日渡遺跡	56 玉垂命神社遺跡	70 下百町鬼童遺跡

柳川城郭関連遺跡

第３図　周辺遺跡分布図(1/50,000)

したことから「田中道」とも呼ばれる。三橋町の柳河地区では、道路の両側に大きな溝を伴う旧状が残された部分を見ることができる。

田中氏改易後、筑後国は柳川藩と久留米藩に分断され、柳川藩は立花氏が、久留米藩は有馬氏が領有した。本遺跡の所在する矢加部地区は藩境となり、街道上に関所と藩境木が設置された。現在も藩境木跡の石碑が残されている。

注

1．福岡県教育委員会1978『福岡県遺跡等分布地図』(大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編)
2．前掲注１
3．柳川市教育委員会2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第１集
4．福岡県教育委員会2009『蒲船津江頭遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第６集
福岡県教育委員会2010『蒲船津江頭遺跡Ⅱ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第８集
福岡県教育委員会2011『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第10集
5．福岡県教育委員会で整理中
6．福岡県教育委員会2007『東蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第２集
7．福岡県教育委員会2005『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集
8．福岡県教育委員会2009『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第５集
9．福岡県教育委員会2009『坂井長永遺跡(１・２次)　西蒲池古塚遺跡(１～４次)　西蒲池将監坊遺跡(１・２次)　西蒲池古溝遺跡　西蒲池下里遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵　文化財調査報告第６集

矢加部町屋敷遺跡Ⅳ

５次調査の出土遺物
１次調査
まとめ

Ⅲ．調査の内容

１．矢加部町屋敷遺跡５次調査の出土遺物

５次調査の遺構については既報告の『矢加部町屋敷Ⅲ』で掲載しており、本書では出土遺物について報告する。５次調査では、土坑25基、大土坑１基、溝状遺構３条などを検出した。『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』において遺構だけを先に掲載しているが、出土遺物の説明の前に各遺構の時期のみ再度挙げておきたい。

１号土坑はせんじ碗と広東碗があるので18世紀後半から19世紀初頭である。

２号土坑は出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は特定できない。

３号土坑は４号土坑を切り、出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は半球形の無文磁器碗が出土していることから18世紀前葉から中葉である。

４号土坑は３号土坑に南部を切られ、東部を５号土坑に切られる。北側は４次調査東区に延び、４次調査の93号土坑に繋がる。出土遺物が少ないが、身の深い赤絵の腰丸碗が出土しているので18世紀中葉だろう。

５号土坑は４次調査の93号土坑に繋がる。南部を１号土坑に切られている。出土遺物はわずかだが、４号土坑を切ることと、氷裂文を地文とする菊花文染付から18世紀中葉だろう。

６号土坑は南東隅を７号土坑に切られる平面隅方形プランで、北側は４次調査東区に延びており、４次調査94号土坑を繋がる。出土遺物はわずかだが、出土した三島手の象嵌入り陶器鉢の口縁部形態から、年代は18世紀前半だろう。

７号土坑は出土遺物はわずかで、小片が多い。１・６号土坑に切られ１号溝状遺構を切ることから、18世紀中葉から19世紀中葉の間である。

８号土坑は出土遺物はわずかで、小片が多い。小型甕の口縁部形態から17世紀後半から18世紀代だろう。

９号土坑は12号土坑を切る長方形の土坑である。遺物がほとんど残っていなかったので時期を特定できない。

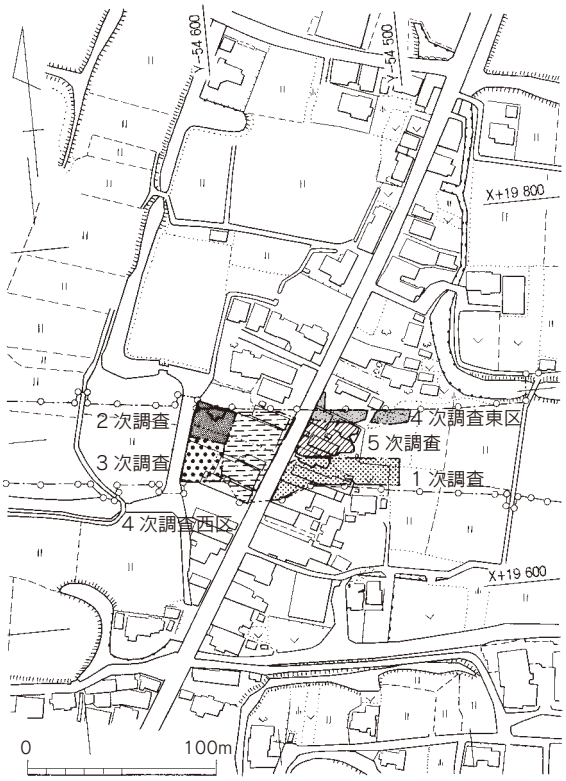
10号土坑は11号土坑に西端を切られて、平面略方形プランで、遺物がほとんど残っていなかったので確実性が弱いが19世紀代か。

11号土坑は10号土坑を切る長方形プランで、無文の壁が直線的に緩やかに立ち上がる磁器碗が出土していることから18世紀代か。

12号土坑は１号大土坑を切り、９号土坑に北西隅を切られる。多条縞文の染付が入る蓋物が出土していることから18世紀後半か。

13号土坑は14号土坑を切る。型紙刷の端反碗染付が出土しているので19世紀中葉である。

14号土坑は13号土坑・２号溝状遺構に切ら



第４図　矢加部町屋敷遺跡調査範囲図(1/4,000)

れる。口縁下に突帯が付く摺鉢や京焼風陶器が出土していることや、内面口縁の肥厚が退化していることから18世紀前葉である。

15号土坑は出土遺物はわずかで小片が多く、年代が特定できない。

16号土坑は南東部は別の土坑かもしれない。出土遺物はわずかで小片が多いが、内面口縁部に袈裟襷文の入る筒形碗があるので18世紀後半だろう。

17号土坑は１号溝状遺構に近接しているが、切り合いは不明確だった。外面口縁部下に突帯が付くタイプと外面口縁部が肥厚するタイプの摺鉢が出土していることから、18世紀中葉である。

18号土坑は口縁部が玉縁状の摺鉢があり、せんじ碗が出土していることから18世紀初頭だろう。

19号土坑は北西隅をピットに切られ、南側を現代の井戸に切られており、鉄釉を内外に掛ける小型碗が出土しているので、17世紀末から18世紀後葉である。

20号土坑は南側を現代の井戸に切られており、21号土坑を切る。年代は台付皿から18世紀初頭から後葉である。

21号土坑は西側を20号土坑に切られており、１次調査29号土坑と同一遺構である。径の小さい平底の摺鉢が出土しているので、17世紀後半の遺構である。

22号土坑は遺物もほとんど残っていなかったが、18世紀中葉か。

23号土坑は18世紀中葉から19世紀中葉の口縁外面肥厚で、高台の付く摺鉢が出土しており、せんじ碗があることから18世紀中葉だろう。

24号土坑は口縁部が長い玉縁形に肥厚する摺鉢が出土していることから、17世紀後半代だろう。

25号土坑は当初24号土坑と一緒に掘り下げており、その途中で別遺構とわかったため、切り合いは不確実である。年代は特定できない。

１号大土坑は４次調査東区100・101号土坑に繋がる。12号土坑に切られており、南部には黒色土が厚く堆積しておりこれを南部上層として取り上げたが18世紀中葉から後葉の遺物の中に燻し瓦が見られた。出土遺物には18世紀前葉から中葉のものが多く出土しており、この時期に属する遺構である。19世紀中葉の遺物も一定量あるが、上層出土である。大正10年銘１銭銅貨は検出段階に上面にあったコンクリート基礎の掘り込み時の混入品だろう。

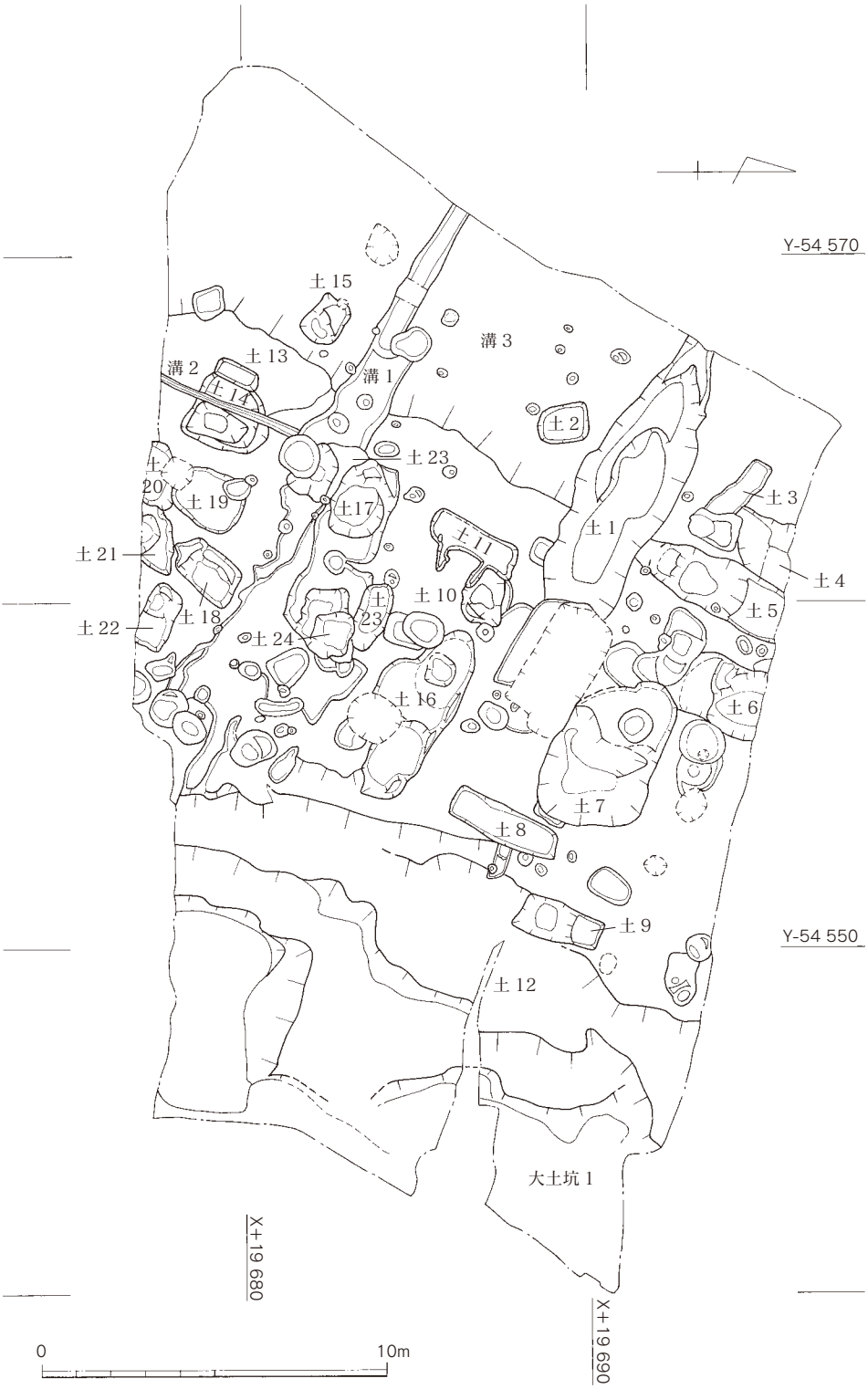
１号溝状遺構は３号溝状遺構を切り、２号溝状遺構は垂直方向に走るが、切り合いは不鮮明だった。17・23・24・25号土坑に切られていることと、草花文のモチーフから17世紀後葉から18世紀初頭のものと考えられる。

２号溝状遺構は14号土坑を切ることから、18世紀後半代の可能性が高い。

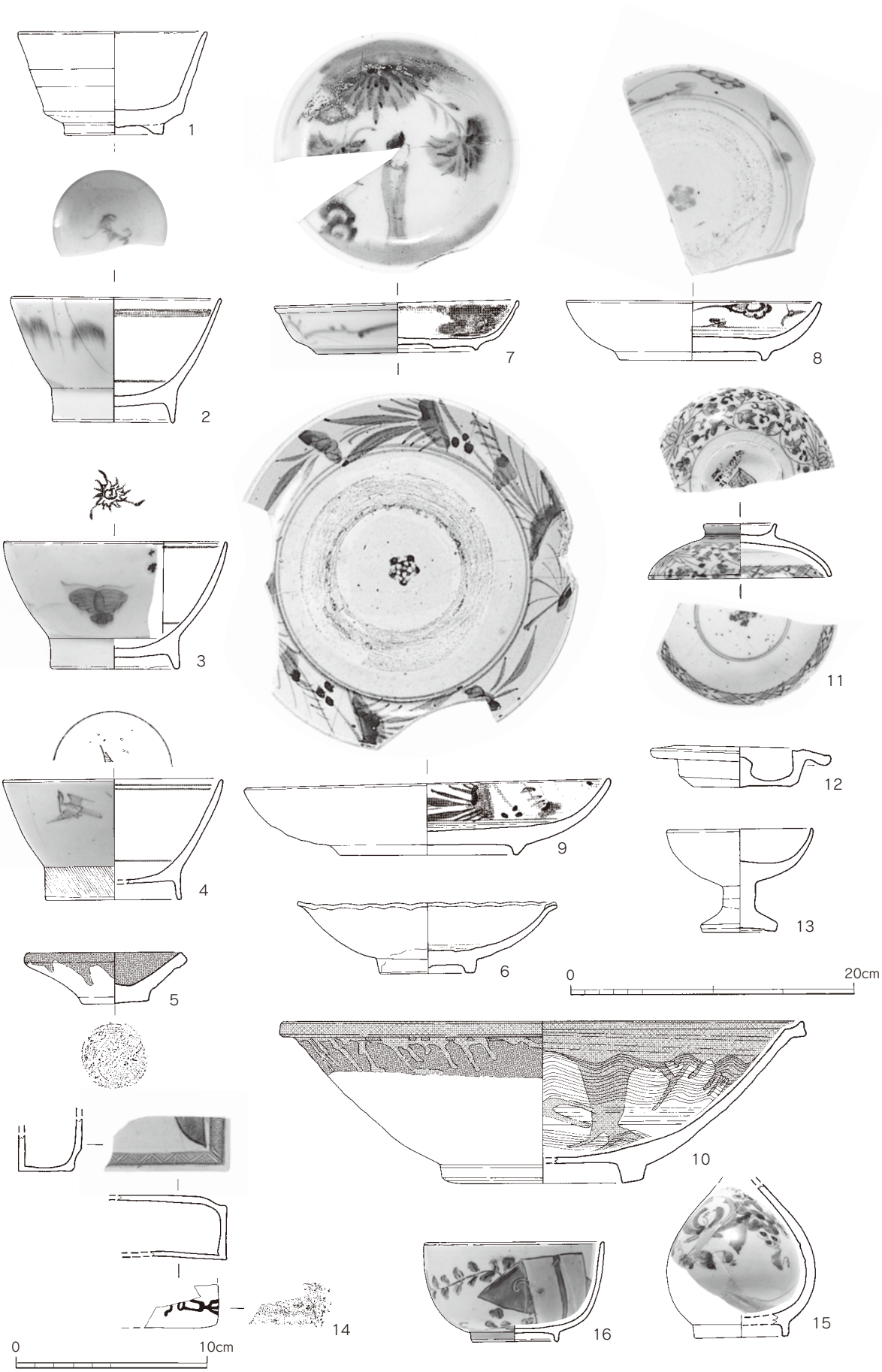
３号溝状遺構は２・15号土坑、１号溝状遺構に切られている。大振りの草花文碗や崩れた雨振り文碗が出土しており、17世紀後葉から18世紀初頭の１号溝状遺構に切られるので、17世紀後葉から末には完全に埋没している。

これより、出土遺物の説明を行うが、個々の遺物については観察表を掲載しているので、追記するべき事項のある遺物についてのみ記述する。

６図２は広東型の染付碗で、口縁部の窪んだ部分に別個体の融着があるので、焼成時に隣接する別個体に押されたために窪んだものとわかる。６図４は広東型の染付碗で、ハケ状の沈線が高



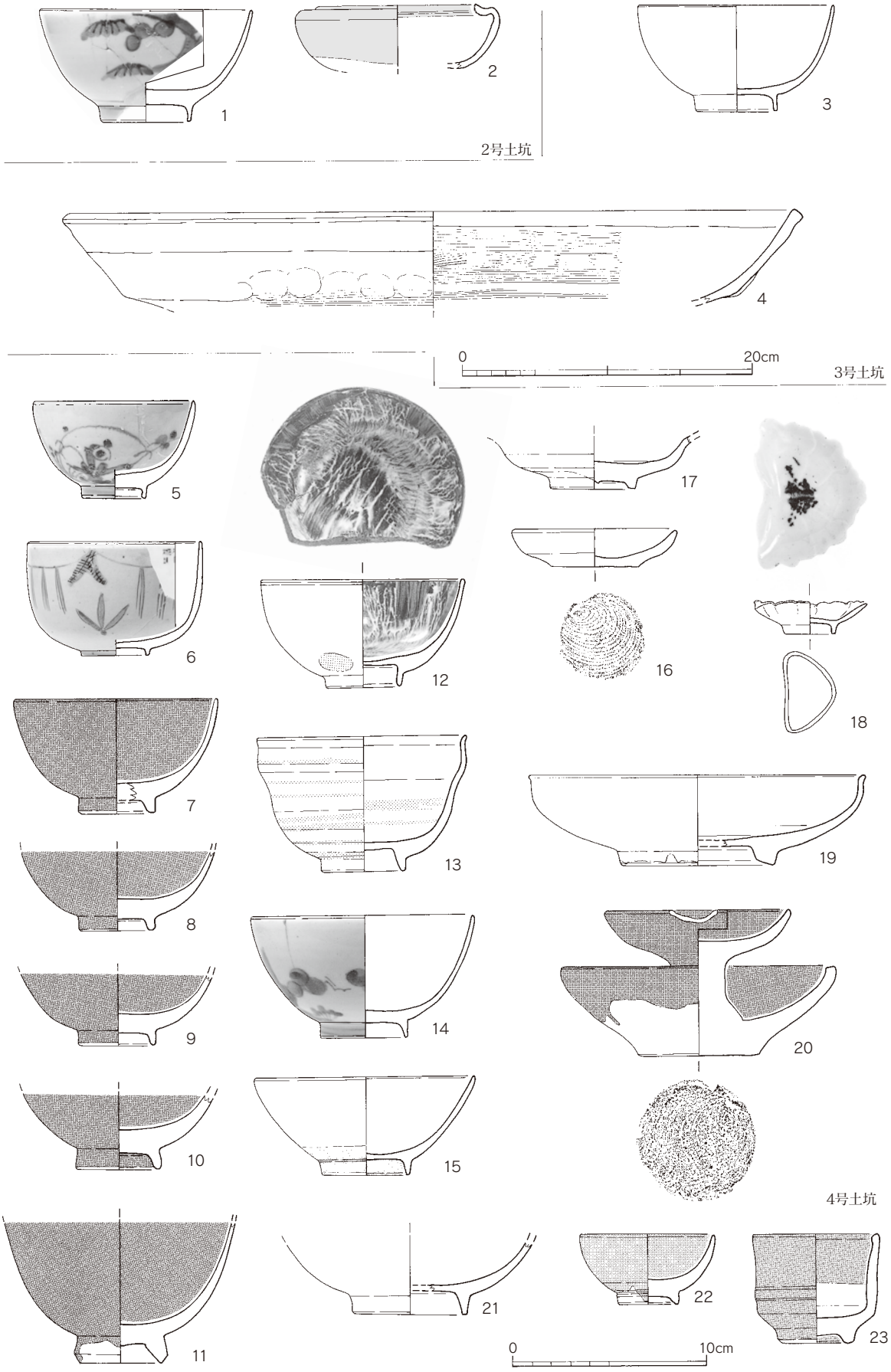
第５図　矢加部町屋敷遺跡５次調査遺構略配置図(1/200)



第６図　５次調査１号土坑出土陶磁器実測図（10は1/4、他は1/3）

表２　５次調査出土土器・陶磁器観察表１

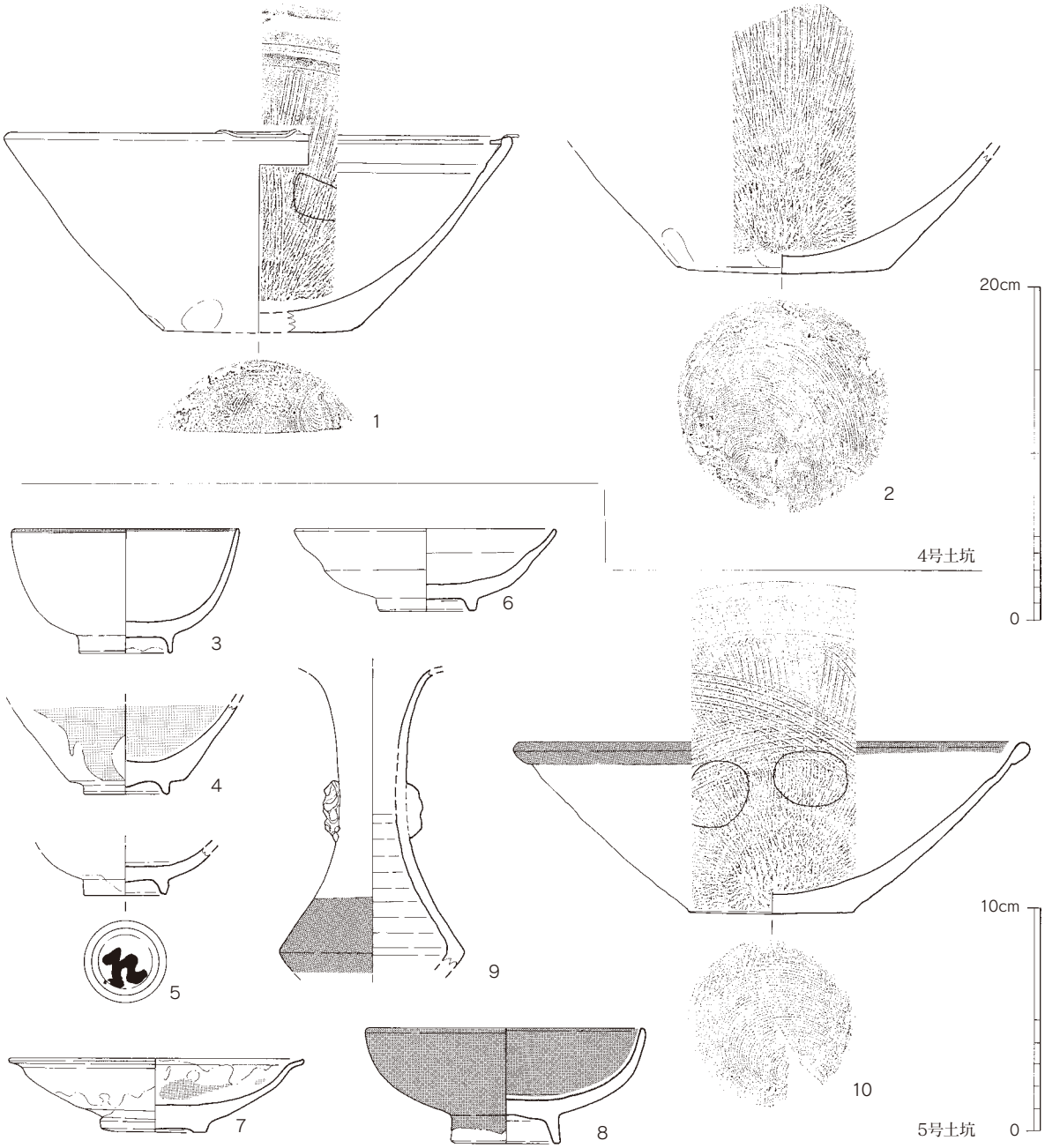
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
土坑１ ６図１	碗 杉形	口径(10.0) 高台径(5.2) 器高5.4	陶器 黄灰白色	黄灰色の灰釉を内面から外面胴下位まで貫入あり	無文 高台内削り出し	底部露胎	高台内に焼成時のひびあり	肥前	18世紀中葉
土坑１ ６図２	碗 広東形	口径(11.1) 高台径6.4 器高6.5	磁器 灰白色	青みがかった透明釉を全面に掛ける	外面に亀文と柳文、見込みに蝙蝠文を染付　呉須に滲みあり	畳付釉剥ぎ	外面に別個体の融着片あり	肥前	19世紀前葉
土坑１ ６図３	碗 広東形	口径(11.4) 高台径6.7 器高6.6	磁器 灰白色	青みがかった透明釉を全面に掛ける	外面に蝶文と薊文、見込みに火炎宝珠文を染付　呉須に滲みあり	畳付釉剥ぎ		肥前	1780 ～ 1810
土坑１ ６図４	碗 広東形	口径(11.6) 高台径(7.2) 器高6.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に水鳥文、見込みに不明文を染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀前葉
土坑１ ６図５ 図版１	小皿	口径8.0 底径3.5 器高2.7	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面口縁部まで塗布　底部糸切り		底部露胎	完形　歪みあり	肥前	不明
土坑１ ６図６	小皿 花弁形口縁	口径(13.6) 高台径5.0 器高3.7	陶器 白灰色 軟質	飴釉を内面から外面に胴下位に掛ける	高台削り出し	底部露胎　見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前か	不明
土坑１ ６図７	小皿	口径12.8 高台径8.4 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面は食物と人物文を呉須染付	蛇ノ目高台で、台部釉剥ぎ	台部に砂目付着　内面に付着物あり	肥前	1780 ～ 1860
土坑１ ６図８	小皿 ５寸皿	口径13.6 高台径7.8 器高3.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面無文、内面崩れた菊唐草文、見込みに５弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	1820 ～ 1860
土坑１ ６図９	中皿	口径19.2 高台径9.4 器高3.9	磁器 灰白色	発色不良で黄色がかった透明釉を全面に掛ける	内面に花草文、見込みに５弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	見込みに重ね焼き痕あり	波佐見	1750 ～ 1810
土坑１ ６図10	鉢	口径(36.6) 高台径14.2 器高11.4	陶器 橙褐色	外面口縁部下に鉄釉掛け、内面全面に白化粧土を塗布した後に櫛状掻き取り　その上に内外口縁部にオリーブ色の灰釉を緑灰色の灰釉を体面に掛け流し、最後に外面口縁下を釉剥ぎ		底部露胎		肥前	1690 ～ 1750
土坑１ ６図11	蓋	裾径9.5 つまみ径3.8 器高2.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花唐草文、内面胴部は袈裟襷文帯、内面天井部に５弁花文、裏銘は角福を呉須染付	つまみ上端釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
土坑１ ６図12	蓋 土瓶蓋	裾径9.6 つまみ径1.4 器高2.1	陶器 暗紫灰色	鉄釉　上面 光沢あり	無文	つまみ上端釉剥ぎ	内面は使用のため黒く変色	肥前	19世紀前半
土坑１ ６図13	仏飯器	口径7.5 裾径3.8 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	底部釉剥ぎ	８割残存	肥前	1690 ～ 1780
土坑１ ６図14	水滴	—	磁器 灰白色	透明釉を外面に掛ける	上面外縁に鋸歯文帯、その内側に葉の一部が見られる　板作りで、上面のみ型押し、内底は布目が残る	不明	内面は墨で変色している	肥前	不明
土坑１ ６図15	小型瓶 仏花瓶	高台径(5.0) 最大径(7.8)	磁器 灰白色	透明釉を外面に掛ける	外面に熨斗・葡萄文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1650 ～ 1860
土坑１ ６図16	蓋物	口径9.4 高台径4.6 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	藤状の植物文と草紙文状のモチーフを赤・黒・緑彩で上絵付け　見込みのアルミナ塗布は重ね焼きのためか	底部釉剥ぎ 内面口縁部釉剥ぎ	９割残存	肥前	1650 ～ 1690
土坑２ ７図１	碗	口径11.0 高台径4.8 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉	外面は松文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	４割残存	肥前	1700 ～ 1740
土坑２ ７図２	鉢	口径(8.2) 最大径(10.6)	陶器 黄白灰色 軟質	飴釉を内面口縁部から外面胴下位に掛ける	口縁部が窪むのが意図的なものかは不明	不明		肥前か	不明
土坑３ ７図３	碗	口径(10.2) 高台径4.2 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1680 ～ 1700
土坑３ ７図４	焙烙	口径(51.0)	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外面口縁下はナデ、肩部はオサエ後ナデ、胴部はハケ、内面は丁寧なハケ	不明	内面は変色なし、外面は煤付着	在地	不明
土坑４ ７図５	小型碗	口径8.4 高台径3.3 器高5.0	磁器 灰白色	暗黄色がかった透明釉全面掛け	外面に草文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
土坑４ ７図６	碗 半球形	口径9.0 高台径3.4 器高5.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良	外面に赤絵で注連縄文に羽子板と花文、緑彩で葉文を上絵付け	不明		肥前	1780 ～ 1810
土坑４ ７図７	碗	口径(10.6) 高台径(4.0) 器高5.9	陶器 黄灰白色	黒釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑４ ７図８	碗	高台径3.9	陶器 灰白色	黒釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780



第７図　５次調査２～４号土坑出土土器・陶磁器実測図（４は1/4、他は1/3）

台外面にある。６図６は花弁形口縁の白磁の小皿で、見込みに重ね焼きの痕跡あり。胎にややざらつきがあることから、肥前産でない可能性もある。６図８は染付の５寸皿で、高台内部にカンナ痕が残る。６図９は染付の中皿で、見込みの重ね焼きの痕跡は幅が広く、高台径が異なるので、別の種類の個体を重ねたとわかる。６図14は水滴で、内面の底面には板作りの際の布目跡があり、そこに墨書がある。判読できないが、成形した後では書くことができないうえに、人目に触れることもなくなるので、陶工が書いたものだろう。

７図２は蓋物の鉢で、口縁が窪むのは意図的なものではなく焼成時のへたれの可能性もある。７図４は土師質土器の焙烙で実測図は接合しない２個体の図上接合である。７図15は陶器の碗で、胴下位から外底に鉄釉ではなく鉄漿が掛かる。７図16は土師質の小皿で、火を受けて赤変



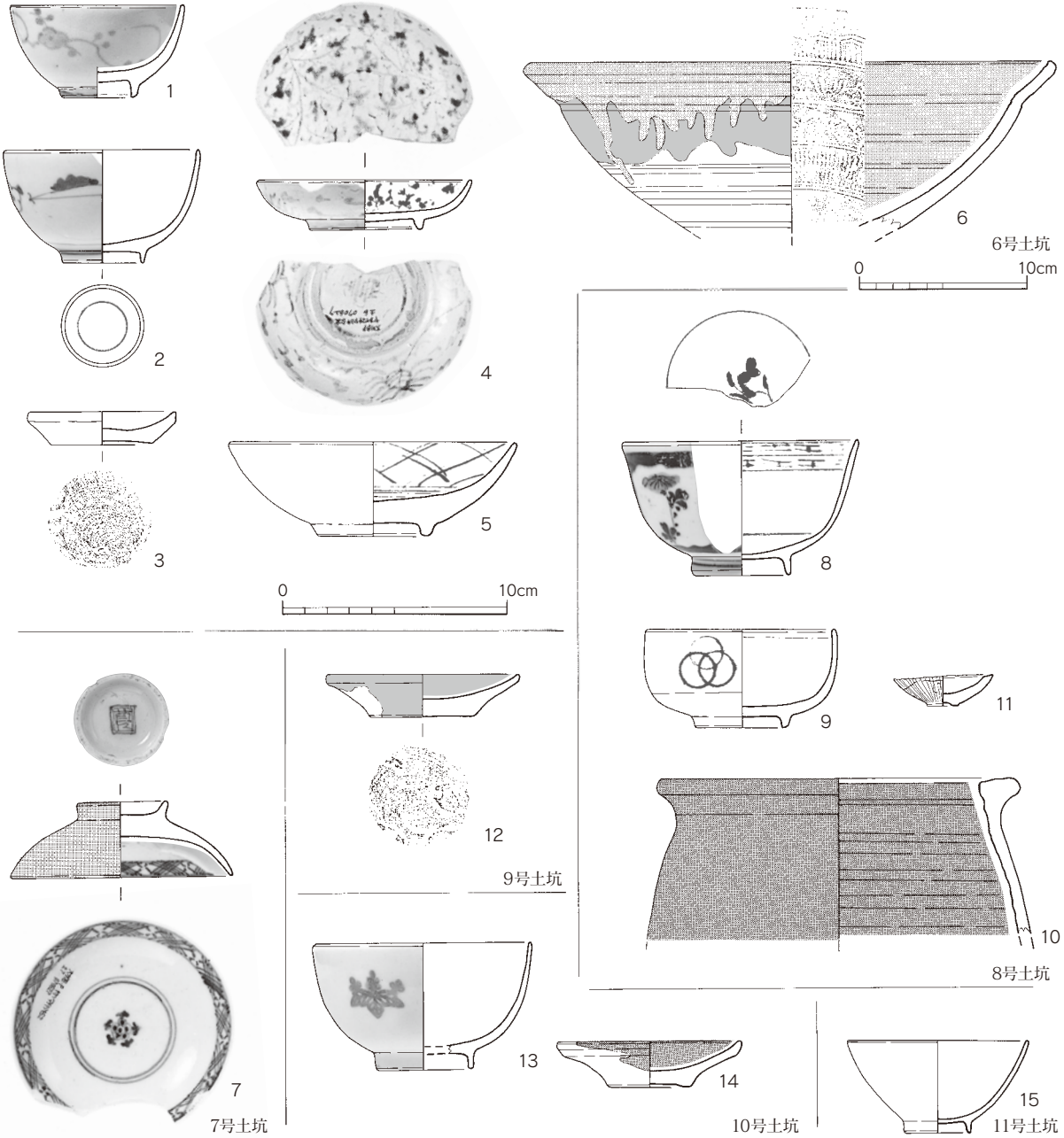
第８図　５次調査４・５号土坑出土陶磁器実測図(1・2・10は1/4、他は1/3)

表３　５次調査出土土器・陶磁器観察表２

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) （ ）は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
土坑４ ７図９	碗	高台径4.0	陶器 灰白色	黒釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑４ ７図10	碗	高台径4.4	陶器 灰白色	黒釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑４ ７図11	碗 呉器手	高台径4.2	陶器 灰白色	黒釉を高台以外全面に掛ける	無文	高台露胎		肥前	1690 ～ 1780
土坑４ ７図12	碗 蛍手	口径10.1 高台径4.0 器高5.6	陶器 暗茶褐色	白化粧土を外面は丸文、内面は打ち刷毛目掛けした後、透明釉を全面に掛ける		畳付釉剥ぎ		現川焼	1690 ～ 1740
土坑４ ７図13	碗 折湾形	口径(10.8) 高台径4.4 器高6.9	陶器 暗黄灰白色	内外面白化粧土を刷毛掛けした後、透明釉を全面に掛ける		畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑４ ７図14	碗	口径(11.6) 高台径4.6 器高6.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に樹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1740
土坑４ ７図15	碗	口径11.5 高台径4.6 器高5.0	陶器 黄灰白色	内面から外面胴下位まで透明釉を掛け、胴下位から高台まで鉄漿塗布		畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀前半
土坑４ ７図16	小皿	口径(8.4) 底径4.5 器高1.9	土師質土器 黄橙灰～橙色	－	外底糸切り	不明	５割残存 赤変している	在地	不明
土坑４ ７図17	小皿	高台径4.4	陶器 灰白色	オリーブ色の灰釉を高台以外全面に掛ける	外底削り出し	底部露胎 見込み蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑４ ７図18	小皿 変形小皿 蝶形	長軸7.9 短軸5.6 器高1.6	磁器 完形のため不明	透明釉　全面	内面に羽の筋が型押し陽刻され、中央に呉須掛け、高台は隅丸三角形 糸切り細工の型押し成型	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	不明
土坑４ ７図19	中皿	口径17.4 高台径8.0 器高4.7	陶器 濃黄灰白色	黒釉を全面に掛ける	高台横に獣脚あり	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	不明
土坑４ ７図20	灯明受皿	口径9.6 最大径14.2 底径6.4	陶器 暗橙色	鉄釉を内面から裾まで	外底は糸切り 口縁部の打ち欠いた部分が黒く変色している	胴下半露胎		肥前	不明
土坑４ ７図21	碗	高台径5.8	陶器 黄灰白色	内外面白化粧土を刷毛掛けした後、透明釉を高台以外全面に掛ける　貫入あり		底部露胎 見込み蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	1650 ～ 1690
土坑４ ７図22	小型碗	口径7.0 高台径3.2 器高3.6	陶器 灰白～橙灰白色 で軟質	オリーブ色の灰釉を全面に掛け、口縁部に２度掛け		畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑４ ７図23	小型鉢 香炉か	口径6.6 高台径4.0 器高5.6	磁器 灰白色	緑釉を内面胴中位から外面全面に掛ける	外面に帯状の突帯あり 口縁部は内側に返りがつく	畳付釉剥ぎ・砂目跡付着		肥前	不明
土坑４ ８図１	摺鉢	口径(30.4) 底径(12.0) 器高12.0	陶器 橙～暗紫灰色	無釉	内側に折り返す口縁部の一部を逆に外側に返して注口を作る　内面摺り目11本単位　外底糸切り	底部露胎　外面胴下位と見込みに胎土目跡２つあり		肥前	1620 ～ 1650
土坑４ ８図２	摺鉢	底径12.8	陶器 暗橙褐色～暗紫灰色	無釉	内面摺り目12本単位　外底糸切り	底部露胎　外面胴下位に胎土目跡７つあり　見込みは不鮮明		肥前	1620 ～ 1690
土坑５ ８図３	碗	口径10.2 高台径4.2 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	口錆あり	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
土坑５ ８図４	碗 杉形	高台径3.8	陶器 にぶい灰黄白色	暗茶褐色の灰釉を内面から外面胴中位に掛ける	無文　高台内削り出し	高台露胎		肥前	1650 ～ 1690
土坑５ ８図５	小皿 ５寸皿	高台径3.8	陶器 灰色	透明釉を全面に掛ける	外底に墨書あり	底部露胎 見込み蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	不明
土坑５ ８図６	小皿 ５寸皿	口径11.8 高台径4.4 器高3.7	陶器 黄灰白色	透明釉を高台以外の全面に掛ける		高台露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑５ ８図７	小皿 ５寸皿	口径13.2 高台径4.7 器高3.3	陶器 灰白色	発色不良で灰白がかる透明釉を高台以外の全面に掛け、緑灰色の灰釉を流し掛け		高台露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ部に胎土目跡４つあり		肥前	1690 ～ 1780
土坑５ ８図８	碗	口径(12.6) 高台径4.9 器高5.2	陶器 灰白色	黒釉を高台以外全面に掛ける	無文　高台内削り出し	高台露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ部に鉄漿塗布		肥前	不明
土坑５ ８図９	瓶 仏花瓶	最大径8.2	陶器 灰白～橙灰白色	胴部に鉄釉を掛けた後、透明釉を頸部から胴部上位に掛ける 側面の耳はモチーフが崩れている		－	透明釉は発色不良で灰白色	肥前	1650 ～ 1690
土坑５ ８図10	摺鉢	口径(31.0) 底径10.0 器高10.3	陶器 暗赤紫灰色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目12本単位　外底糸切りで、外縁をナデている	底部露胎　外面胴下位と見込みに胎土目跡８つあり		肥前	1650 ～ 1690

しているが、焼成時のものか２次的加熱によるものか不明である。７図17は陶器の小皿で、見込みの蛇ノ目釉剥ぎの重ね焼き痕部分に釉が付着している。７図19は陶器の中皿で、蛇ノ目釉剥ぎ部は黒釉の残りのため茶褐色を呈しているのであって、鉄漿塗布ではない。重ね焼き痕跡の部分に釉が付着している。７図20は陶器の灯明受皿で、大型の特異なものだが、胎は肥前のものである。口縁部の打ち欠いた部分が黒く変色しているので、本来注口が付いていた部分が欠損した後も使用している。

８図1･2は陶器の摺鉢で、１は通常この器形ならば口縁部に鉄釉が掛かるが、間違いなく鉄釉がない。８図５は陶器の碗で、外底に墨書が入るが、判読できない。８図７は陶器の小皿で、畳付に胎土目跡の痕跡が４つわずかに残る。８図９は仏花瓶で、焼成不良で、一部赤化している。



第９図　5次調査 ６～11号土坑出土陶磁器実測図（６は1/4、他は1/3）

表４　５次調査出土土器・陶磁器観察表３

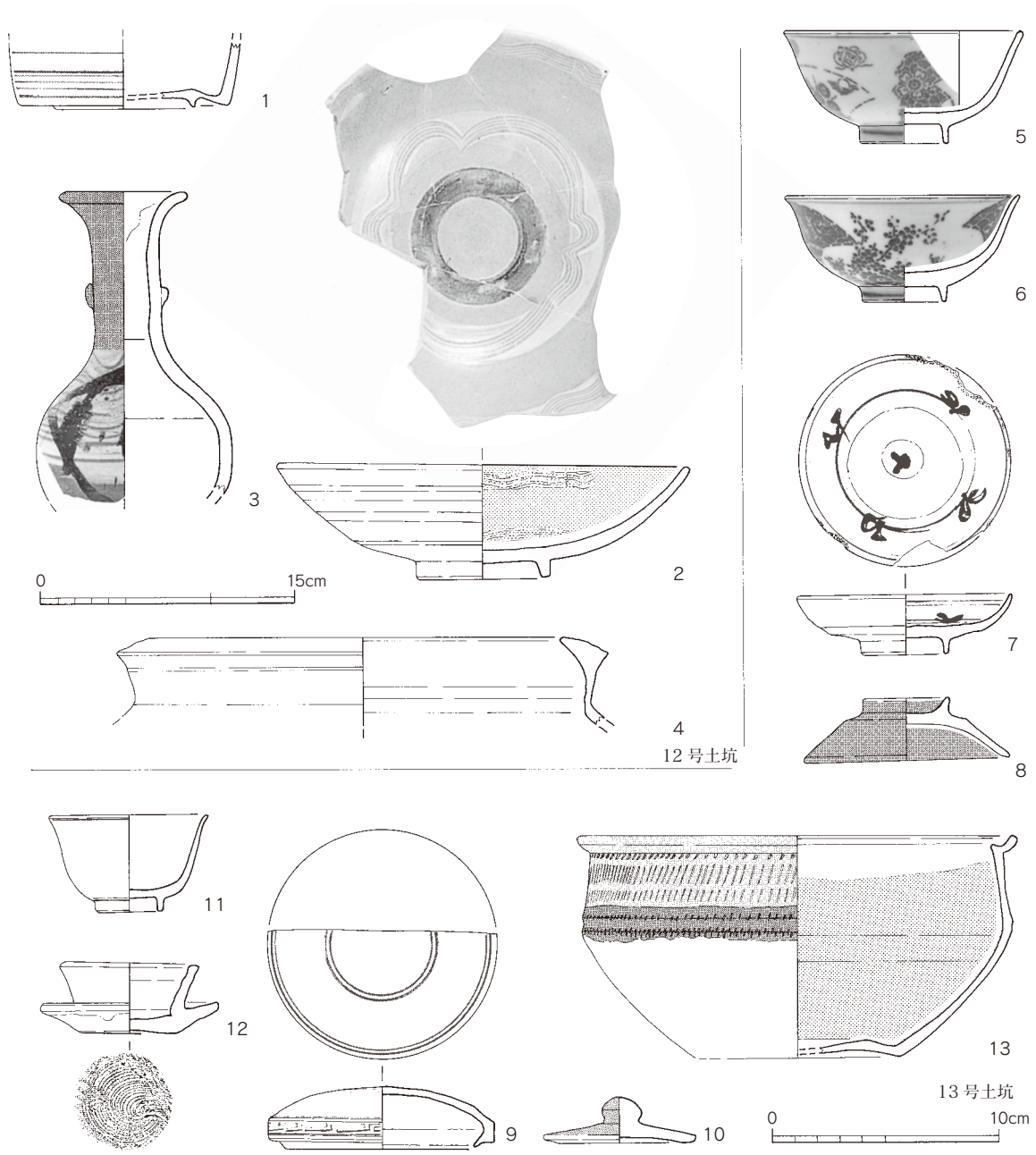
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
土坑６ ９図１	小碗	口径7.8 底径3.4 器高4.2	磁器 完形のため不明	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面に梅樹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	完形	波佐見	1750 ～ 1770
土坑６ ９図２	小碗	口径(8.8) 高台径3.6 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に梅花文と折松葉文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 砂目跡付着		肥前	1690 ～ 1720
土坑６ ９図３ 図版１	小皿	口径6.6 底径4.6 器高1.6	土師質土器 にぶい暗黄灰色	－	外底糸切り	不明	ほぼ完形 底面が黒変している	在地	不明
土坑６ ９図４	小皿	口径(9.6) 高台径5.0 器高2.2	磁器 灰白色	発色不良の透明釉を全面に掛ける	内面に花唐草文、外面に火炎宝珠文、裏銘に寿を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1730
土坑６ ９図５	小皿 ５寸皿	口径(12.8) 高台径5.0 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良	内面に２重斜格子文を呉須染付　呉須は発色不良	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ部にアルミナ塗布		波佐見	1750 ～ 1810
土坑６ ９図６	皿	口径(32.0)	陶器 橙褐色	内面は三島手の象嵌　外面体部下半に鉄漿ハケ掛け、発色不良で灰白～灰白褐色を呈する釉が内面から外面口縁部に掛けられている		－		肥前	不明
土坑７ ９図７	蓋	裾径9.9 つまみ径4.2 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉を内面と高台内に、外面に青磁釉を掛ける	外面は無文、内面口縁部は袈裟襷文帯、内面天井部に５弁花文、裏銘は二重圏に「　」薔呉須染付	つまみ上端釉剥ぎ		肥前	1770 ～ 1780
土坑８ ９図８	碗 端反形	口径(10.6) 高台径4.6 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に墨引きの窓文に零芝文と欠損のため不明なモチーフが交互に描かれ、見込みにも零芝文、内面口縁部には「工」の字列が２段呉須染付されている	畳付釉剥ぎ		肥前	1850 ～ 1860
土坑８ ９図９	鉢 蓋物	口径(8.3) 高台径4.1 器高4.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に３つの円文と対面に扇文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
土坑８ ９図10	小甕	口径(16.0)	陶器 黄灰白色	内外に鉄釉薄掛け	内面ケズリ、外面カキ目状の横ナデ	口唇部釉剥ぎ		小石原	不明
土坑８ ９図11	紅猪口 紅皿	口径4.5 高台径1.4 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉　内面から外面口縁部	型押し成型で、外面菊花文を陽刻する	底部露胎	完形	肥前	不明
土坑９ ９図12	小皿	口径(8.6) 底径4.6 器高1.9	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面に胴中位に掛ける	外底糸切り	底部露胎		肥前	1690 ～ 1750
土坑10・16 ９図13	碗	口径9.7 高台径(4.3) 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に桐文がコンニャク印判刷り呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
土坑10 ９図14	小皿	口径(8.2) 底径3.6 器高2.1	陶器 暗橙灰褐色	鉄釉を内面から外面に胴中位に掛ける	外底糸切り	底部露胎		肥前	1690 ～ 1750
土坑11 ９図15	小型碗	口径8.0 高台径3.0 器高4.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑12 10図１	鉢 蓋物	高台径(6.0)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に縞文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	畳付が細かく剥離　へたれている	肥前	1740 ～ 1780
土坑12 10図２	小皿	口径18.0 高台径6.0 器高5.2	陶器 黄白色	内面に白化粧土を掛け、口縁部と胴下位を残して掻き取りし、残った部分を櫛状に掻き取りする。見込みは蛇ノ目状に釉を掻き取り、鉄漿を塗布する。外面にも白化粧土を掛ける。		畳付釉剥ぎ	見込みの蛇ノ目状釉剥ぎ部に胎土目跡あり	肥前	1690 ～ 1780
土坑12 10図３	瓶	口径5.7	陶器 暗橙茶褐色	胴中位まで白化粧土を刷毛掛けし、櫛状掻き取りし、飴釉を流し掛けしたうえに口縁から頸部は鉄釉を上掛け、耳は豆状で、形状を成していない。		－		肥前	1650 ～ 1690
土坑12 10図４	甕	口径(29.0)	陶器 にぶい灰色	内外鉄釉で発色不良	外面口縁部は接合部の調整不良でひびが入っている	口唇部は釉剥ぎ その上に貝目跡あり		肥前	17世紀後半
土坑13 10図５	碗	口径(10.6) 高台径4.0 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にコバルト染付で桜花文と菊花・月を描いた扇文と七宝文を描く	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	４割残存	肥前	19世紀後半
土坑13 10図６	碗	口径10.4 高台径3.8 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にコバルト染付で花文と銀杏葉形文を描く	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	９割残存	肥前	19世紀後半
土坑13 10図７	小皿 ５寸皿	口径9.4 高台径4.0 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に花弁文を染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目に釉剥ぎ後アルミナ塗布	口縁部に打ち欠きと黒変	波佐見	1680 ～ 1740
土坑13 10図８	蓋	裾径9.2 器高2.8 つまみ径3.8	磁器 灰白色	瑠璃釉を全面に掛ける	無文	つまみ部上端釉剥ぎ	裾部に打ち欠きと煤付着　９割残存	肥前	1760 ～ 1780
土坑13 10図９	蓋物蓋	裾径10.0 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に雷文、上面に界線を呉須染付	受け部釉剥ぎ		肥前	不明

８図10は陶器の摺鉢で、全体に赤みをおびているので、焼成が強すぎたためだろう。

９図４は染付の小皿で、発色不良で乳白色を呈し、釉切れも起こしている。９図６は陶器の皿で、発色不良のため釉が灰白～灰白褐色を呈しており、本来の釉調がわからない。

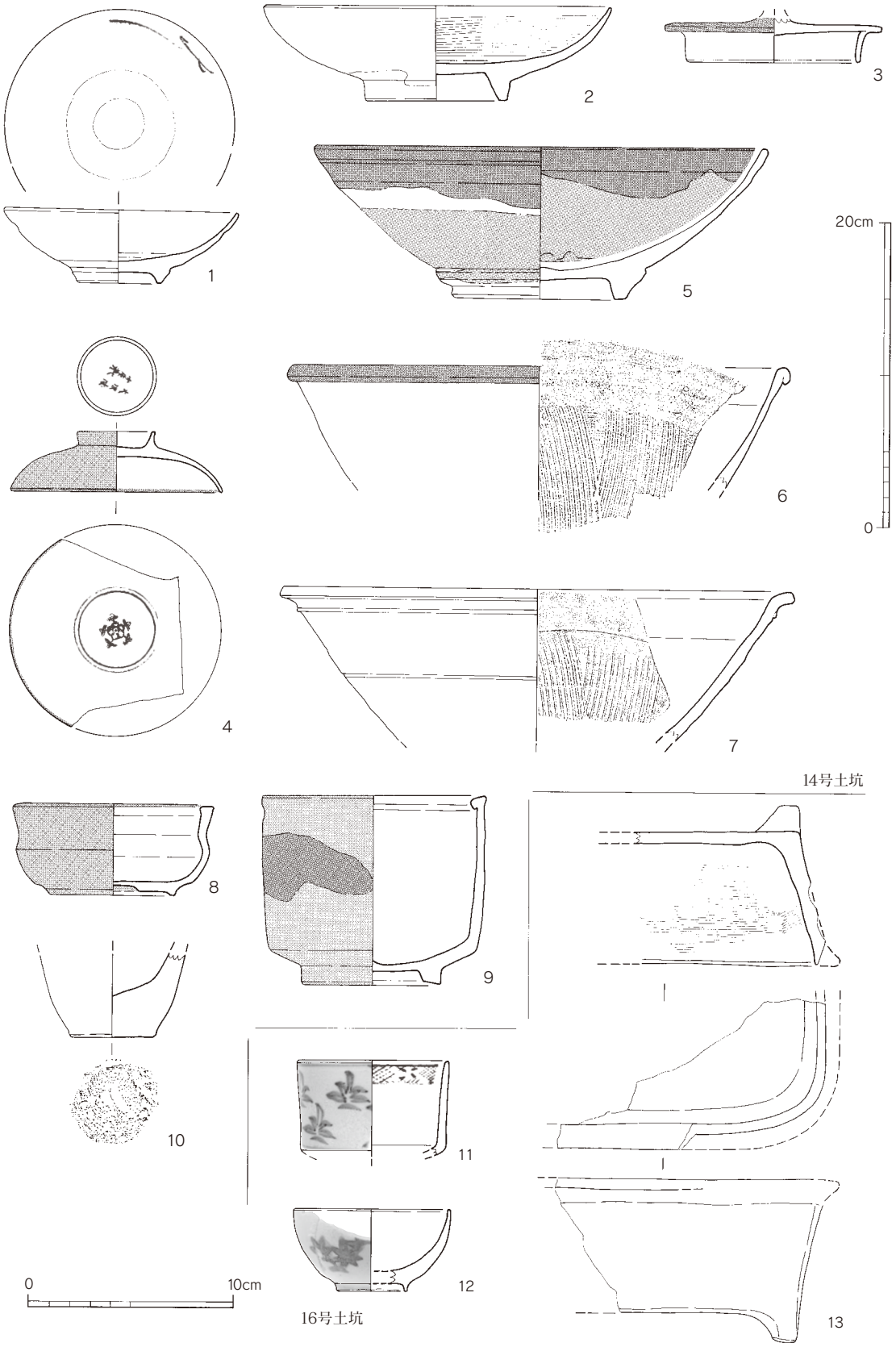
10図１は磁器の筒形碗か蓋物の鉢で、畳付が細かく剥離しているのは焼き台から外した時のものだろう。10図７は磁器の小皿で、口縁部に打ち欠き部分に黒変があるので、灯明皿として使用されている。10図８は磁器の碗蓋だが、裾部の打ち欠き部に煤が付着しているので、本来蓋だが、灯明皿として転用されたことがわかる。10図10は陶器の土瓶蓋で、いわゆる肥前の青土瓶であり、受け部の痕跡が残らない程に丁寧に打ち欠いて急須蓋状に加工している。10図13は低火度の施釉陶器の行平鍋である。把手は接合痕跡が残る。

11図３は陶器の碗で、外底に円文などの刻印はない。11図９は染付の５寸皿で、外底のハリ

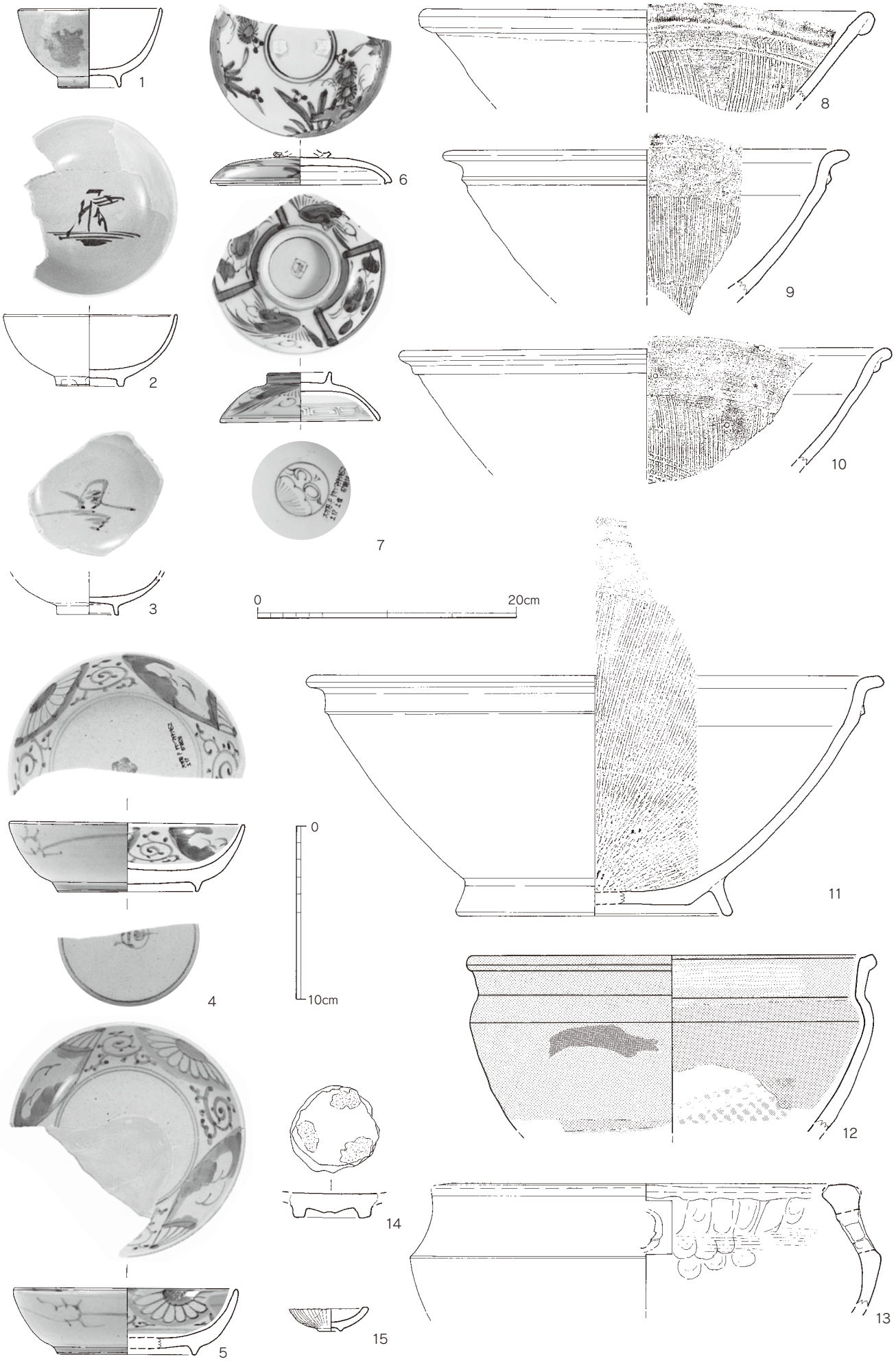


第10図　５次調査12・13号土坑出土陶磁器実測図（４は1/4、他は1/3）

第11図　５次調査14号土坑出土陶磁器実測図（11は1/4、他は1/3）



第12図　５次調査14・16号土坑出土陶磁器実測図(5～7･13は1/4、他は1/3)



第13図　５次調査17号土坑出土土器・陶磁器実測図（９～11は1/4、他は1/3）

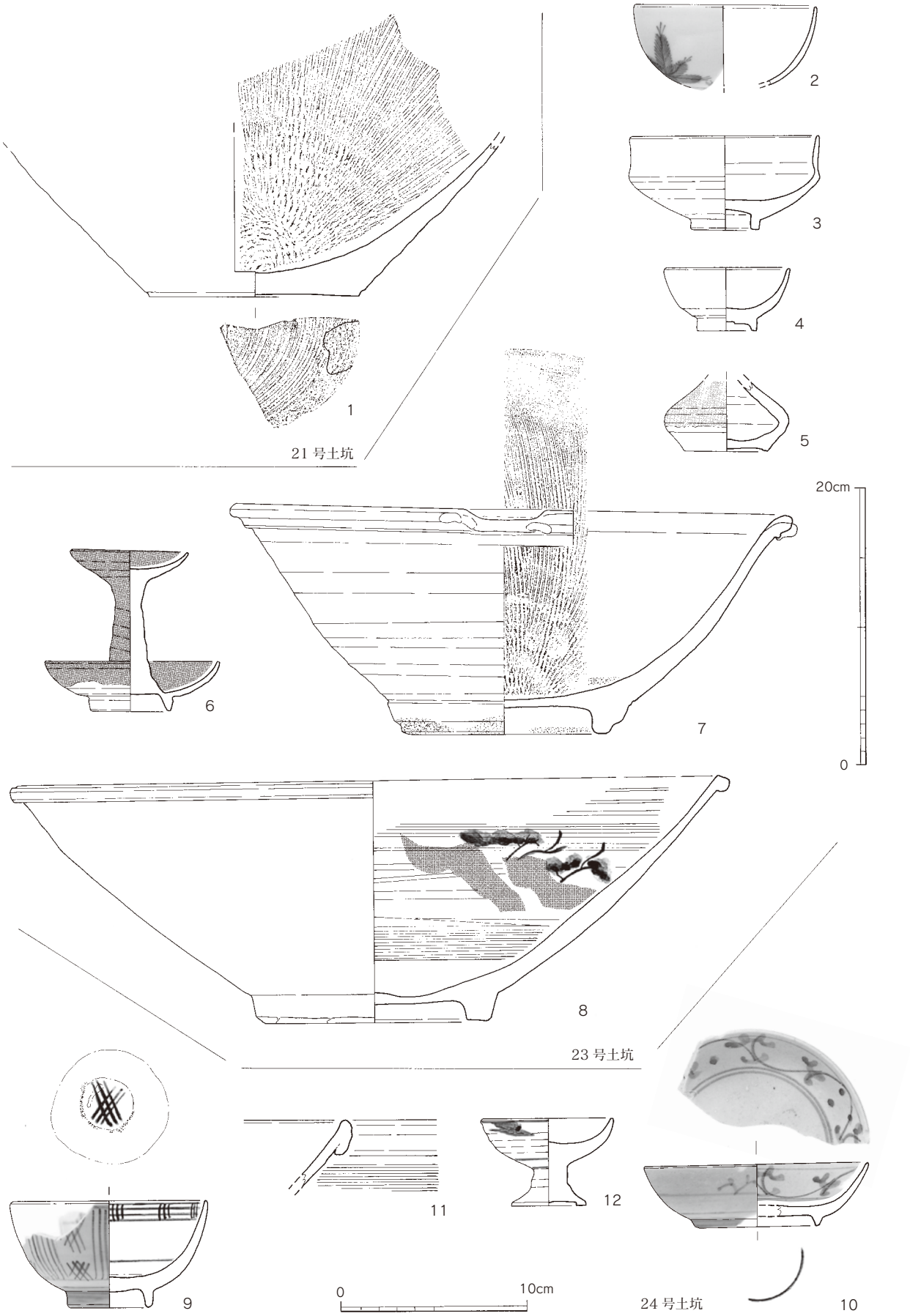
表５　５次調査出土土器・陶磁器観察表４

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
土坑13 10図10	蓋 土瓶蓋加工	裾径6.6 器高2.0	陶器 橙褐色	銅緑釉を外面に掛ける	側面は平滑に整形している	—		肥前	19世紀前半
土坑13 10図11	杯	口径7.0 高台径3.0 器高4.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に界線を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付		肥前	1710 ～ 1780
土坑13 10図12	灯明受皿	口径6.2 最大径7.8 底径4.4	陶器 橙灰色	鉄釉を内面から裾まで　発色不良で灰白色が残る	外底は糸切り	胴下半露胎 胎土目３つあり		肥前	不明
土坑13 10図13	鍋 行平鍋	口径(19.0)	低火度の施釉陶器 黄灰白色	内面口縁下以下は茶灰色の灰釉厚掛け　外面口縁から肩部は飛び鉋の上に鉄漿、肩部は鉄釉掛け　胴下位は回転ヘラケズリ		畳付釉剥ぎ　砂目付	把手との接合部のみ残る	肥前	不明
土坑14 11図１	碗 拳骨形	口径(9.4) 高台径4.0 器高5.1	陶器 黄灰白色	内外面飴釉の上に藁灰釉流し掛け		高台露胎		小石原	不明
土坑14 11図２	碗	口径(10.4) 高台径4.1 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面草花文、裏名は「大明年製」を呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1740
土坑14 11図３	碗	高台径3.8	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける　貫入あり	見込みに鉄絵の山水文	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑14 11図４	碗	口径10.0 高台径4.0 器高4.6	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける　貫入あり	外底に円文の刻印	高台露胎	ほぼ完形 京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑14 11図５	碗	口径11.6 高台径4.8 器高6.6	陶器 灰白色 軟質	銅緑釉を外面、透明釉を内面に掛ける		底部露胎		肥前	1690 ～ 1780
土坑14 11図６	小皿	口径(7.5) 高台径(4.7) 器高1.8	土師質 にぶい黄白色	—	外底は糸切り	不明	器面摩滅　内外底面中央が橙色に変色	不明	不明
土坑14 11図７	小皿 ５寸皿	口径(12.2) 底径(7.4) 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた唐草文、内面に山水文の呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付		肥前	1680 ～ 1710
土坑14 11図８	小皿 ５寸皿	高台径(7.4)	磁器 灰白色	発色不良で灰白色を呈する透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた唐草文、内面に斜格子の上にコンニャク印判手の菊花文を入れ、見込みに５弁花文、裏銘は「大」まであるので、「大明」を呉須染付	畳付釉剥ぎ	内面の文様が口縁部まで達している	波佐見	1680 ～ 1740
土坑14 11図９	小皿 ５寸皿	口径(11.6) 高台径(8.2) 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた唐草文、内面に墨引で流水文　見込みに５弁花文の染付	畳付釉剥ぎ	外底にハリ目跡１つ残る	肥前	1680 ～ 1710
土坑14 11図10	中皿	口径(21.4) 高台径(12.0) 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面口縁部に墨引で雲文牡丹文を呉須染付　口錆あり	畳付釉剥ぎ	外底にハリ目跡１つ残る	肥前	1700 ～ 1730
土坑14 11図11	中皿	口径31.1 高台径18.4 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花唐草文、内面に牡丹唐草文と反物文、見込みに雲と波と菊花文、裏銘は「大明成化年製」を呉須染付	畳付釉剥ぎ　ハリ目が崩れて底面に砂目が付着している	９割残存	肥前	1700 ～ 1730
土坑14 12図１	小皿 ５寸皿	口径11.6 底径4.2 器高3.7	磁器 暗灰白色	発色不良で乳白色を呈する透明釉を全面に掛ける	内面に折れ松葉文を呉須染付	底部露胎　見込みに蛇ノ目に釉剥ぎ後アルミナ塗布		波佐見	1680 ～ 1740
土坑14 12図２	小皿	口径(16.8) 底径6.8 器高3.7	陶器 暗緑黄灰色	内面白化粧土を刷毛掛けし、内面から外面胴部は透明釉を掛ける		高台露胎、畳付にアルミナ塗布　見込みは蛇の目釉剥ぎし、アルミナ塗布		肥前	1690 ～ 1780
土坑14 12図３	土瓶蓋	裾径(10.6)	陶器 黄灰色	外面天井部天目釉	無文　ボタン状のつまみがつくものと思われる	裾下釉剥ぎ		肥前	不明
土坑14 12図４	蓋	裾径10.4 器高3.0 つまみ径3.8	磁器 灰白色	淡い緑釉を外面、外面高台内と内面は透明釉	外面裏銘は「大明成化年製」、内面天井部に５弁花文染付　口唇部口錆	受け部釉剥ぎ		肥前	1780 ～ 1810
土坑14 12図５	鉢	口径29.3 高台径11.6 器高10.0	陶器 暗紫灰色	内面口縁下以下は鉄釉厚掛け　外面口縁下から胴下位は鉄釉ハケ掛け　その上に内外口縁部のみ茶色がかった鉄釉掛け		見込みに砂目跡あり 高台部露胎	見込みの鉄釉は重ね焼きのため発色不良	肥前	1750 ～ 1860
土坑14 12図６	摺鉢	口径(33.0)	陶器 暗紫灰色	口縁部のみ鉄釉掛け	内面摺り目12本単位	—		肥前	1650 ～ 1690
土坑14 12図７	摺鉢	口径(23.6)	陶器 橙灰色	内外鉄釉　発色不良	内面摺り目単位不明	—		肥前	1750 ～ 1860
土坑14 12図８	鉢 香炉	口径(9.8) 高台径6.0 器高9.1	磁器 灰白色	淡い緑釉を全面掛け発色不良で緑灰白色を呈する		蛇ノ目高台で、高台部は鉄漿塗布	口縁外面の柿釉の色調差は重ね焼きのためか	肥前	不明
土坑14 12図９	鉢	口径(10.6) 高台径6.7 器高9.1	陶器 黄灰色	外面は柿釉の上に鉄絵　見込みにアルミナの円形に付着している		畳付釉剥ぎ	口縁外面の柿釉の色調差は重ね焼きのためか	肥前	不明
土坑14 12図10	焼塩壺	底径4.2	土師質土器 橙灰～黄灰色 混入物なし	—	外底糸切り 内外ナデ	不明	断面に橙色の変色あり	在地	不明

第14図　５次調査18～20号大土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

表６　５次調査出土土器・陶磁器観察表５

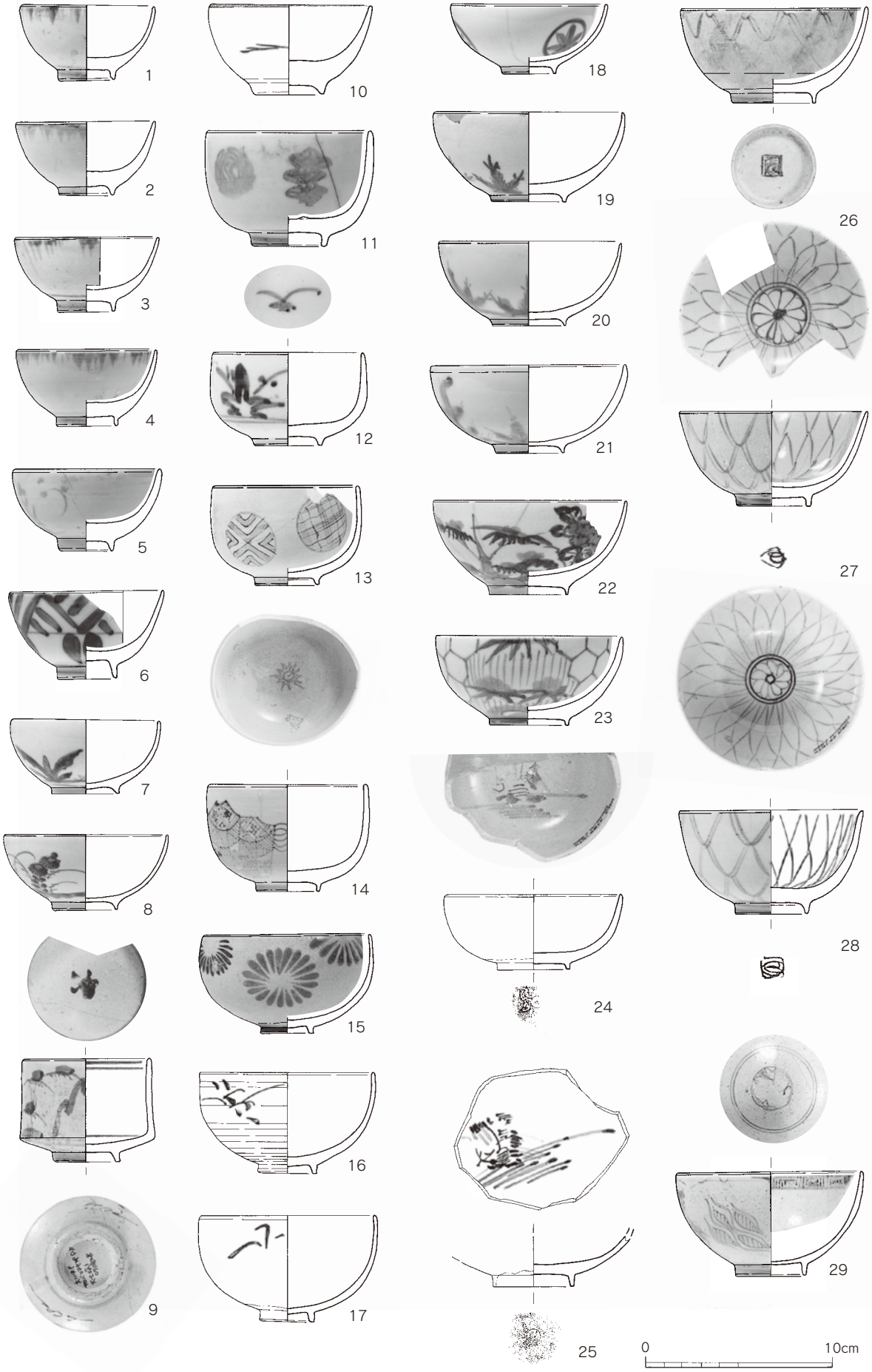
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
土坑16 12図11	碗 筒形	口径(7.2)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面花文と格子文を呉須染付	―	発色やや不良	肥前	1770 ～ 1780
土坑16 12図12	小碗	口径(7.6) 高台径(3.4) 器高3.8	磁器 灰白色 軟質	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面楓文をコンニャク印判刷り呉須染付			波佐見	1700 ～ 1740
土坑16 12図13	鉢 方形	器高10.6	土師質土器 黒灰～黄灰色 白色粒子多い	―	外面から口唇部まで器面剥離　内面はヨコハケ　板造りか　脚は角にある	不明	内面に煤が付着しているので、火鉢か	在地	不明
土坑17 13図１	碗	口径(8.4) 高台径3.8 器高4.5	磁器 灰白色 軟質	透明釉　全面　発色不良	外面に折菊枝文と思われるのコンニャク印判刷り呉須染付	畳付釉剥ぎ	５割残存	肥前	1700 ～ 1740
土坑17 13図２	碗 半球形	口径9.9 高台径3.9 器高4.1	陶器 黄灰白色	見込みに鉄絵の山水文を入れた後、透明釉を外面底部以外に全面掛ける		底部露胎	京焼風陶器	肥前	1780 ～ 1810
土坑17上位 13図３	碗	高台径3.6	陶器 黄灰白色	透明釉を高台以外に掛け、見込みに鉄絵の崩れた山水文		高台露胎	京焼風陶器	肥前	1650 ～ 1690
土坑17 13図４	小皿 ５寸皿	口径13.4 高台径8.2 器高3.9	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面に崩れた唐草文、内面は半菊花文と半団扇文の間を蛸唐草文で埋める　見込みに５弁花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ	13図5と同一セット	波佐見	1750 ～ 1810
土坑17 13図５	小皿 ５寸皿	口径13.1 高台径8.2 器高3.7	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面に崩れた唐草文、内面は半菊花文と半団扇文の間を蛸唐草文で埋める　見込みに５弁花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ	13図4と同一セット	波佐見	1750 ～ 1810
土坑17 13図６	蓋	裾径10.4 つまみ長軸 3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面花文呉須染付、つまみは板状で貼り付け	受け部釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
土坑17 13図７	蓋	裾径9.1 つまみ径3.7 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面４分割に枠取りされた中に鳥文と花文が同じモチーフが対面するように入れられており、内面は雷文帯、内面天井部は岩と波文、裏銘は□に青に近い字が入る　呉須染付	受け部釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
土坑17 13図８	小型摺鉢	口径(25.3)	陶器 にぶい黒灰紫色	鉄釉を口縁部のみ	内面摺り目13本単位	―	鉄釉に光沢あり	肥前	1650 ～ 1690
土坑17 13図９	小型摺鉢	口径(29.6)	陶器 にぶい灰白紫色	鉄釉を全面に掛ける	内面摺り目10本単位	―	鉄釉に光沢あり	小石原	不明
土坑17 13図10	摺鉢	口径(37.0)	陶器 橙灰色	鉄釉を全面に掛ける	内面摺り目17本単位	―	鉄釉に沸騰痕あり	肥前	1750 ～ 1860
土坑17 13図11	摺鉢	口径(43.4) 高台径(20.6) 器高18.5	陶器 にぶい灰白紫色	鉄釉を全面に掛ける	内面摺り目10本単位　外面胴下位に格子目タタキ残る　高台貼り付け	畳付釉剥ぎ　見込みに胎土目跡３つあり		小石原	不明
土坑17 13図12	小型鉢	口径(23.6)	陶器 淡橙灰色	胴下位に内外鉄釉ハケ掛けし、上半にオリーブ色の灰釉を掛けて、口縁部から外面胴上半に白化粧土を上掛け　その上に鉄絵		―		肥前	19世紀前半
土坑17 13図13	火鉢	口径(22.0) 最大径(27.0)	瓦質土器 灰白色が黒灰色を挟む　軟質	―	外面ミガキがあったが摩滅している 内面口縁下部オサエとハケメ 口縁下に穿孔あり	不明	口縁部内外端部が欠損している	在地	不明
土坑17 13図14	円盤形製品	底径4.3	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	小皿底部利用 周縁打ち掻き	畳付釉剥ぎ　見込みに胎土目跡３つあり		肥前	1650 ～ 1690
土坑17 13図15 図版１	紅猪口 紅皿	口径4.5 高台径1.2 器高1.3	磁器 完形のため不明	透明釉　内面から外面口縁部	型押し成型で、外面菊花文	底部露胎	完形	肥前	不明
土坑18 14図１	小型碗	口径(8.4) 高台径3.6 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉　全面に掛ける　貫入あり	内外無文	畳付釉剥ぎ	５割残存	肥前	1780 ～ 1810
土坑18 14図２	小型碗 腰折形	口径(8.6) 高台径3.7 器高4.3	陶器 黄灰色	緑灰色の灰釉　内面から外面胴下位まで	見込みに竹笹文の鉄絵	胴下位露胎	５割残存	肥前	18世紀中葉
土坑18 14図３	小皿	口径8.7 底径3.7 器高2.5	陶器 完形のため不明	鉄釉を内面から外面口縁部まで　発色不良	外底は糸切り	胴下半露胎	煤付着なし 完形	肥前	1690 ～ 1750
土坑18 14図４	小皿	口径(7.8) 高台径(4.9) 器高1.9	土師質 黄白色	―	外底は糸切り	不明	口縁部に煤付着	蒲池焼	不明
土坑18 14図５	小皿 ５寸皿	口径(14.2) 高台径8.0 器高4.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	花弁状口縁　外面に唐草文、内面に松竹梅文、見込みに手描きの５弁花文、裏銘は角福を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付		肥前	1700 ～ 1740
土坑18 14図６	台付皿	口径(20.7) 高台裾径9.3 器高8.6	陶器 にぶい黄灰色	透明釉　内面から外面胴下位まで	見込みに緑灰色の灰釉で竹笹文	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	18世紀中葉



第15図　５次調査21・23・24号土坑出土陶磁器実測図(1･7･8は1/4、他は1/3)

表７　５次調査出土土器・陶磁器観察表６

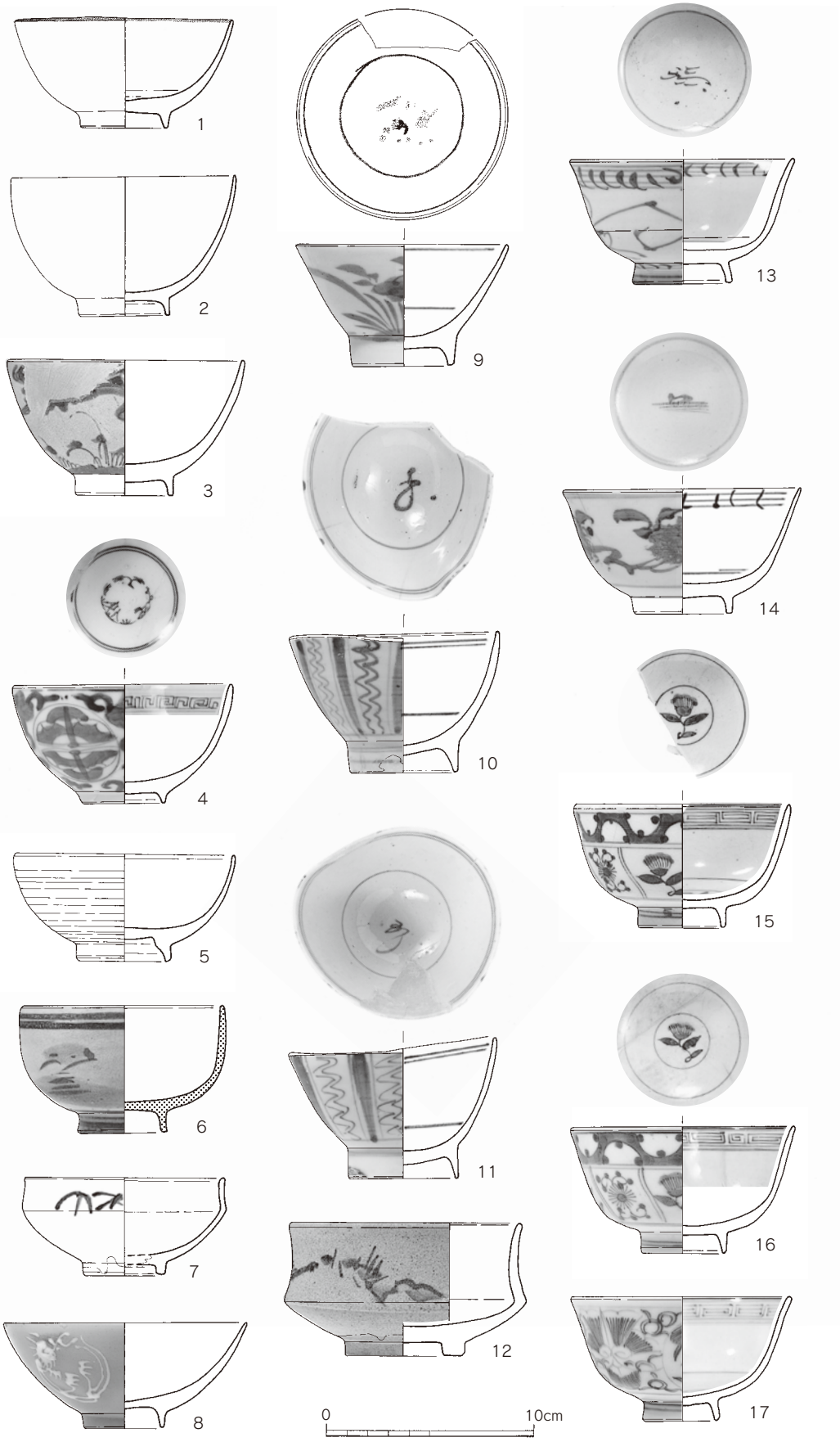
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
土坑18 14図７	蓋	裾径(7.0) つまみ径1.6 器高3.8	陶器 黄灰色	長石釉を上面のみ貫入あり	竹笹文を呉須染付か	下半釉剥ぎ		肥前か	不明
土坑18 14図８	灯明受皿	最大径8.4 底径3.8	陶器 暗紫灰色	鉄釉を内面から外面胴中位まで　発色不良	外底は糸切り	胴下半露胎	煤付着なし	肥前	不明
土坑18 14図９	小型摺鉢	口径21.8 底径8.3 器高8.6	陶器 にぶい暗橙茶褐色	鉄釉を口縁部のみ	内面摺り目９本単位 外底は糸切り	底部の側面に胎土目の痕跡である窪みあり	鉄釉に光沢あり	肥前	1650 ～ 1690
土坑18 14図10	甕	口径(17.1)	陶器 外面側橙褐色 内面側灰色	内外鉄釉で発色不良	外面肩部にカキ目 内面肩部は格子目タタキ当て具痕あり	口唇部は釉剥ぎ その上に貝目跡あり	肩部内面はタタキ当て具痕跡が斜めに残っている	肥前	17世紀後半
土坑19 14図11	小皿 ５寸皿	口径(12.0) 高台径(7.2) 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた唐草文、内面に水仙文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付		肥前	1680 ～ 1710
土坑20 14図12	台付皿	口径19.3	陶器 にぶい黄灰色	透明釉　内面から外面胴下位まで	見込みに鉄絵で竹笹文を描く	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	台部に接合位置が中心からずれている	肥前	18世紀中葉
土坑20 14図13	鉢転用植木鉢	底径14.2 最大径17.4	陶器 黄白色　黒粒子でざらつく	内面口縁部から外面は緑釉　貫入あり　内面と外底は鉄釉ハケ掛け	外面三島手状の印刻型押し底面に２箇所対面に穿孔しており、内面はそれを塞いでいる	畳付釉剥ぎ 見込みに砂目跡６つ付着	胎土が特徴的	瀬戸か	19世紀
土坑20 14図14	摺鉢	—	陶器 暗紫灰色	内外鉄釉	内面摺り目22本単位	—		肥前	1750 ～ 1860
土坑20 14図15	瓶	底径5.8	陶器 黄白色　黒粒子でざらつく	透明釉　貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ	胎土が特徴的	瀬戸か	不明
土坑21 15図１	摺鉢	底径(11.2)	陶器 橙～暗橙灰色		内面摺り目13本単位	外面底部に胎土目跡あり		肥前	1650 ～ 1690
土坑23 15図２	碗	口径(10.6)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面花文と格子文を呉須染付	—		肥前	1710 ～ 1750
土坑23 15図３	碗	口径10.2 高台径3.7 器高5.1	陶器 黄灰色	貫入のある黄灰色の灰釉　内面から外面胴下位まで	外面口縁下に竹笹文の鉄絵	底部露胎	４割残存	肥前	18世紀中葉
土坑23 15図４ 図版１	小碗	口径6.6 高台径3.2 器高3.5	陶器 完形のため不明	飴釉を外面胴下位まで	無文　高台削り出し	底部露胎	完形　畳付まで釉が掛かったため砂が付着している	肥前	1690 ～ 1780
土坑23 15図５	髪油壺	底径(4.6) 最大径(6.7)	陶器 灰白色	飴釉を外面胴下位まで	無文　高台削り出し	底部露胎	４割残存	小石原か	1780 ～ 1860
土坑23 15図６	灯明受皿	口径6.3 高台径4.4 最大径9.4	陶器 橙灰～暗青灰色	鉄釉を内面から外面胴下位まで	上部と下部は別造りしたもの	底部露胎	８割残存	肥前	不明
土坑23 15図７	摺鉢	口径40.8 高台径15.3 器高16.8	陶器 橙灰～暗青灰色	鉄釉を内面から外面胴下位まで	内面摺り目単位不明	底部露胎		肥前	不明
土坑23 15図８	鉢	口径(52.4) 高台径16.4 器高17.5	陶器 暗紫灰色	内面は白化粧土を刷毛掛けし、鉄絵で雲と山を描いた上に鉄釉と緑灰釉で松樹を上描き、外面は上半に鉄釉を掛け、その上に白化粧土を掛けた後に帯状釉掻き取り、下半は鉄釉を掛けた後、柳状に掻き取り		畳付釉剥ぎ	釉垂れは白化粧土で、倒立して掻き取りして垂れたものが、正置したため逆に垂れたのであろう	肥前	1690 ～ 1750
土坑24 15図９	碗	口径10.8 高台径4.4 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	
土坑24 15図10	小皿 ５寸皿	口径(12.8) 高台径(6.7) 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた唐草文、内面に水仙文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1710
土坑24 15図11	摺鉢	—	陶器 にぶい灰橙色が灰黒色をはさむ	鉄釉を全面	外面に崩れた唐草文、内面に唐草文を呉須染付	—	鉄釉に光沢なし	肥前	1650 ～ 1690
土坑24 15図12	仏飯器	口径(7.1) 裾径4.0 器高4.7	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面に崩れて、本来の文様のわからないモチーフを染付	底部釉剥ぎ	６割残存	波佐見	不明
大土坑１中層 16図１	小碗	口径7.2 高台径2.8 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良	外面に雨降文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付	７割残存	肥前	1700 ～ 1740
大土坑１南部上層 16図２	小碗	口径7.6 高台径2.8 器高4.0	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を高台以外に掛ける	外面に雨降文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付	７割残存	肥前	1700 ～ 1740
大土坑１南部 16図３	小碗	口径7.8 高台径3.2 器高4.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面に雨降文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付	発色不調	肥前	1700 ～ 1740



第16図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図１（1/3）

表８　５次調査出土土器・陶磁器観察表７

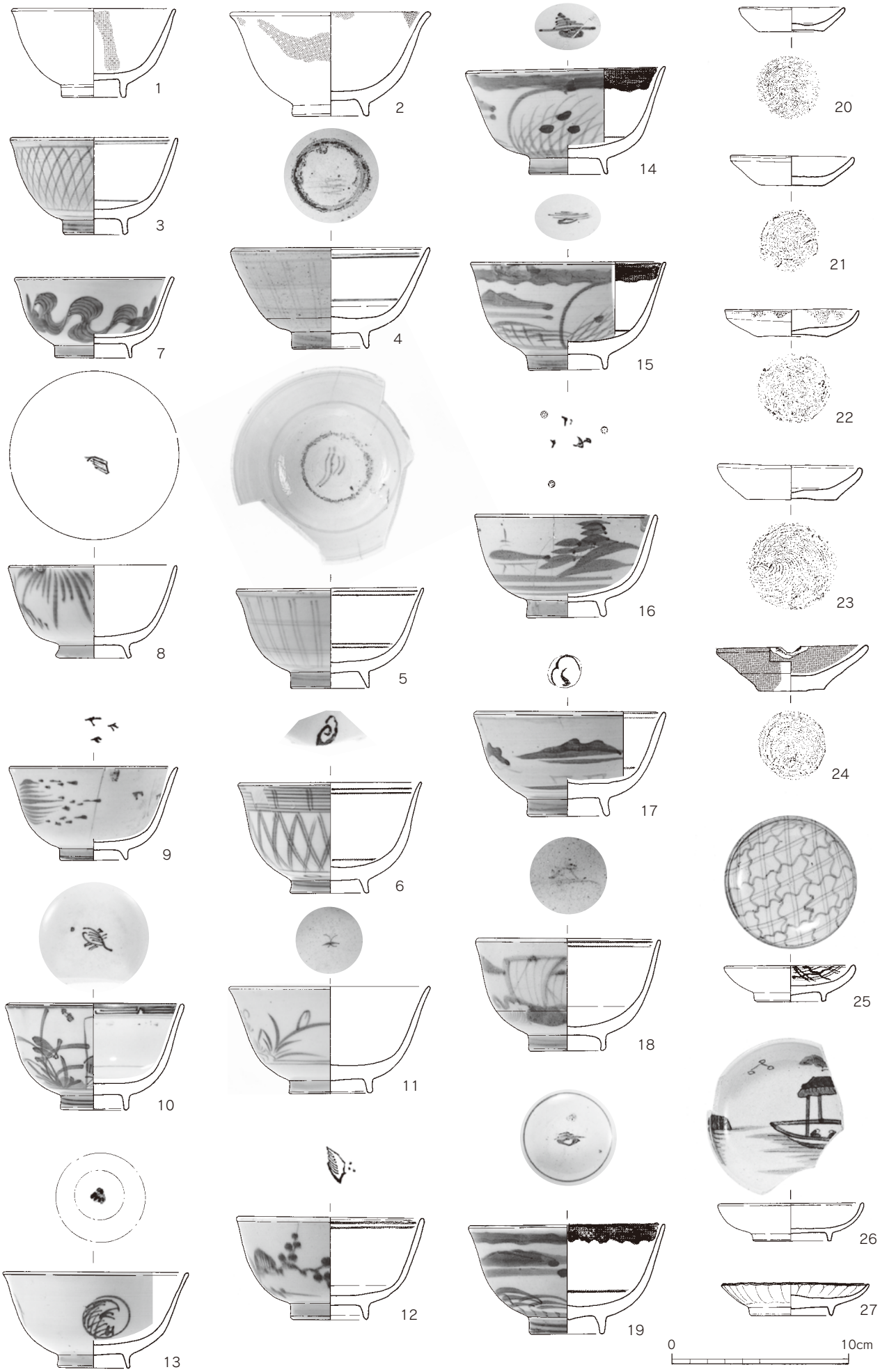
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１南部上層 16図４	小碗	口径7.5 高台径3.3 器高4.1	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を高台以外に掛ける	外面に雨降文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	釉切れあり 完形品	肥前	1700 ～ 1740
大土坑１南部上層 16図５	小碗	口径8.0 高台径2.9 器高4.8	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を高台以外に掛ける	外面に花草文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	完形品	肥前	1700 ～ 1740
大土坑１中層 16図６	小碗	口径8.3 高台径3.2 器高4.7	磁器 灰白色 ガラス質	内外薄いクロム青磁釉を掛け、高台内のみ透明釉	外面上半に太線で鋸歯文、下半に花弁文を呉須で染付	畳付釉剥ぎ　砂目付		瀬戸	20世紀前半
大土坑１南部上層 16図７	小碗 半球形	口径8.0 高台径2.6 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に草花文を染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
大土坑１南部上層 16図８	小碗 半球形	口径8.4 高台径3.3 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に草花文が対面に呉須で染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
大土坑１ 16図９	小碗 筒形	口径(7.2) 高台径3.6 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良で白濁する	外面に薊文、内面口縁部に界線、見込みに崩れた５弁花文呉須で染付	畳付アルミナ塗布		肥前	1770 ～ 1780
大土坑１南部上層 16図10 図版１	小碗 端反形	口径8.7 高台径3.8 器高5.0	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	口錆あり　外面の鉄絵状のものは偶発的なもので、本来無文だろう	畳付釉剥ぎ	厚手	肥前か	1710 ～ 1750
大土坑１上層 16図11	小碗 端反形	口径9.0 高台径4.1 器高5.7	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面にはコンニャク印判刷り鶴と松文を交互に呉須染付	畳付釉剥ぎ	器壁が厚く、重い	肥前	1730 ～ 1740
大土坑１南部上層 16図12	小碗	口径8.2 高台径3.4 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に楓葉形の草文、見込みに蝶文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１ 16図13	小碗 腰張形	口径7.9 高台径3.5 器高5.3	磁器 灰白色 軟質	透明釉全面掛け　発色不良で乳白色	外面に丸文散らし、見込みに昆虫文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀前葉
大土坑１中層 16図14	碗 半球形	口径8.5 高台径3.4 器高5.7	磁器 灰白色	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた昆虫文と宝文、見込みに火炎宝珠文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	８割残存	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１南部上層 16図15	碗 半球形	口径(9.0) 高台径2.8 器高5.4	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛けた後、外面に黒、緑と青彩の花文の上絵付け　貫入あり		底部露胎	京焼風陶器	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１南部上層 16図16	碗 半球形	口径9.6 高台径3.0 器高5.6	陶器 黄灰白色	外面に鉄絵の竹笹文を描いた後、透明釉を高台以外に掛ける		底部露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀後半
大土坑１南部上層 16図17	碗 半球形	口径(9.4) 高台径3.1 器高5.7	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛けた後、外面に黒、緑と青彩の花文の上絵付け　貫入あり		底部露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀後半
大土坑１南部上層 16図18	小碗	口径8.6 高台径4.0 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に丸に楓葉文の手描き呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
大土坑１南部上層 16図19	碗	口径9.9 高台径4.0 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に若松文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	底部が厚い ほぼ完形	肥前	1710 ～ 1750
大土坑１南部上層 16図20	碗	口径10.1 高台径4.1 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に若松文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	底部が厚い	肥前	1710 ～ 1750
大土坑１南部上層 16図21	碗	口径(10.5) 高台径3.7 器高4.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に若松文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
大土坑１南部上層 16図22	碗 半球形	口径10.3 高台径4.2 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文と竹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
大土坑１中層 16図23	碗 半球形	口径10.0 高台径4.2 器高4.8	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面に竹文と亀甲文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1700 ～ 1740
大土坑１南部上層 16図24	碗 半球形	口径(9.4) 高台径3.8 器高4.0	陶器 暗黄灰白色	見込みに鉄絵の山水文を入れた後、発色の悪い暗い透明釉を外面底部以外に全面掛ける　外底に「清水」の刻印		底部露胎	京焼風陶器	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１中層 16図25	碗	高台径4.4	陶器 黄灰白色	見込みに鉄絵の山水文を描き、透明釉を高台以外全面掛け　裏銘は「清水」と円の刻印		高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀後半
大土坑１南部上層 16図26	碗	口径9.9 高台径4.6 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良で白濁する	外面は二重網目文、裏銘は角福を呉須染付	畳付釉剥ぎ	９割残存	肥前	1690 ～ 1720
大土坑１中層 16図27	碗	口径(10.0) 高台径3.9 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は二重網目文、内面は網目文、見込みは菊花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1750



第17図　5次調査１号大土坑出土陶磁器実測図２(1/3)

表９　５次調査出土土器・陶磁器観察表８

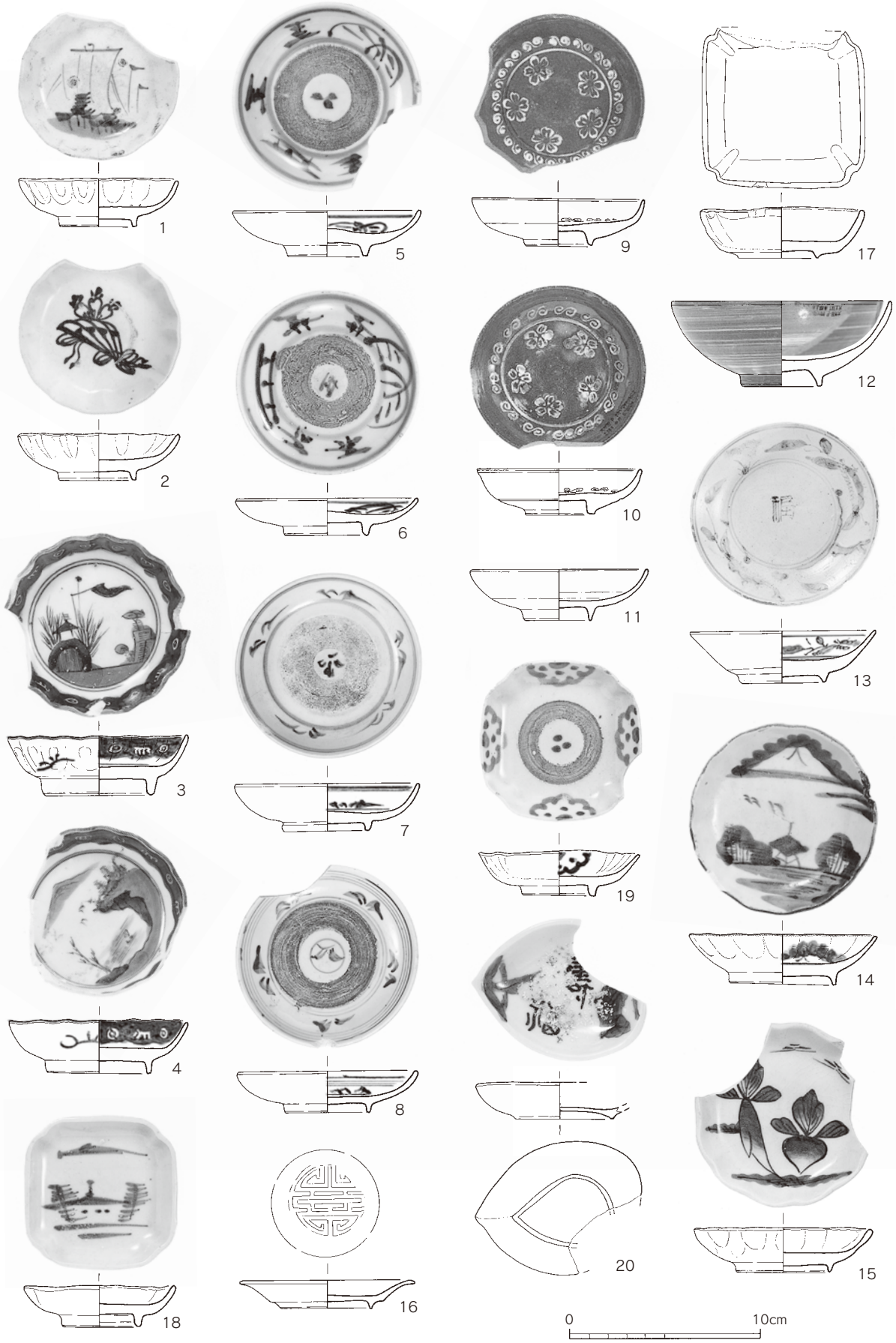
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) (　)は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１中層 16図28	碗	口径9.7 高台径3.8 器高5.3	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面は二重網目文、内面は網目文、見込みは菊花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1750
大土坑１中層 16図29	碗	口径9.9 高台径3.8 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良で白濁する	外面はよろけ縞文と菊花文が交互に入る。内面は口縁部が変形雷文帯、見込みは崩れた管状松竹梅文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1850 ～ 1860
大土坑１南部上層 17図１	碗	口径10.4 高台径4.2 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	口錆あり	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
大土坑１ 17図２	碗	口径10.9 高台径4.3 器高6.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
大土坑１中層 17図３	碗	口径10.7 高台径4.3 器高6.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良で白濁する	外面は島・草花・雲文、高台内に界線を呉須染付	畳付釉剥ぎ	発色不良で赤変している	肥前	1700 ～ 1740
大土坑１ 17図４	碗	口径10.4 高台径4.1 器高5.6	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面は花文地で、丸内に相向かいの蝶文が入る。内面は口縁部が雷文帯、見込みは崩れた管状松竹梅文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1850 ～ 1860
大土坑１南部上層 17図５	碗	口径(10.7) 高台径4.4 器高5.3	陶器 にぶい暗黄灰色 精良	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１南部上層 17図６	碗 陶胎染付	口径9.9 高台径4.2 器高6.0	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良で全体に暗い	外面口縁下に２重界線と山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ			18世紀中葉
大土坑１南部上層 17図７	碗 腰折形	口径9.6 高台径4.0 器高4.7	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に鉄絵で竹笹文を描いた後、透明釉を高台以外に掛ける	畳付釉剥ぎ	８割残存 京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
大土坑１中層 17図８	碗 平形	口径11.8 高台径4.0 器高5.1	磁器 灰白色 ガラス質	内面透明釉、外面薄いクロム青磁釉を掛ける	外面にイッチンで龍文を描く　位置から４箇所にあっただろう	畳付釉剥ぎ 砂目付		瀬戸	20世紀前半
大土坑１上層 17図９	碗 広東形	口径10.2 高台径5.0 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた鳥文と水仙文、見込みに鳥文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1780 ～ 1810
大土坑１中層 17図10	碗 広東形	口径10.2 高台径5.1 器高6.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面によろけ縞文、見込みに寿字文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	焼成時のへたれ著しい	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１中層 17図11	碗 広東形	口径10.2 高台径5.4 器高6.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面によろけ縞文、見込みに寿字文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	焼成時の歪み著しい	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１中層 17図12	碗 腰折形	口径(10.3) 高台径3.8 器高6.4	陶器 灰白色	黄灰色の灰釉を外面胴下位から内面に掛けた後、外面に鉄絵を描く　貫入あり		－	京焼風陶器	肥前	不明
大土坑１中層 17図13	碗 端反形	口径10.8 高台径4.4 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内外面の口縁部と外面胴下位には重界線に連続弧文を加えた文様帯があり、外面はその間に宝珠文と鍵文が交互に入り、見込みに波濤文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 17図14	碗 端反形	口径11.4 高台径4.8 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には不明文、内面口縁部に縞文に縦線が入り、見込みに波濤文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１ 17図15	碗 端反形	口径10.4 高台径4.2 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面の口縁部に墨引きによる雪ノ輪文帯、その下に枠内に薊文と菊花文が交互に入る　内面は口縁部に雷文が入り、見込みに薊文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	15・16は同じセット	肥前	19世紀中葉
大土坑１上層 17図16	碗 端反形	口径10.7 高台径4.2 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面の口縁部に墨引きによる雪ノ輪文帯、その下に枠内に薊文と菊花文が交互に入る　内面は口縁部に雷文が入り、見込みに薊文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	15・16は同じセット	肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 17図17	碗 端反形	口径10.4 高台径3.6 器高6.1	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面は幾何学的な花弁文　内面は口縁部に雷文が入り、見込みに崩れた環状松竹梅文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１南部上層 18図１	碗 端反形	口径(9.3) 高台径3.6 器高5.4	陶器 黄灰白色	透明釉を全面に掛けた後、内面口縁部に銅緑釉を流し掛け		見込みにハリ目跡３つあり 畳付釉剥ぎ	内面が変色しているのは重ね焼きのためだろう	肥前	不明
大土坑１南部上層 18図２	碗 端反形	口径(11.4) 高台径4.4 器高6.2	陶器 黄灰白色	透明釉を全面に掛けた後、口縁部に鉄釉と銅緑釉を流し掛け貫入あり		見込みにハリ目跡あり 畳付釉剥ぎ	内面が変色しているのは重ね焼きのためだろう	肥前	不明
大土坑１ 18図３	碗 端反形	口径9.6 高台径3.7 器高5.5	磁器 灰白色	発色の悪い透明釉を全面に掛ける	外面に斜格子文、見込みに格子文を染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1850 ～ 1860
大土坑１中層 18図４	碗 端反形	口径11.2 高台径4.2 器高5.7	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面は２重格子文、見込みに松葉文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 見込みに重ね焼き痕	発色不良で透明釉に孔があく	波佐見	19世紀中葉
大土坑１南部上層 18図５	碗 端反形	口径10.8 高台径4.4 器高5.5	磁器 灰白色	外面は２重格子文、内面見込みに波文を呉須染付　その後蛇ノ目にアルミナを塗布して透明釉を掛けている		畳付釉剥ぎ 見込みに重ね焼き痕		波佐見	19世紀中葉



第18図　５次調査１号大土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

表10　５次調査出土土器・陶磁器観察表９

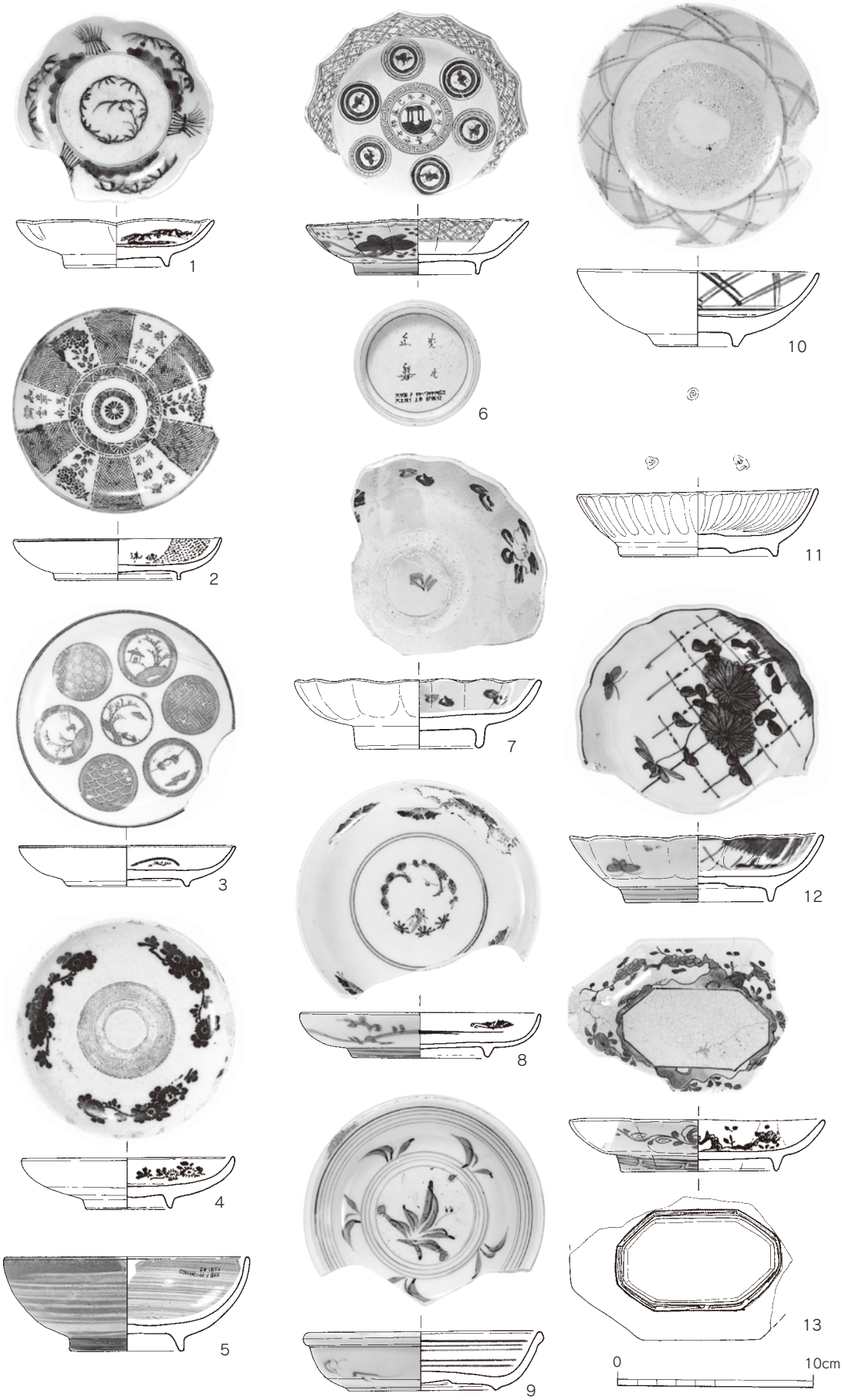
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１上層 18図６	碗 端反形	口径(10.4) 高台径4.4 器高6.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には口縁部に縞文に２本単位の縦線が入り、その下に２重網目文、下位は雲文帯、内面は口縁部２重界線で、見込みに崩れた雲文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 18図７	碗 端反形	口径(9.0) 高台径2.8 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を高台以外に掛ける	外面に若松文と布文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀前葉
大土坑１中層 18図８	碗 端反形	口径(9.7) 高台径4.2 器高5.3	磁器 灰黄白色	透明釉を高台以外に掛ける 貫入あり	外面に草文、見込みに岩文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１中層 18図９	碗 端反形	口径9.5 高台径3.8 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に稲藁文と鳥文、見込みに鳥文をコバルト須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 18図10	碗 端反形	口径10.1 高台径4.0 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は花草文と蝶文　内面は口縁部に雷文が入り、見込みに崩れた虫文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１南部上層 18図11	碗 端反形	口径11.4 高台径4.8 器高6.1	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面に草花文・蝶文、見込みに蝶文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１中層 18図12	碗 端反形	口径10.5 高台径4.5 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に梅樹文、見込みに波濤文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	呉須に滲みあり	肥前	19世紀中葉
大土坑１上層 18図13	碗 端反形	口径10.4 高台径4.0 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に丸にススキ文、見込みに不明文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ後アルミナ塗布		肥前	19世紀後半
大土坑１上層 18図14	碗 端反形	口径11.4 高台径4.4 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にはすすき文の入る丸区画と樹と雲文が交互に描かれており、内面は口縁部ダミで、見込みに崩れた波濤文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１上層 18図15	碗 端反形	口径(11.2) 高台径4.6 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にはすすき文の入る丸区画と樹と雲文が交互に描かれており、内面は口縁部ダミで、見込みに崩れた波濤文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１南部上層 18図16	碗 端反形	口径10.4 高台径4.5 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良で白濁する	外面には木・建物文が、見込みに崩れた鳥文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目跡３つあり		肥前	19世紀後半
大土坑１中層 18図17	碗 端反形	口径10.7 高台径4.7 器高6.1	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面には島・松・帆掛船文が、見込みに崩れた雲文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ後アルミナ塗布	ほぼ完形	肥前	19世紀中葉
大土坑１上層 18図18	碗 端反形	口径10.5 高台径4.3 器高6.4	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面は雲から出る太陽、帆掛文、島文、見込みに波濤文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	見込みに焼成時の付着物あり	波佐見	19世紀中葉
大土坑１上層 18図19	碗 端反形	口径11.1 高台径4.2 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にはすすき文の入る丸区画と樹と雲文が交互に描かれており、内面は口縁部ダミで、見込みに崩れた波濤文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１南部上層 18図20 図版１	小皿	口径6.1 高台径3.8 器高1.4	土師質土器 暗黄灰～橙褐色	－	外底糸切り	不明	完形 歪みあり	在地	不明
大土坑１南部上層 18図21	小皿	口径7.1 底径2.4 器高1.7	土師質土器 黄橙灰～橙色	－	外底糸切り	不明	９割残存　赤変は焼塩壺の蓋として使用したためだろう	蒲池焼	不明
大土坑１上層 18図22 図版１	小皿	口径7.8 底径3.8 器高1.6	土師質土器 黄橙灰～橙色	－	外底糸切り	不明	完形　内面と口縁部が黒変しているので、灯明皿として使用	蒲池焼	不明
大土坑１南部上層 18図23 図版１	小皿	口径8.3 底径5.1 器高2.1	土師質土器 橙灰～暗黄灰色	－	外底糸切り	不明	完形　内面が変色しているが、外面も同様なので、廃棄後の変色だろう	蒲池焼	不明
大土坑１中層 18図24 図版１	小皿	口径8.6 底径3.9 器高2.6	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面口縁部まで塗布　底部糸切り		底部露胎	ほぼ完形　口縁部の打ち掻きが黒変しているので灯明皿として使用している	肥前	不明
大土坑１上層 18図25	小皿	口径7.5 高台径4.2 器高2.1	磁器 完形のため不明	透明釉　全面	内面によろけ文と２重斜格子文、口唇部は口錆状に呉須で染付	畳付釉剥ぎ		波佐見か	19世紀中葉
大土坑中層 18図26	小皿 端反	口径9.2 高台径4.6 器高1.5	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みは隷字の「寿」が印刻している	畳付釉剥ぎ		美濃	19世紀中葉
大土坑１南部上層 18図27 図版１	小皿 菊花形	口径8.4 高台径4.8 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉　全面	型打ち成型 口錆	畳付釉剥ぎ		肥前	不明



第19図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図３（1/3）

表11　５次調査出土土器・陶磁器観察表10

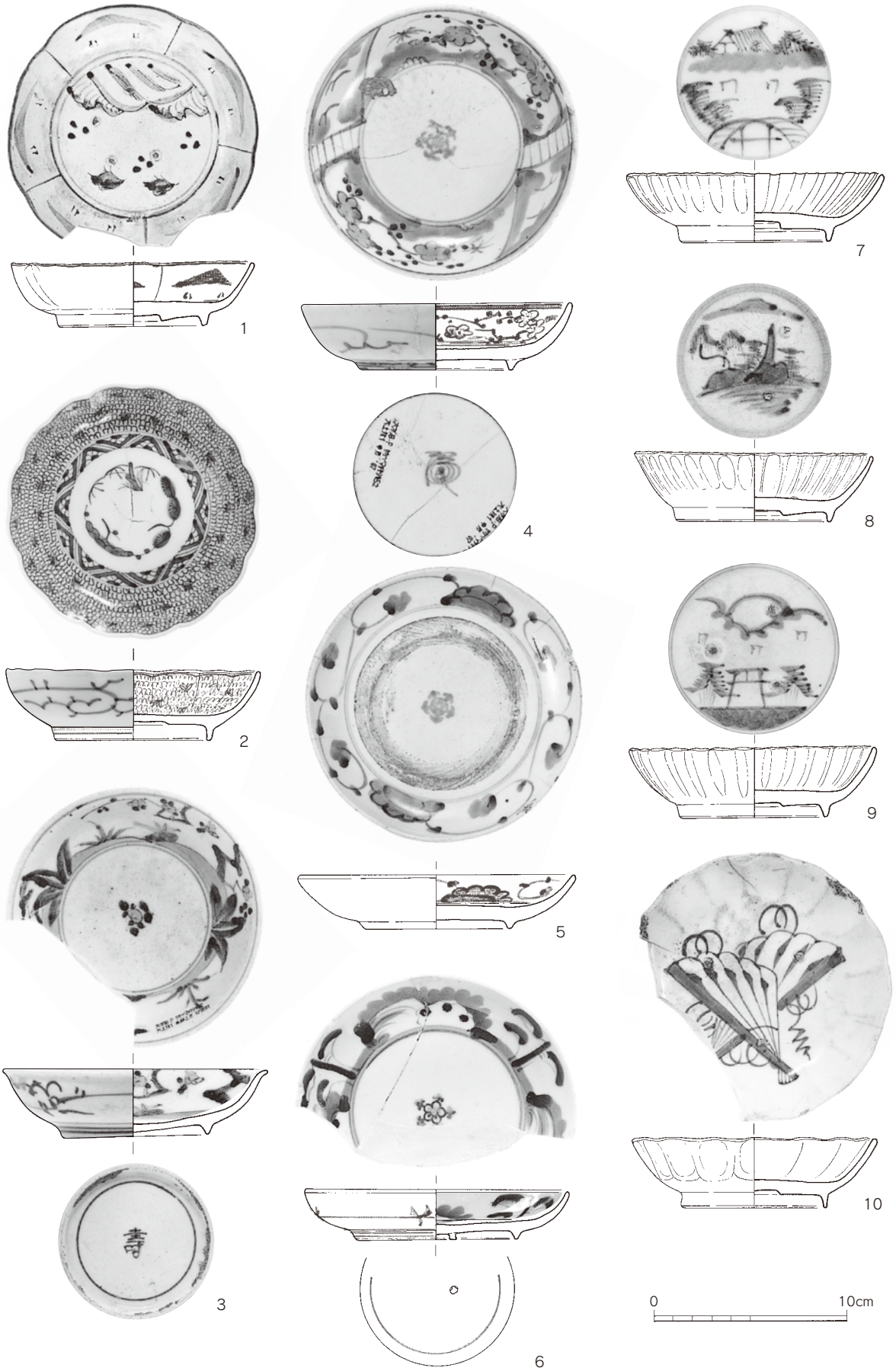
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１南部上層 19図１	小皿 5寸皿 菊花形	口径8.5 高台径4.1 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面無文、内面に帆掛船文をコバルトで染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡３つ	８割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１中層 19図２	小皿 5寸皿 菊花形	口径8.6 高台径4.1 器高2.4	磁器 灰白色	発色不良で乳白色の透明釉全面	型打ち成型 見込みに花と扇子文を呉須染付	蛇ノ目高台で高台部釉剥ぎ　見込みにハリ目跡３つ		肥前か	19世紀中葉
大土坑１中層 19図３	小皿 菊花形	口径9.3 高台径5.8 器高3.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型　外面唐草文　内面口縁部は墨引きの記号化文字文、見込みに山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後葉
大土坑１南部上層 19図４	小皿 菊花形	口径9.3 高台径5.5 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型　外面唐草文　内面口縁部は墨引きの記号化文字文、見込みに山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後葉
大土坑１上層 19図５	小皿	口径9.7 高台径4.5 器高2.4	磁器 完形のため不明	光沢のある透明釉　全面	内面に社・山・木文、見込みは不明モチーフを呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込み蛇の目釉剥ぎ後アルミナ塗布		肥前	19世紀中葉
大土坑１上層 19図６	小皿	口径9.7 高台径4.6 器高2.0	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	内面は界線と界線の間と見込みに崩れた山と木と鳥居文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇の目釉剥ぎ後、アルミナ塗布	アルミナは褐色に変色している	肥前	19世紀中葉
大土坑１上層 19図７	小皿	口径9.7 高台径4.6 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面は界線と界線の間と見込みに崩れた花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　蛇の目釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 19図８	小皿	口径9.5 高台径4.5 器高2.1	磁器 暗灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	内面は４重界線と３重界線の間と見込みに崩れた花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇の目釉剥ぎ後、アルミナ塗布	アルミナは黒褐色に変色している	肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 19図９	小皿	口径9.1 高台径3.6 器高2.5	陶器 暗橙褐～紫灰色	三島手のモチーフを見込みに刻印し、鉄釉を全面掛けた後、印刻部に白化粧土を掛けて、印刻部以外を拭き取って象嵌し、透明釉全面掛け		畳付釉剥ぎ	発色不良で、胎の色調が暗い	肥前	不明
大土坑１中層 19図10	小皿	口径8.6 高台径3.7 器高2.4	陶器 暗橙褐色	三島手のモチーフを見込みに刻印し、鉄釉を全面掛けた後、印刻部に白化粧土を掛けて、印刻部以外を拭き取って象嵌し、透明釉全面掛け		畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１黒色土 19図11	小皿	口径9.4 高台径3.6 器高2.7	磁器 暗灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ 蛇ノ目釉剥ぎ部にアルミナ塗布	見込みに赤色が残るので、赤が上絵付けされていた可能性がある	肥前	不明
大土坑１南部上層 19図12	小皿	口径11.4 高台径4.4 器高4.4	陶器 灰色	透明釉を全面に掛ける	高台を除く内外白化粧土の刷毛掛け	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１南部上層 19図13	小皿	口径9.9 高台径4.6 器高2.7	磁器 暗灰白色	発色不良の乳白色の透明釉を全面に掛ける　外面は発色不良のためモチーフ不明だが、内面には葉と木と虫文らしいもの、見込みには「福」が入る		畳付釉剥ぎ		波佐見	19世紀中葉
大土坑１南部上層 19図14	小皿 5寸皿 花弁形	口径9.9 高台径5.7 器高2.6	磁器 灰白色	発色不良の透明釉	型打ち成型　内面に墨引きで山を描き、樹と鐘楼を呉須染付　口錆あり	畳付釉剥ぎ	口縁部の欠損部が黒化	肥前か	19世紀中葉
大土坑１ 19図15	小皿 5寸皿 花弁形	口径9.4 高台径5.0 器高2.3	磁器 灰白色	透明釉　全面	型打ち成型　内面に大根と蕪を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前か	19世紀中葉
大土坑１中層 19図16	小皿 端反	口径9.9 高台径4.6 器高2.7	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みは隷字の「寿」が印刻している	畳付釉剥ぎ		美濃	19世紀中葉
大土坑１中層 19図17	小皿 変形小皿 方形	口径9.9 高台径4.6 器高2.7	磁器 灰白色	長石釉を内面から外面中位に掛ける	型打ち成型で、底面を抉って、小さな高台をつくる　貫入を意匠している	畳付釉剥ぎ		不明	19世紀後半
大土坑１中層 19図18	小皿	口径8.3 高台径4.4 器高2.2	磁器 灰白色　発色不良でやや軟質	発色不良で乳白色の透明釉全面	見込みに赤壁舟遊図の舟人物文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１中層 19図19	小皿 変形小皿 方形	長軸9.1 高台径3.9 器高2.3	磁器 暗灰色	暗い透明釉 全面	内面各辺口縁部に半花文、見込みに３つの点文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１ 19図20	小皿 変形小皿 葉形	長軸(8.7) 短軸7.1 器高1.9	磁器 灰白色	透明釉　全面	内面不明文と葉文、見込みに「寿」と「福」を呉須染付 糸切り細工の型押し成型	畳付釉剥ぎ	見込みに焼成時の付着物あり	肥前	不明
大土坑１中層 20図１	小皿 5寸皿 花弁形	口径10.2 高台径5.4 器高2.4	磁器 灰白色	発色不良の透明釉	型打ち成型　内面に竹笹と稲藁束文、見込みに環状の竹笹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前か	19世紀中葉
大土坑１上層 (黒色土) 20図２	小皿	口径10.7 高台径6.4 器高2.1	磁器 白色	透明釉を全面に掛ける	内面に型紙刷りで、点描文による区画が１つおきにあり、その間を牡丹文の入る区画と漢詩文の入る区画が交互に入る　見込みに花文と扇形波紋文の環状文の中に花文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		瀬戸	19世紀後半
大土坑１上層 (黒色土) 20図３	小皿	口径11.1 高台径6.2 器高2.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に銅版刷りで、山水文と幾何学文の入る丸文を交互に配置し、見込みは山水文の小さい丸文をコバルト染付 口錆	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１中層 20図４	小皿	口径10.9 高台径4.9 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面は型紙摺りの菊花文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ　見込み蛇の目釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉



第20図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図４（1/3）

表12　５次調査出土土器・陶磁器観察表11

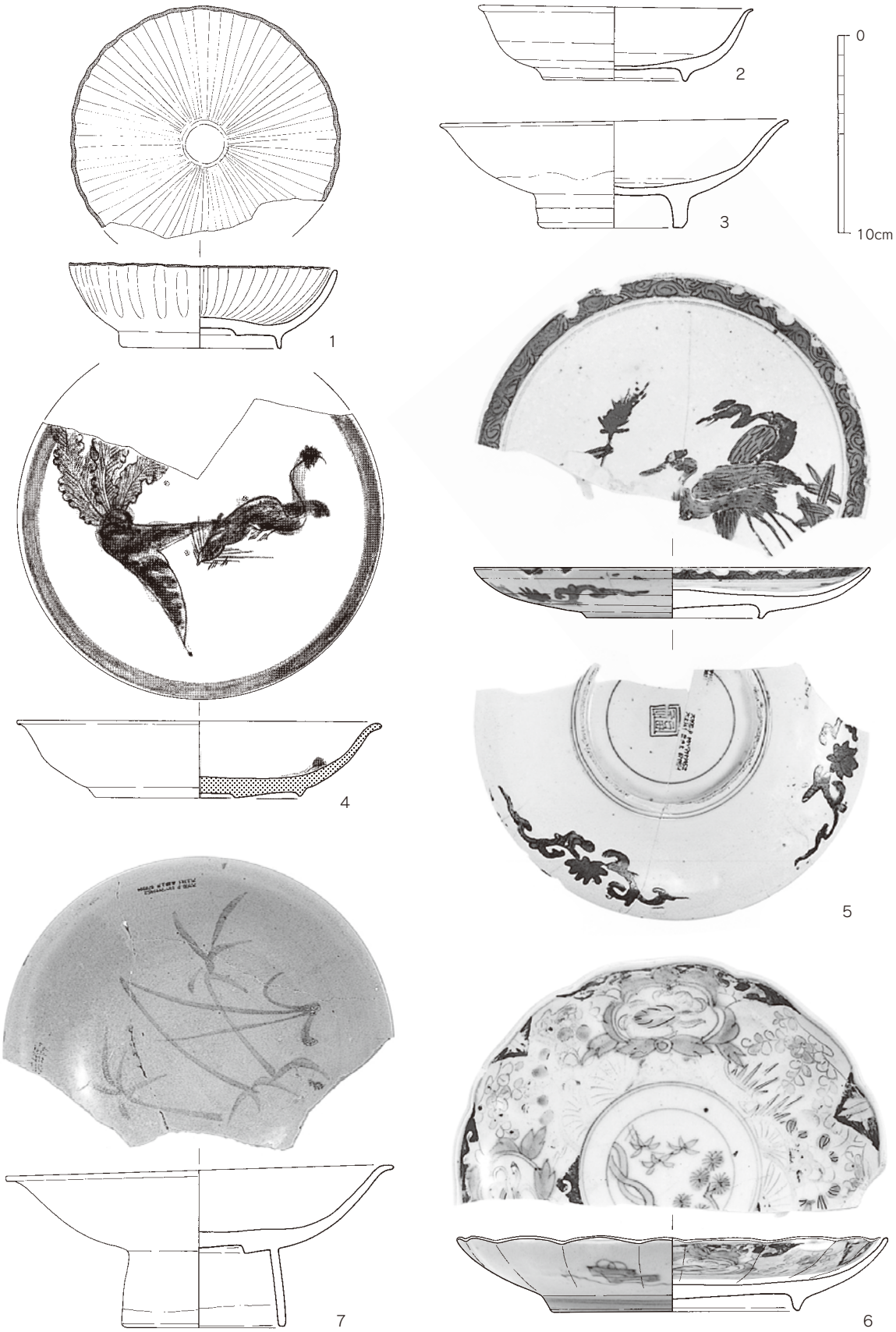
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１中層 20図５	小皿	口径(12.4) 高台径4.6 器高4.7	陶器 灰色	透明釉を全面に掛ける	高台を除く内外白化粧土の刷毛掛け	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１中層 20図６	小皿 変形小皿 14角形	口径11.4 高台径6.4 器高2.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛け、突出する角を持つ型打ち成型 内面胴部は斜格子内に階段状の線が交差するモチーフに梅花と水仙花文を散らしている　見込み外周に騎馬文を中心に入れる円文が６つあり、その内側に雷文帯内に12支の漢字文帯が入り、中央は石垣の上に建つ建物文が染付けされている　外面は胴部に変形唐草文、裏銘は「成化年製」		畳付釉剥ぎ	６割残存	肥前	不明
大土坑１上層 20図７	小皿 変形小皿 菊花形	口径12.3 高台径8.1 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	型打ち成型 外面無文、内面に牡丹花文、見込みに花文らしいモチーフを呉須染付	蛇の目釉剥ぎ	発色不良で、染付が見込みしか発色しておらず、胎も部分的に赤味を帯びる	肥前	19世紀中葉
大土坑１ 20図８	小皿	口径12.2 高台径7.1 器高2.2	磁器 暗灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面扇文、見込みに環状松竹梅文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１上層 20図９	小皿 ５寸皿	口径12.3 高台径7.4 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面雲文、内面に縞文、見込みに葉と草花文を呉須で染付	見込みにハリ目跡３付着　蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ	７割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１中層 20図10	小皿 ５寸皿	口径12.4 高台径4.1 器高3.9	磁器 灰白色	やや暗い透明釉を全面に掛ける	内面に崩れた２重斜格子文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目に釉剥ぎ後砂目塗布		波佐見	1750 ～ 1810
大土坑１中層 20図11	小皿 ５寸皿 菊花形	口径12.3 高台径8.1 器高3.2	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	型打ち成型	蛇の目釉剥ぎ　見込みにハリ目跡３つ	完形	肥前か	19世紀前半
大土坑１上層 20図12	小皿 ５寸皿 菊花形	口径11.6 高台径7.7 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉　全面 貫入あり	型打ち成型 内面に支柱格子と菊花と蝶、外面に蝶文をコバルト染付	蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ	６割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１中層 20図13	小皿 変形小皿 長８角形	長軸13.2 短軸8.2 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉　全面 貫入あり	外面胴部梅花唐草文、高台部雷文 内面梅樹文を呉須染付 糸切り細工の型押し成型	畳付釉剥ぎ	５割残存	肥前	不明
大土坑１上層 21図１	小皿 ５寸皿 花弁形	口径12.4 高台径7.1 器高3.2	磁器 灰白色	発色不良の透明釉	型打ち成型　内面に山と帆掛船、見込みに波濤文と千鳥文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡５つ		肥前か	19世紀中葉
大土坑１上層 21図２	小皿 ５寸皿 花弁形	口径13.1 高台径7.8 器高3.6	磁器 完形のため不明	光沢のある透明釉を全面に掛ける	型打ち成型　外面は唐草文、内面は微塵唐草文、見込みに半花文帯と環状松竹梅文を呉須染付	蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ	完形	肥前か	1780 ～ 1860
大土坑１南部上層 21図３	小皿 ５寸皿	口径13.5 高台径7.4 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面唐草文、内面に梅樹文・草葉文、見込みに花文、裏銘に寿を呉須で染付	高台内に砂目跡付着	８割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１中層 21図４	小皿 ５寸皿	口径13.5 高台径7.8 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面唐草文、内面に梅樹文・鳥文、見込みに５弁花文、裏銘に渦福を呉須で染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	波佐見	1750 ～ 1810
大土坑１ 21図５	小皿 ５寸皿	口径14.0 高台径7.5 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面無文、内面に崩れた花唐草文、見込みに５弁花文を呉須で染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目に釉剥ぎ	ほぼ完形	波佐見	1680 ～ 1740
大土坑１ 21図６	小皿 ５寸皿	口径13.6 高台径8.2 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面唐草文、内面に崩れた草樹文、見込みに５弁花文、外底に界線を呉須で染付	高台内にハリ目跡付着	４割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１上層 21図７	小皿 ５寸皿 菊花形	口径13.1 高台径8.2 器高3.5	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	型打ち成型　見込みに建物・橋・樹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡３つ		肥前か	19世紀中葉
大土坑１中層 21図８	小皿 ５寸皿 菊花形	口径12.3 高台径8.0 器高3.5	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	型打ち成型 見込みに山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡３つと畳付の重ね焼き痕		肥前か	19世紀中葉
大土坑１中層 21図９	小皿 ５寸皿 菊花形	口径12.7 高台径7.6 器高3.6	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	型打ち成型　見込みに雲・月・樹・鳥居文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡３つ		肥前か	19世紀中葉
大土坑１南部上層 21図10	小皿 ５寸皿 菊花形	口径12.6 高台径7.5 器高2.5	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	型打ち成型　見込みに扇文を呉須染付	見込みにハリ目跡３つ　外底は蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ	口縁部の欠損部が黒化	肥前	19世紀中葉
大土坑１南部上層 22図１	小皿 菊花形	口径13.6 高台径8.2 器高4.0	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	型打ち成型 口錆あり	蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１南部 22図２	小皿 陶胎染付	口径14.0 高台径7.4 器高3.6	陶器 暗灰色	乳白色がかった透明釉　全面	無文　貫入は意匠している可能性あり	畳付釉剥ぎ	６割残存	波佐見か	不明
大土坑１中層 22図３	小皿	口径17.6 高台径7.6 器高5.4	陶器 暗紫灰色	発色不良のオリーブ色の灰釉を内面から外面胴中位に掛ける		見込みに蛇の目釉剥ぎ	高台に歪みあり	肥前	不明



第21図　５次調査１号大土坑出土磁器実測図(1/3)

表13　５次調査出土土器・陶磁器観察表12

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１中層 22図４	小皿 ５寸皿	口径18.4 高台径10.3 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉　全面 貫入あり	外面無文、内面に鼠と人参文を呉須で染付	見込みにハリ目跡３付着　蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ	７割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１上層 (黒色土) 22図５	中皿	口径(19.9) 高台径8.8 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉　全面	内面口縁部は染付界線内に緑彩地に黒で葉文を描く文様帯、見込みと外面は緑・青・紫・赤彩で鶴・草樹・花文の上絵付け　裏銘は２重方形内に「福」のコバルト染付	畳付釉剥ぎ	６割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１ 22図６	中皿	口径21.8 高台径12.6 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉　全面	内面は染付地に花文の上絵付け、外面は宝文のコバルト染付	畳付釉剥ぎ	５割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１南部上層 22図７	台付皿	口径(19.6) 高台径8.3 器高8.2	陶器 灰白色	オリーブ色の灰釉全面掛け　貫入あり	見込みに鉄絵で草葉文 台部別造り貼り付け	台下部露胎	６割残存	肥前	1690 ～ 1780
大土坑１上層 23図１	小型鉢	口径15.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は茄子列文帯の間に雪ノ輪文、内面口縁部はダミの上に鋸歯文、内面も山水文の呉須染付	－		肥前	不明
大土坑１南部上層 23図２	小型鉢	口径18.0 高台径5.6 器高8.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	碁笥底で、外面に七宝文、内面は蕪文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１ 23図３	小型鉢	口径14.6 底径8.8 器高4.2	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	花弁口縁　外面は宝・花唐草文、内面は窓内に菊花文と花唐草文が交互に入る 見込みは龍文を呉須染付	底部蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１ 23図４	小型鉢	口径14.8 高台径9.1 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は花唐草文、内面は花葉文、見込みは若松文を呉須染付	蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１中層 23図５	鉢	口径(20.0)	陶器 黄灰色 軟質	内外面鉄釉を掛けた上に、口縁部にオリーブ色の灰釉を掛けている		不明		小石原	1682 ～ 1750
大土坑１南部上層 23図６	鉢 ８角鉢	口径(18.5) 高台径9.9 器高11.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に墨引で鷺文と扇形窓文を描き、窓内は山水文、内面は墨引きで雲文帯、見込みに宝文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１南部上層 23図７	片口鉢	口径21.4 高台径8.8 器高12.0	陶器 完形のため不明	外面胴下半は鉄釉塗布、外面胴上半から内面は白化粧土を打ちハケ目掛けし、内面から外面胴上半に透明釉掛け		底部露胎　口唇部釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1750
大土坑１南部上層 23図８	片口鉢	口径(22.9) 高台径9.9 器高12.4	陶器 赤橙色	外面胴上半から内面は白化粧土ハケ掛けし、外面は櫛状掻き取りし、下端は釉剥ぎ　内面から外面口縁部は発色不良の透明釉を掛け、胴下半は鉄釉塗布		畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1750
大土坑１南部上層 24図１	鉢 方形鉢	器高11.1	瓦質土器 器面は灰白色で、胎は黒灰色　白色粒子を多く含む		板造りと思われる	不明	外面の器面剥落著しい	在地	不明
大土坑１上層 24図２	鉢 方形鉢	器高7.1	土師質土器 黄白色　金ウンモを多く含む	―	板造りで、１側面は調整が粗く焼成に歪みが大きい　１側面はハケ	不明	角部のみ	在地	不明
大土坑１南部上層 24図３	鉢 植木鉢	高台径(11.1)	瓦質土器 灰白色　灰色粒子を多く含む	―	半月状の透し孔があり、見込みに孔があったような欠損の仕方をしているので、本来の器形も植木鉢だろう	不明		在地	不明
大土坑１上層 (黒色土) 24図４	鉢 こね鉢	口径(29.6) 高台径15.8 器高14.4	陶器 淡橙白～暗黄灰白色　精良	―	内外底部以外に鉄釉を掛けた後、口縁部に藁灰釉を掛けたうえに内外中位まで透明釉掛け	底部露胎		小石原	不明
大土坑１中層 24図５	鉢 こね鉢	口径(34.3) 高台径18.6 器高11.8	陶器 淡橙白～黄灰白色 精良	―	口縁部は中空で丸めている 底部以外内外に飴釉を薄く掛ける	底部露胎		小石原か	不明
大土坑１中層 24図６	鉢 火鉢	口径(33.0)	瓦質土器 灰白色が灰色を挟む	―	口縁部から外面が燻されており、ミガキで光沢をもつ　内面はハケ	―		在地	不明
大土坑１黒色土層 24図７	鉢	口径38.5 高台径16.0 器高15.1	陶器 暗紫色	外面は上半と下半に鉄釉を掛け、胴上半に白化粧土を塗布後、帯状掻き取りし、下半も鉄釉を櫛状掻き取りする　内面は全面に白化粧土を掛け、内面から外面上半に透明釉を掛ける		見込みに砂目跡が環状に付着	白化粧土が釉垂れしている	肥前か	1690 ～ 1750
大土坑１南部上層 24図８	鉢	口径40.0 高台径13.9 器高15.6	陶器 暗橙灰色	内面白化粧土を櫛状掻き取りし、外面胴下位から内面口縁部に鉄釉を掛ける		見込みに胎土目の窪みが５つあり、畳付部は不明		肥前	1690 ～ 1750
大土坑１黒色土層 25図１	鉢	口径44.2 高台径17.9 器高16.7	陶器 暗紫色	内外白化粧土を塗布後、外面は櫛状掻き取りし、内面から外面上半に透明釉を掛ける		見込みに砂目跡が環状に付着	白化粧土が釉垂れしている	肥前か	1690 ～ 1750
大土坑１ 25図２	鉢	口径29.7 高台径17.8 器高21.3	陶器 暗橙灰色	外面胴下位から内面は白化粧土ハケ掛けし、外面は櫛状掻き取り　内面から外面口縁部は透明釉を掛け、胴下半は鉄釉塗布　内面は最後に緑灰色の灰釉と鉄絵で上絵付け		見込みに砂目跡８つ付着　畳付け釉剥ぎで砂目跡８つあり	透明釉は貫入なし	肥前	1690 ～ 1750
大土坑１上層 26図１	摺鉢	口径36.0 高台径13.6 器高16.8	陶器 橙灰色	鉄釉を全面	内面摺り目25本単位　外面ナデ	畳付釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに環状の砂目跡あり	見込みだけ色調が異なるのは重ね焼きによる焼成の差	肥前	1750 ～ 1860
大土坑１南部上層 26図２	摺鉢	口径37.4 高台径12.6 器高14.5	陶器 橙褐色	鉄釉を全面	内面摺り目23本単位　外面ナデ	畳付釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに環状の砂目跡あり		肥前	1750 ～ 1860
大土坑１南部上層 26図３	摺鉢	口径37.3 高台径14.3 器高16.6	陶器 橙褐色	鉄釉を全面	内面摺り目20本単位　外面ナデ	畳付釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに環状の砂目跡あり	見込みだけ色調が異なるのは重ね焼きによる焼成の差	肥前	1750 ～ 1860

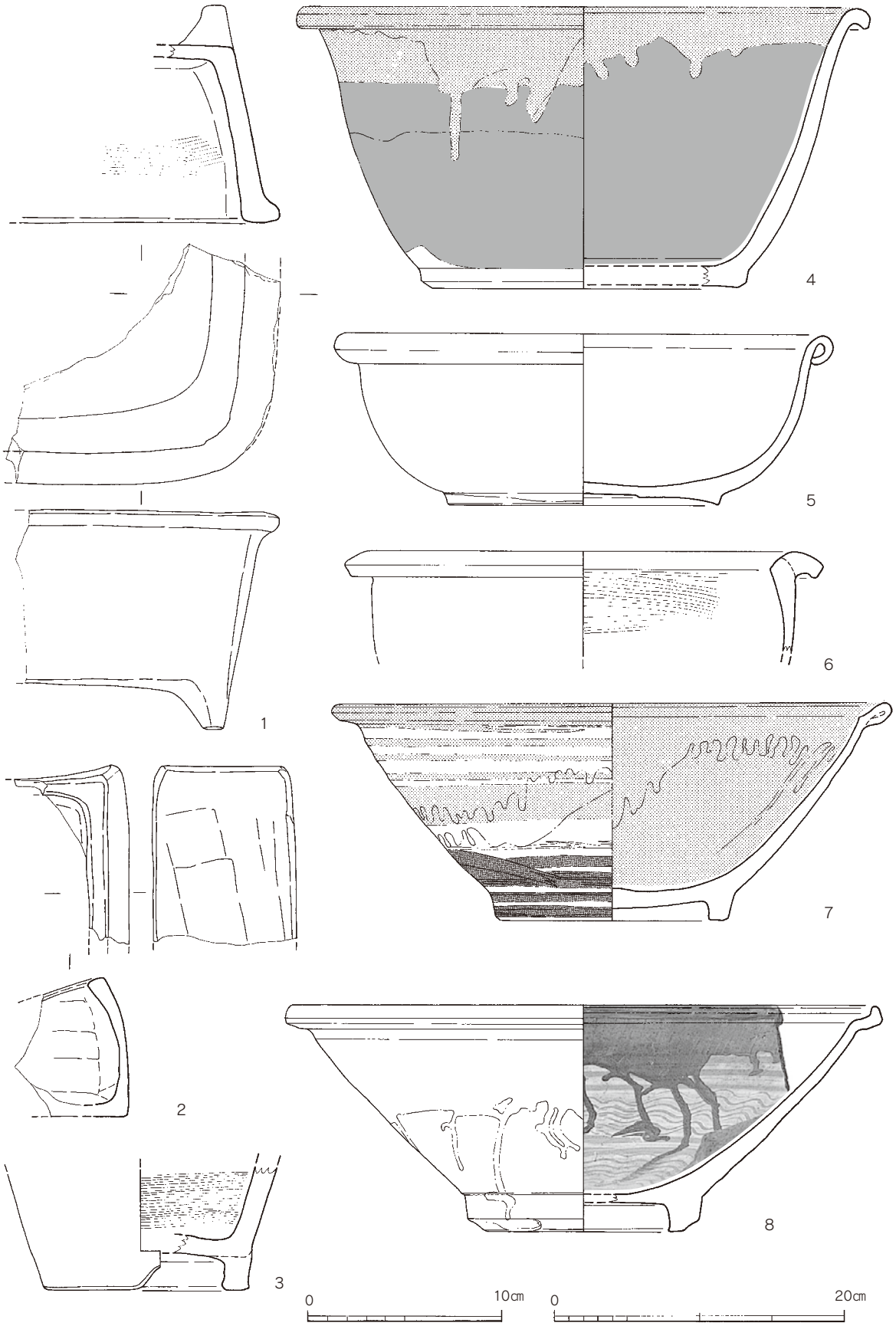


第22図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図５（1/3）

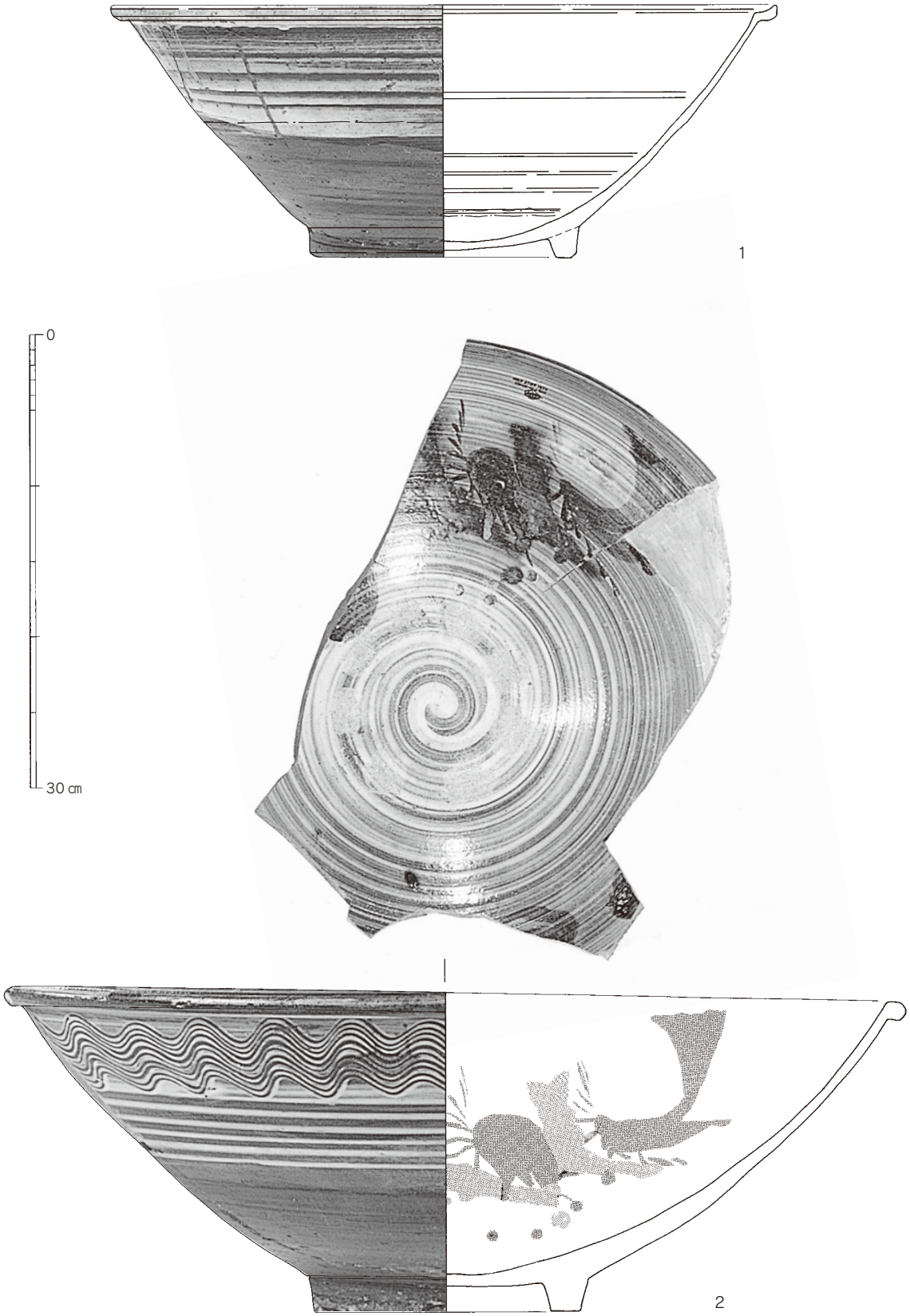
第23図　５次調査１号大土坑出土陶磁器６（1/3）

表14　５次調査出土土器・陶磁器観察表13

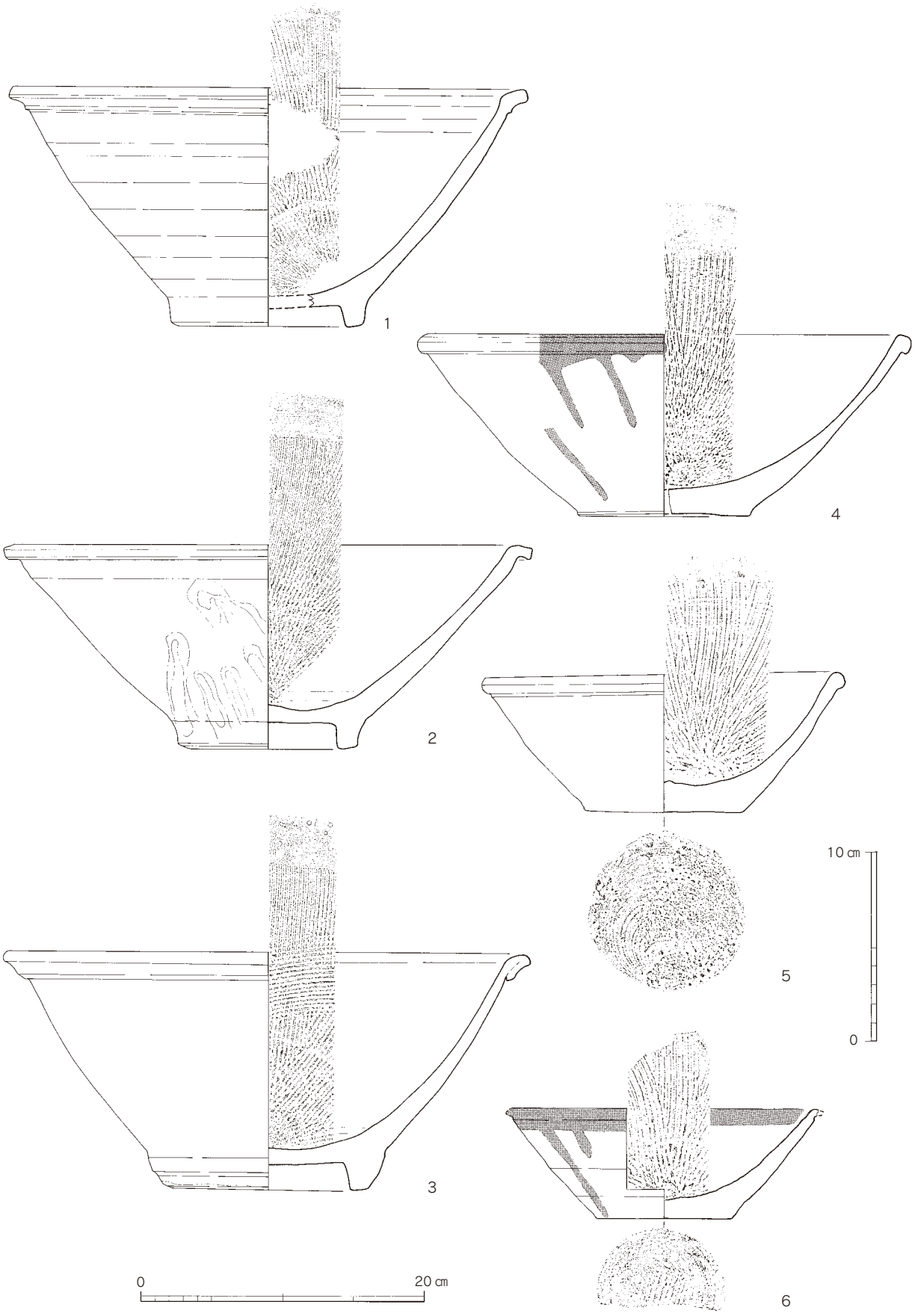
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１中層 26図４	小型摺鉢	口径(25.8) 底径(9.0) 器高9.0	陶器 暗紫黒灰色	鉄釉を内面から外面口縁部に掛ける	底部糸切り 摺り目は12本単位	底部露胎		肥前	1650 ～ 1690
大土坑１南部上層 26図５	小型摺鉢	口径19.0 底径8.3 器高7.2	陶器 黄橙色 軟質	鉄釉を全面に掛ける	底部糸切り 摺り目は13本単位	胎土目跡３つあり	赤色顔料が内面に付着する	小石原	不明
大土坑１中層 26図６	小型摺鉢	口径(15.8) 高台径(7.2) 器高5.8	陶器 橙褐色	発色不良のオリーブ色の灰釉を口縁部にのみ掛ける	底部糸切り 摺り目は９本単位	見込みに重ね焼きの痕跡あり	高台に歪みあり	肥前	1650 ～ 1690
大土坑１上層 27図１	摺鉢	口径38.0 高台径14.2 器高11.7	陶器 橙褐色	鉄釉を全面	内面摺り目28本単位　外面ナデ	畳付釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに環状の砂目跡あり		肥前	1750 ～ 1860
大土坑１上層 27図２	摺鉢	口径37.5 高台径12.6 器高14.3	陶器 橙褐色	鉄釉を外面の下半から高台内はハケ掛けで、内面から外面上半分には通常通りに掛ける	内面摺り目15本単位　外面ナデ	畳付釉剥ぎ　畳付と見込みに胎土目跡あり	鉄釉が薄い	肥前	1750 ～ 1860
大土坑１上層 27図３	摺鉢	口径35.2 高台径12.0 器高12.7	陶器 橙褐色	鉄釉を全面	内面摺り目単位不明　外面ナデ	畳付釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに環状の砂目跡あり	底部がへたれている　口縁部が湾曲しているのは注口が近い部位のためだろう	肥前	1750 ～ 1860
大土坑１中層 27図４	摺鉢	口径(36.0) 底径12.0 器高15.8	陶器 橙灰白色 軟質	鉄釉を全面薄く掛ける	底部切り離し後ナデ調整　外面カキ目状のナデ　摺り目は16本単位	不明		小石原	不明
大土坑１中層 28図１	鉢 半胴甕	口径(25.0)	陶器 灰色　白色粒子入る	外面から内面口縁部は白化粧土ハケ掛けし、内面から外面は透明釉掛け		—		二川焼	19世紀後半
大土坑１中層 28図２	鉢 半胴甕	口径(24.2)	陶器 暗赤紫灰色	外面胴下位から内面は白化粧土ハケ掛けし、外面は櫛状掻き取り　内面から外面口縁部は透明釉を掛け、肩部外面は鉄絵上絵付け		—		肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１中層 28図３	火鉢	高台径(15.8) 最大径(26.0)	瓦質土器 にぶい暗黄灰白色	—	胴中位は外面は型押しで陽刻し、内面はオサエ後ケズリ状のナデ　底部は内外ハケで、高台部は外面ミガキ	不明		在地	不明
大土坑１南部上層 28図４	火鉢	高台径14.8 最大径18.2	瓦質土器 にぶい暗黄灰色	—	胴中位は外面は型押しで陽刻し、内面はオサエ後ケズリ状のナデ　外面にはミガキがあったと思われるが摩滅している	不明	焼成が不十分らしく、外面は灰色にとどまる	在地	不明
大土坑１ 28図５	火鉢	高台径(24.0) 最大径(25.4)	瓦質土器 灰色が黒灰色を挟む　金ウンモを多く含む	—	外面型押しで陽刻し、内面はナデ 高台部の外面はミガキ、内面はナデ	不明	外面のミガキは光沢をもつ	在地	不明
大土坑１南部上層 28図６	火鉢	口径21.2 底径15.6 器高9.9	瓦質土器 暗灰白色が灰色を挟む	—	内外面はナデ　脚は残った２本の位置から本来３脚だっただろう。	不明	口縁部内面側と脚底に煤が付着している	在地	不明
大土坑１上層 28図７	鉢 植木鉢	口径(55.0) 底径(45.4) 器高16.1	土師質土器 にぶい橙灰白色	—	手捏ねで口縁内面側を波状にする 内外ナデ	—	内底部と外底縁の摩滅が著しい	在地	不明
大土坑１中層 28図８	小甕	口径16.1 底径16.0 器高18.6	土師質土器 にぶい橙灰白色	—	内外ナデ　外底に板状圧痕が残る	—	内底部と外底縁の摩滅が著しい	在地	不明
大土坑１中層 29図１	鉢 半胴甕	口径(27.7)	陶器 橙灰色 軟質	内面は鉄漿の上に発色不良で灰白色を呈する釉を掛け、外面から内面口縁部にオリーブ色の灰釉を掛けている 最後にイッチンを流し掛け		不明	外面の灰釉は光沢あり	小石原か	不明
大土坑１南部上層 29図２	小型鉢 半胴甕	口径(19.6)	陶器 暗紫～灰紫色	内外鉄釉掛け、外面は白化粧土をハケ掛けしてなんらかの文様を描き、その上に透明釉を掛けている		—	口縁部を打ち掻いて再利用したものかも	肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１中層 29図３	小型鉢 半胴甕	口径24.8 高台径8.3 器高15.2	陶器 暗灰色　白色粒子を含む	内外面鉄釉厚掛け	無文	底部アルミナ塗布		須佐唐津か	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１南部上層 29図４	鉢 半胴甕	口径(29.0) 底径(12.8) 器高27.5	陶器 紫灰白色　精良	菊花浮文貼り付け後全面飴釉掛け、その後外面肩部に藁灰釉掛け流し		外底釉剥ぎ	胎が紫色なのは焼成が強いためだろう	小石原	不明
大土坑１中層 29図５	鉢 半胴甕	口径20.9 高台径10.6 器高19.0	陶器 淡紫灰白色	内外鉄釉をハケ掛けした後、外面胴下位から内面口縁部は白化粧土ハケ掛けし、外面に鉄絵で松を上絵付け		高台部釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに重ね焼きの痕跡あり		二川焼か	19世紀後半
大土坑１上層 29図６	鉢 半胴甕	口径31.0 高台径13.4 器高30.0	陶器 橙褐色	内外面胴下位は鉄釉ハケ掛け、その後内外中位以上に鉄釉を掛け、外面胴中位から内面口縁部は白化粧土を塗布、外面肩部に緑色の灰釉を流し掛け		高台部釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに重ね焼きの痕跡あり		肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１中層 29図７	小型鉢 半胴甕	口径(14.0)	陶器 暗橙灰色	内外面黒釉掛け	無文	—		肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１中層 29図８	小型甕	口径(16.4)	陶器 黄灰色	薄い鉄釉全面掛け	口縁部外面の刻み目は、施されてない部分もあるので意図的な物か不明	口唇部釉剥ぎ		小石原	不明



第24図　５次調査１号大土坑出土土器・陶器実測図２（５～８は1/4、他は1/3）



第25図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図１（1/4）



第26図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図２（1･2･3は1/4・他は1/3）

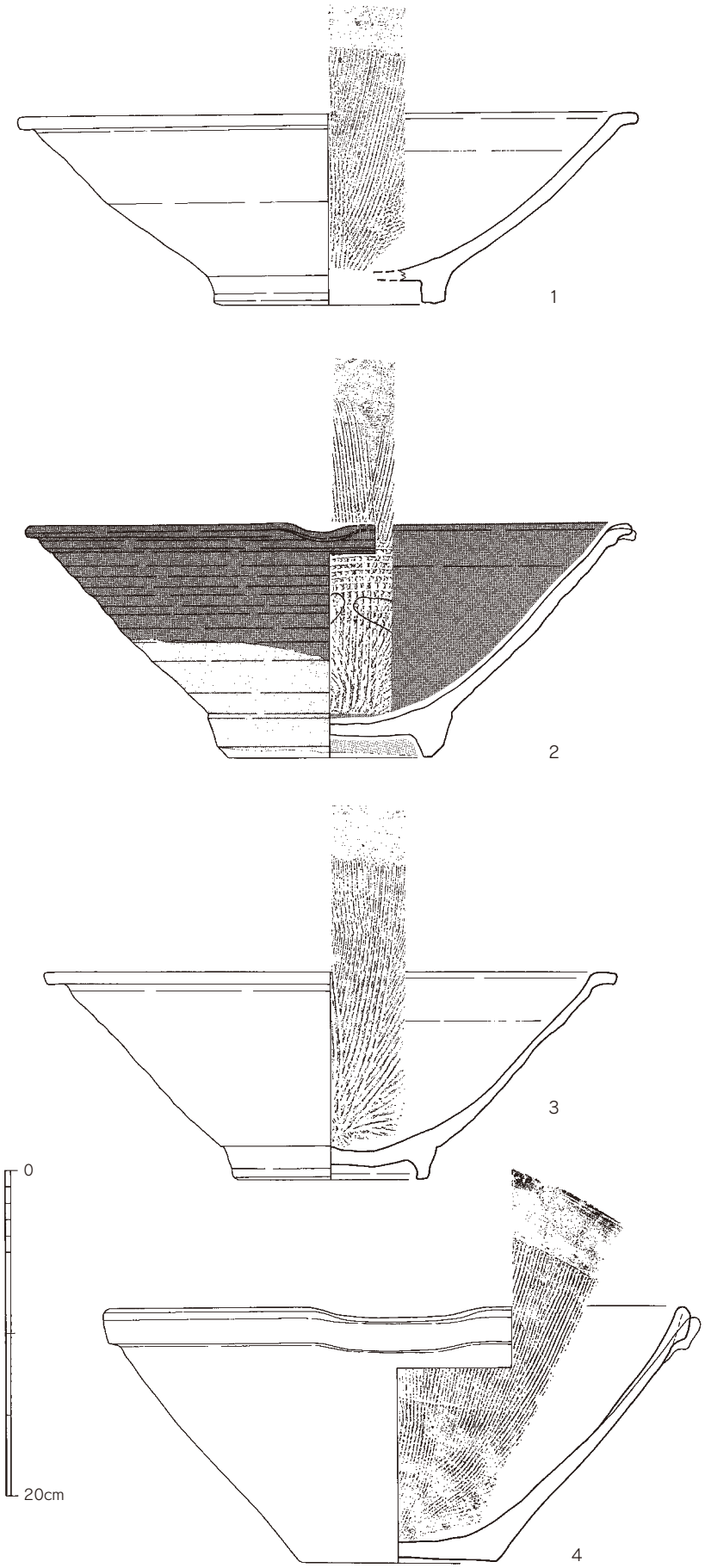
目跡は中央部に１つ残るが、底部残存部が1/3なので、本来他にもあったかもしれない。

12図５は陶器の鉢で、外面中央部に釉が掛かっていないのは、上下で掛け分けたことを示している。12図９は陶器の火入れで、口縁部は小さく欠損しているので、煙管の灰落としの可能性がある。12図13は土師質土器の方形鉢で、側面が平坦であることから板作りと考えられる。

13図2･3は肥前産の京焼風陶器碗で、高台内に円などの刻印はない。13図６は染付蓋で、残欠の形状から、中央に稜線をもつ細長い板状のつまみが付くものと思われる。13図13は瓦質土器の火鉢で、穿孔部分はわずかだが、単なる円坑ではない可能性がある。13図14は陶器の小皿の底部を転用した円盤形製品で、見込みに胎土目跡が３つ付着し、釉調や胎から肥前産陶器皿とわかる。

14図２は肥前産の陶器碗で、見込みに鉄絵の竹笹文が入る珍しいもの。14図６は高台付皿で、高台と皿底との接合部には隙間が残る。14図13は胎から瀬戸産のものとわかる。14図11と11図7は釉調や外面文様など酷似している。

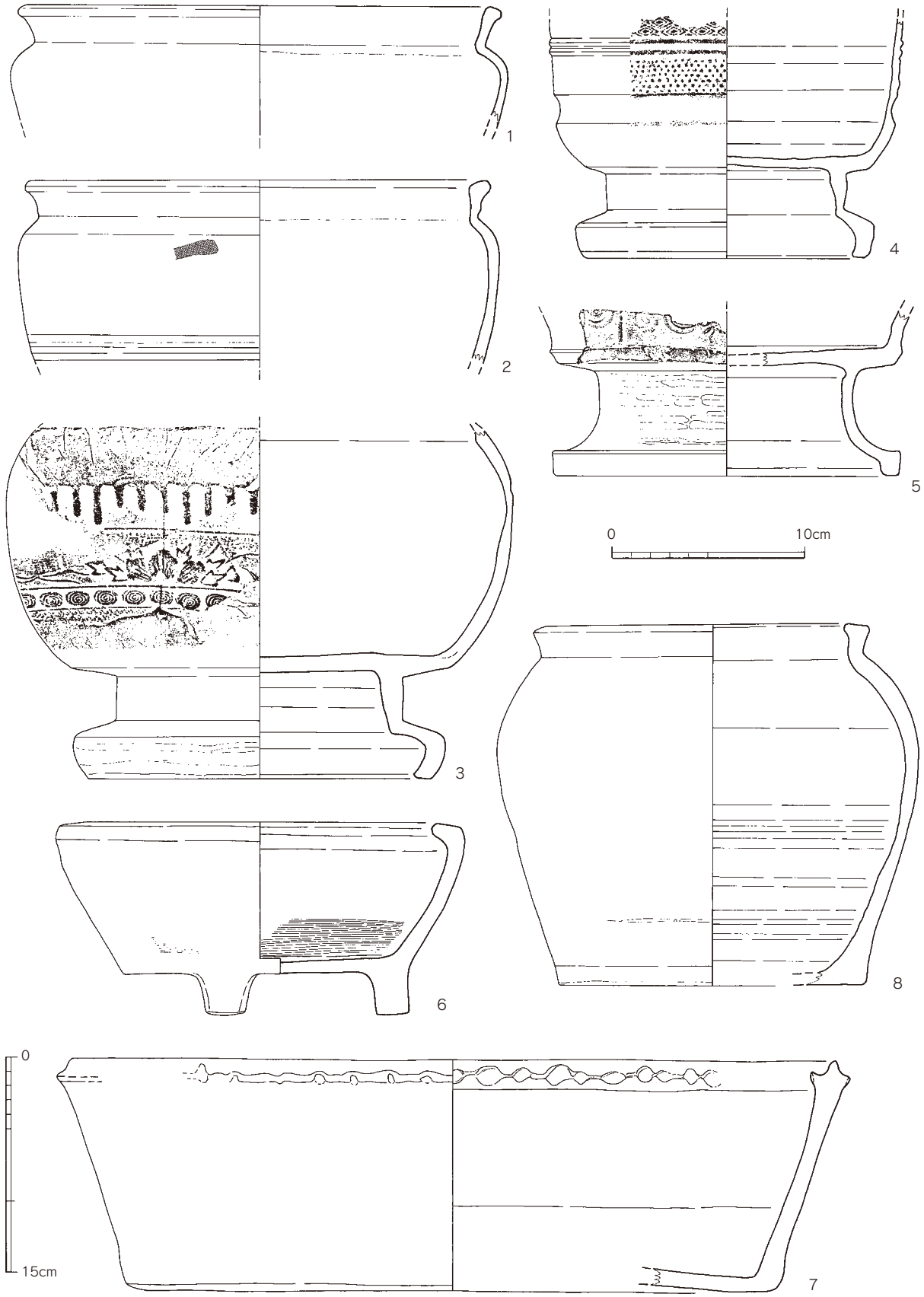
15図１は陶器の摺鉢で、平底であることから1650年以降の可能性が高い。15図５は



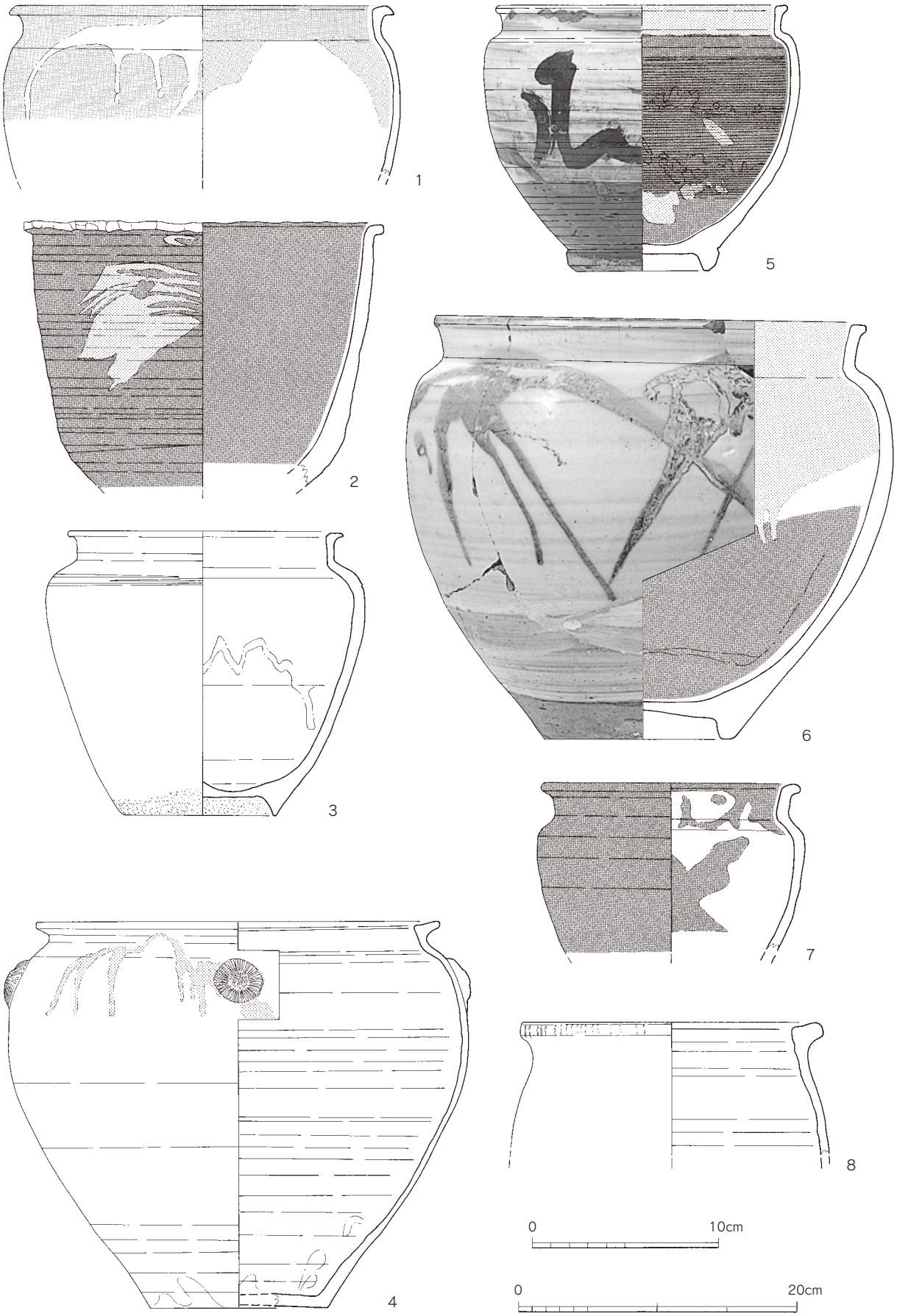
第27図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図３(1/4)

表15　５次調査出土土器・陶磁器観察表14

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) (　)は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１中層 30図１	甕	口径(33.0)	土師質土器 にぶい橙灰白色	―	外面ナデ、内面目の細かいハケ	不明	内面は口縁部のみ、外面は上半が器面剥落している	在地	不明
大土坑１南部上層 30図２	鉢 半胴甕	口径(36.0)	陶器 淡紫灰白色	内外胴下位は鉄釉ハケ掛け、外面胴下位から内面口縁部は白化粧土ハケ掛けし、外面下位は帯状掻き取り後、再度白化粧土をハケ掛けした後、鉄絵と緑彩で松を上絵付けし、内外胴下位までオリーブ色の灰釉を掛ける		―	弓野焼か	肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１上層 30図３	鉢 半胴甕	高台径13.3	陶器 暗灰白色	内外胴下位は鉄釉ハケ掛け、外面胴部は白化粧土ハケ掛けし、外面下位は帯状掻き取り後、再度白化粧土をハケ掛けした後、鉄絵と緑彩で松を上絵付けし、内外胴下位まで透明釉を掛ける			弓野焼か	肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１黒色土 31図１	小鉢 蓋物	口径9.0 高台径4.8 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	胴部外面に墨引きで松文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 内面口縁部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１中層 31図２	小鉢 蓋物	口径9.3 高台径4.8 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	胴部外面に楓文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 内面口縁部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１中層 31図３	小鉢 蓋物	口径10.0 高台径3.6 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文と草文、見込みに５弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	７割残存	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１南部上層 31図４	小鉢 二段折形	高台径5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	胴部外面と見込みに筆と虫文　口縁部は内外帯文か	高台部露胎		肥前	不明
大土坑１中層 31図５	小鉢 蓋物	口径11.7 高台径5.5 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	７割残存	肥前	19世紀中葉
大土坑１ 31図６	小鉢 蓋物	口径12.2 高台径6.0 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に丸文散らしを呉須染付	畳付釉剥ぎ 内面口縁部釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1710 ～ 1750
大土坑１中層 31図７	小鉢 香炉か	口径(10.3) 高台径4.7 器高5.0	陶器 暗青灰色	鉄釉を内面口縁部から外面胴中位まで掛け	高台は貼り付け後削り出し	高台部露胎 見込みに重ね焼き痕あり	鉄釉は発色不良 内外変色がない	肥前	不明
大土坑１中層 31図８	小鉢 香炉か	口径(12.1) 高台径5.4 器高5.3	陶器 明黄橙色	鉄釉を内面口唇部から外面胴中位まで掛け	高台は貼り付け後削り出し	高台部露胎	胎は灰色だが、焼成不良のためだろう	肥前	不明
大土坑１南部上層 31図９ 図版１	小鉢 変形	口径12.0 高台径5.8 器高6.2	陶器 暗灰色	内外藁灰釉の上に長石釉上掛け	口縁部を４カ所押さえて花弁を作る	高台部露胎	９割残存	萩焼	不明
大土坑１中層 31図10	小鉢 変形	口径11.1 高台径5.7 器高4.3	磁器 灰白色	青磁釉を全面に掛ける	外面無文、内面口縁部は赤彩で格子文帯と花雲文と見込みの銘と瓔珞文の縁を、黒彩で瓔珞文のダミを、瓔珞文自体は金彩で描き、見込みには緑・黒彩で描く水草と黄・黒彩の亀文が交互に上絵付け	高台部露胎		肥前	不明
大土坑１南部上層 31図11 図版１	小鉢 変形	口径19.6 高台径9.6 器高7.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	胴部外面と内面口縁部の窓内に農作業風景　見込みに宝袋文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１上層 31図12	小鉢 香炉か	口径9.7 高台径6.5 器高8.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	胴部外面に花唐草を呉須染付	畳付釉剥ぎ	口唇部に付着している炭化物は使用によるものだろう	肥前	不明
大土坑１ 31図13	小鉢 香炉	口径8.4 高台径5.8 器高6.3	磁器 灰白色	青磁釉を外底以外全面に掛ける	無文で、外面の煤状のものは意匠したものではないと考えた	外底の縁に砂目付着	外底は釉剥ぎ後に釉が掛かっている。上げ底状なので周縁部が接地している	肥前	不明
大土坑１南部上層 31図14	小鉢 花弁形	口径9.1 高台径6.5 器高7.8	陶器 暗紫灰色	白化粧土を外面胴下位から内面口縁部に掛けた後、胴下位は釉剥ぎし、外面に菊花文の鉄絵を描く		胴下位釉剥ぎ、外部露胎	胎がざらつく	京焼か	不明
大土坑１ 31図15	小鉢	口径9.1 高台径6.5 器高7.8	陶器 暗紫灰色	白化粧土を外面胴下位から内面口縁部に掛けた後、胴下位は釉剥ぎし、外面に竹笹文の鉄絵を描く　底部に墨書あり		胴下位釉剥ぎ、外部露胎	墨書は「文三」まで読める	肥前	不明
大土坑１南部上層 31図16	小鉢	口径15.6 高台径5.7 器高7.9	陶器 暗紫灰色	内外胴下位は鉄釉ハケ掛け、外面胴下位から内面口縁部は白化粧土ハケ掛けし、外面下位は帯状掻き取り後、内外胴下位までオリーブ色の灰釉を掛ける		畳付釉剥ぎ	口縁下に別個体が融着した痕跡あり	肥前	不明
大土坑１南部上層 31図17	小鉢 筒形	口径11.4 高台径9.4 器高6.0	陶器 暗灰色で一部黄灰色	赤茶色の鉄釉全面掛け	外面肩部の沈線は意図的な物か不明	外面胴下位砂目付着著しい		小石原	不明
大土坑１中層 31図18	鉢 筒形	口径12.4	陶器 暗紫灰色	白化粧土を外面胴下位から内面口縁部に掛けた後、外面に花文・笹文の鉄絵を描き、暗い透明釉を全面に掛ける　貫入あり		―	京焼風陶器	肥前	不明
大土坑１上層 31図19	鉢 段重	口径14.1 高台径8.4 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた微塵花唐草文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 内面口縁部と外面高台端部釉剥ぎ	９割残存　内面口縁部と外面高台端部釉剥ぎから、段重の中位のもの	肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 32図１	瓶 燗徳利	口径2.7 高台径5.5 器高17.2	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	底部はやや上げ底	底部釉剥ぎ		瀬戸か	19世紀後半
大土坑１黒色土 32図２	瓶 徳利	口径3.0 高台径7.4 器高21.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	底部は上げ底でへたれている 外面口縁部はダミ、胴部は花草樹文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半



第28図　５次調査１号大土坑出土土器・陶器実測図2（７は1/4、他は1/3）



第29図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図４（1･4～6は1/4、他は1/3）

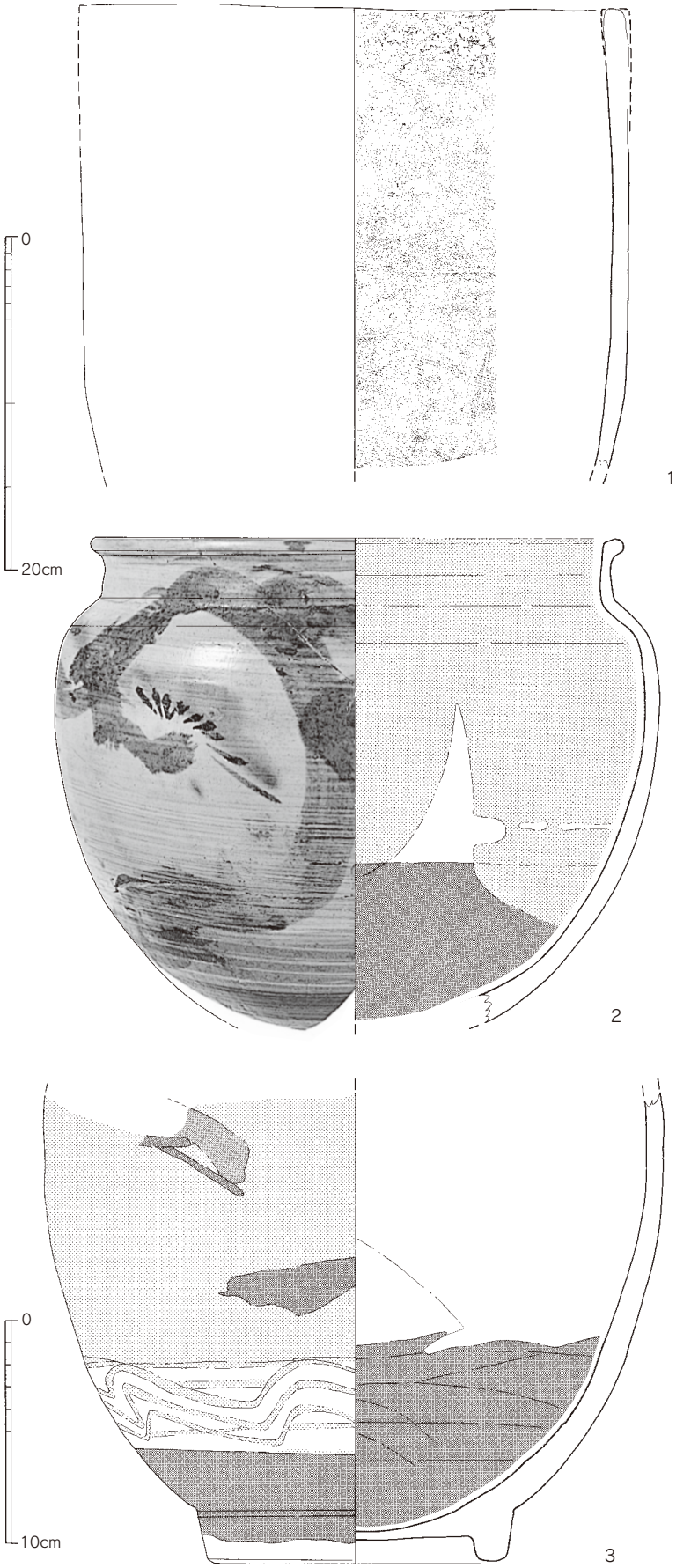
磁器の器形を模した陶器の髪油瓶であり、ざらつく胎に特徴がある。

15図６は陶器の灯明受皿で、下皿の外底は柱部との接合後に削られている。15図11は陶器の摺鉢で、胎は小石原焼に似るが、口縁部の形態は口縁部のみ鉄釉を施す肥前のものであるので、焼成不良によるものと考えられる。

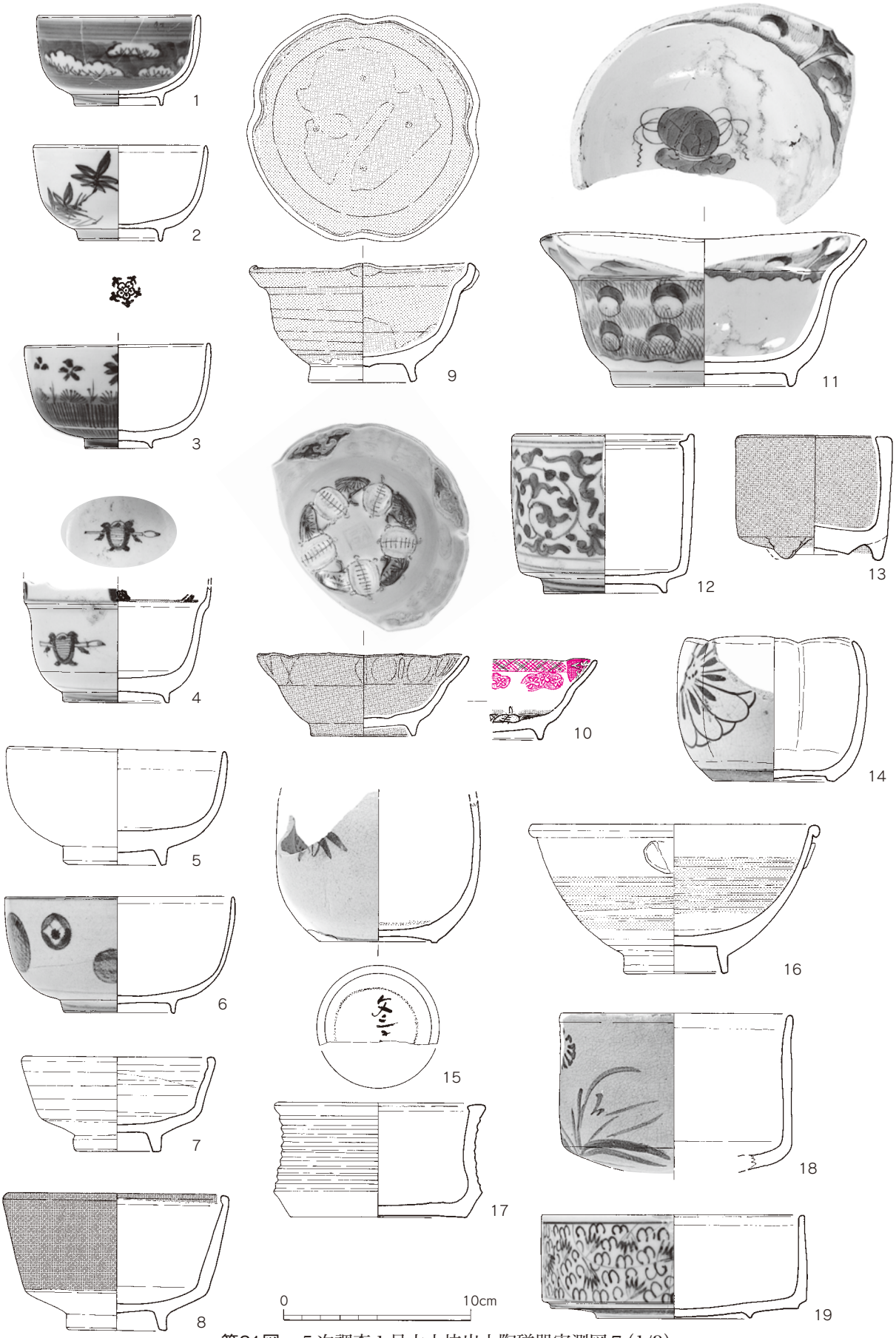
16図１から４は同じモチーフの磁器小碗だが、2･4は厚手な点で共通している。16図の19から21は同じモチーフの碗だが、19･20はモチーフと底部の厚い作りが一致し、焼成が異なるので、同じ窯で異なる陶工が絵を入れたものではなかろうか。16図22の磁器碗は焼成不良で赤変部分がある。

17図６は陶胎染付の碗で、18世紀前葉のものより文様が退化しているので、18世紀中葉のものと考えられる。17図10と11、15と16は同じモチーフであるので同一セットで購入したものだろう。17図12は陶器の碗で、外面の青紫色は鉄絵が釉変したものである。18図4･5は磁器の碗で、４は見込みを蛇ノ目釉剥ぎせずに重ね焼きしているが、５は蛇ノ目釉剥ぎせずにアルミナを塗布し、その上に透明釉を描けている。

18図14･15･19は同じモチーフで１揃えのセットだろう。18図21･22は土師質土器



第30図　5次調査１号大土坑出土土器・陶器実測図３（３は1/3、他は1/4）

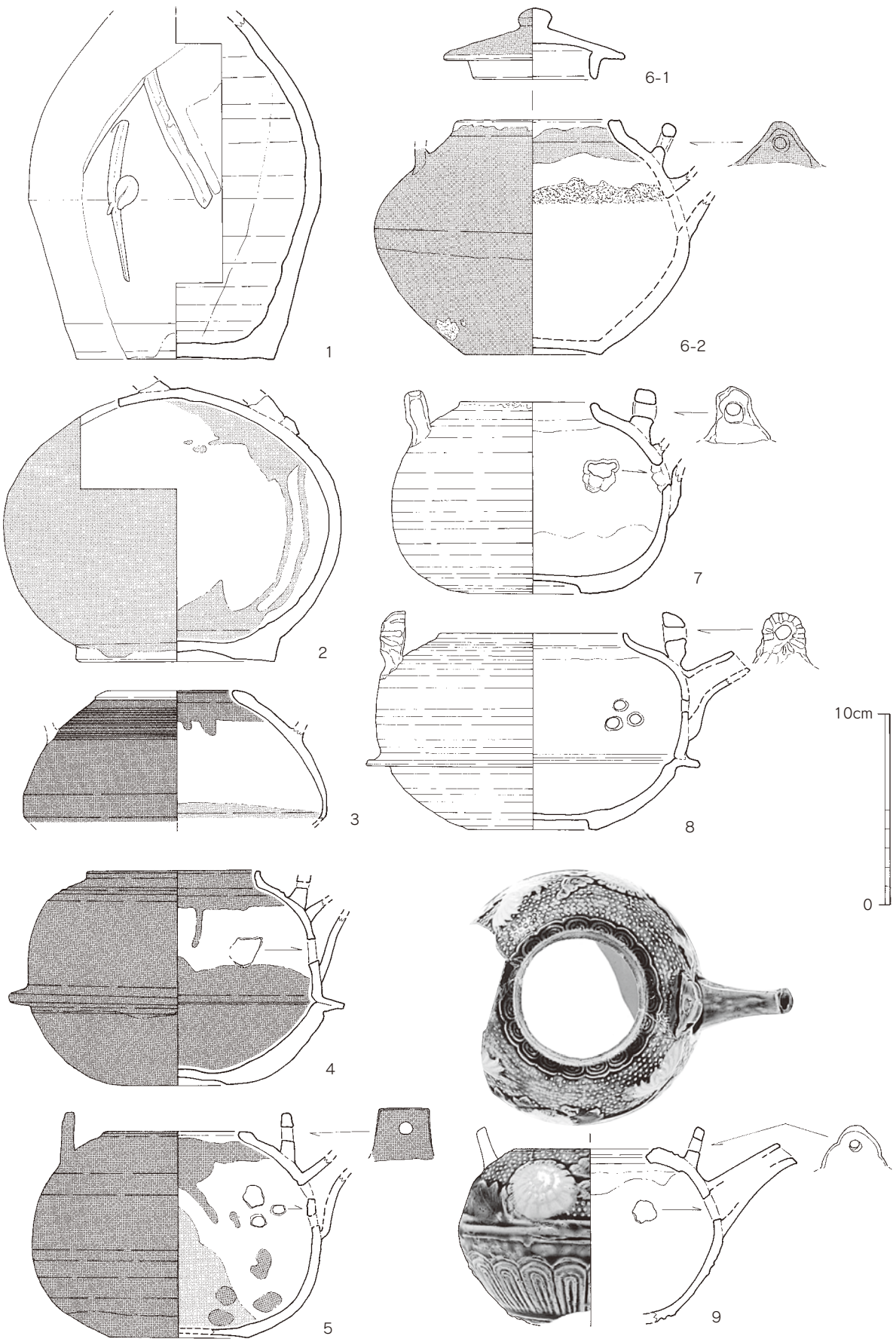


第31図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図７(1/3)

第32図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図８（1/3）

表16　５次調査出土土器・陶磁器観察表15

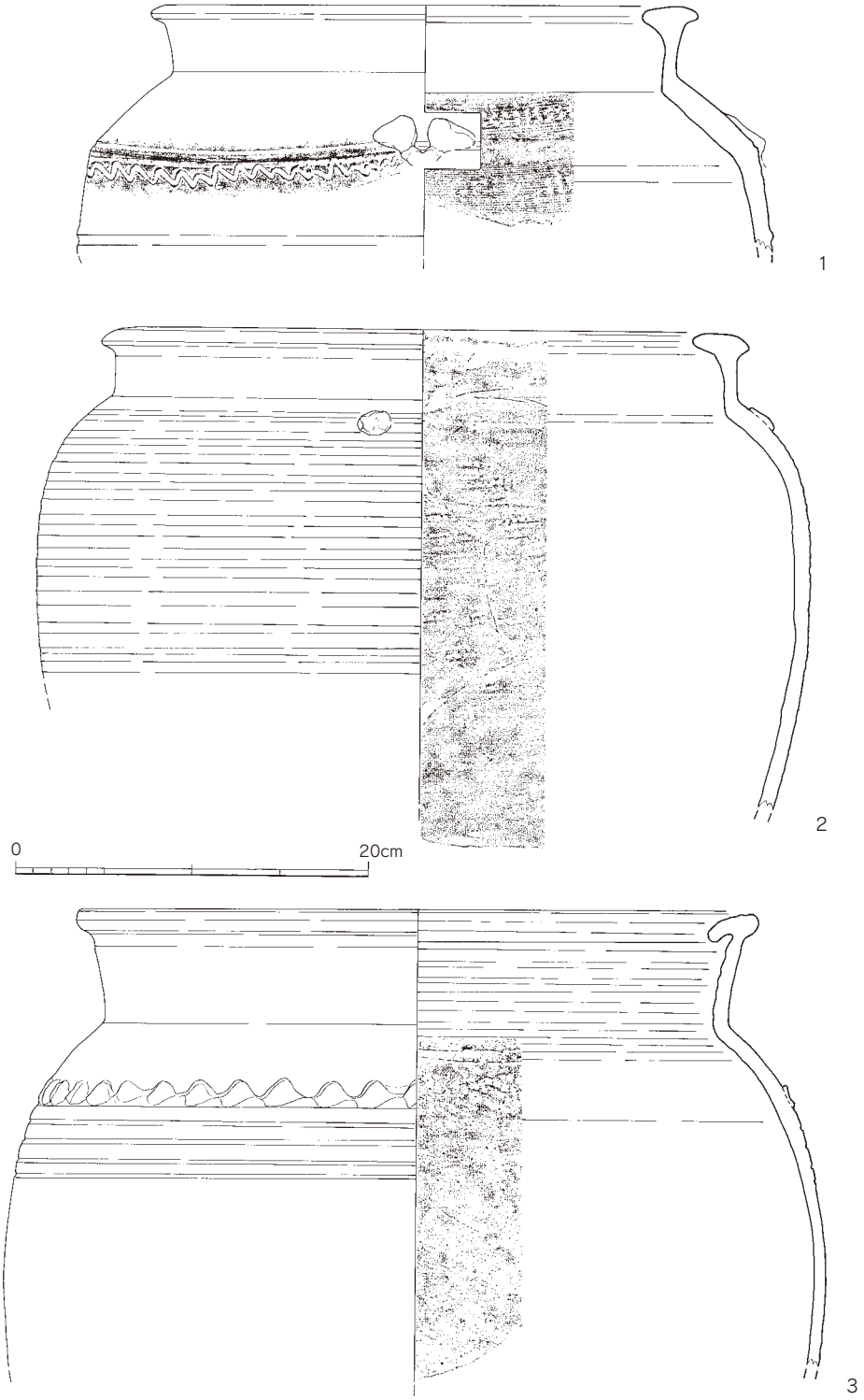
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１ 32図３	瓶 徳利	高台径7.4	磁器 灰白色	外面は頸部に飴釉を掛け、胴部に蝙蝠文とその脇に井桁文のセットを上下２つ呉須染付、最後に肩部まで透明釉掛け		畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１南部上層 32図４ 図版１	瓶 仏花瓶 盤口形	口径8.3 高台径7.5 器高15.5	陶器 にぶい暗黄灰色	鉄釉全面厚掛け	耳は手捏ね	畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布		須佐唐津か	不明
大土坑１南部上層 32図５	小瓶	高台径6.6	陶器 にぶい暗黄灰色	長石釉を全面掛けた後、光沢のない飴釉胴中位より上に厚掛け		貝目付着	貝目から17世紀代だろう	肥前	17世紀代
大土坑１南部上層 32図６	瓶 形状	口径8.0 高台径9.1 器高17.0	陶器 にぶい黄灰～黄橙灰色	肩部から下の外面に白化粧土をハケ掛けし、肩部から上は内外鉄釉を掛け、下は透明釉を掛ける		畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀代
大土坑１ 32図７	瓶 形状	高台径15.3 最大径8.4	陶器 黄橙灰色	白化粧土を肩部以下に掛けた後、頚部以上に内外鉄釉掛け外面鉄絵の笹文		畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布	透明釉を上掛けしていない	肥前	18世紀代
大土坑１南部上層 32図８	瓶 仏花瓶 盤口形	口径40.9 高台径15.3 器高16.8	磁器 灰白色	透明釉を内面口縁部から外面に掛ける	外面に草花文をコバルト染付 耳は手捏ねか	－		肥前	不明
大土坑１中層 32図９	瓶 秉燭	口径1.8	陶器 暗灰色	飴釉を全面に掛ける	受け部に穿孔と注口あり	－		小石原	不明
大土坑１中層 32図10	瓶 秉燭	高台径6.4 最大径10.2	陶器 暗紫灰色	鉄釉を外面に全面掛け　まず､色調の薄い方を横にして漬け、その後濃い方を上下逆にして漬けているので、内面は２つの異なる釉がかかっているように見える		畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布		肥前	不明
大土坑１中層 32図11	瓶 秉燭	高台径5.8 最大径8.4	陶器 黄橙灰色	鉄釉を外面に全面掛ける　注口は欠損しているが、対面の孔は残る		畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布		肥前	不明
大土坑１中層 32図12	瓶	高台径6.8 最大径12.2	陶器 暗紫灰色	緑灰色の灰釉を外面底部以外掛け	外底は削り出し	高台露胎	灰釉は発色不良　高台内に砂目付着	肥前	1690 ～ 1780
大土坑１中層 32図13	瓶	高台径7.3 最大径12.5	陶器 暗紫灰色	緑灰色の灰釉を外面底部以外掛け	外底は削り出し	畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布		肥前	1690 ～ 1780
大土坑１南部上層 32図14	瓶	口径3.1 最大径12.2	陶器 暗紫灰色	緑灰色の灰釉を外面から内面口縁部に掛けた後、最後にイッチンを流し掛け	外底は削り出し	畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布		肥前	1690 ～ 1780
大土坑１南部上層 32図15	小型瓶	高台径6.8 最大径9.6	陶器 暗紫灰色	白化粧土を外面胴下位から内面口縁部にハケ掛けした後、中位を櫛状掻き取りし、口縁部には鉄釉、肩部には発色不良のオリーブ色の灰釉と緑色の灰釉を流し掛け		底部露胎	肩部以下残存	肥前	1600 ～ 1690
大土坑１中層 33図１	瓶	底径(10.4) 最大径15.2	陶器 にぶい暗黄灰色に黄灰色が斑に入る	外面に山形の下に「ト」を陰刻し、オリーブ色の灰釉に藁灰釉を流し掛けし、内面は鉄漿を掛ける	不明		外面は釉の発色不良部分がある	小石原	不明
大土坑１上層 33図２	瓶 尿瓶	高台径10.4 最大径17.8	陶器 橙褐～暗灰色	飴釉を底部以外に全面に掛ける	棒状の把手がつく	畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布	天井部にカルキ付着	肥前	不明
大土坑１ 33図３	土瓶	口径6.1 最大径14.9	陶器 暗赤紫灰色	鉄釉を内面口縁部から外面胴上半に掛け　内面胴下半は鉄漿外面肩部に沈線　把手は板状		口唇部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１中層 33図４	土瓶	口径(9.1) 底径5.4 器高11.7	陶器 黄灰色	鉄釉を内面中位と外面鍔以下以外全面掛け	鍔で上・下を接合　外面肩部に沈線 外底は削り出しで碁笥底状	底部露胎	外底使用変色	小石原	不明
大土坑１ 33図５	土瓶	口径7.8 高台径7.1 器高10.8	陶器 暗赤紫灰色	黒釉を内面口縁部から外面胴中位に掛け　内面胴下半は鉄釉把手は板状		口唇部釉剥ぎ	内面胴中位に変色あり	肥前	不明
大土坑１黒色土 33図６－１ 図版１	蓋 土瓶蓋	裾径9.6 つまみ径1.4 器高3.7	陶器 橙褐色	銅緑釉を外面に掛ける		受け部釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀前半
大土坑１黒色土 33図６－２ 図版１	蓋 土瓶	口径8.6 底径7.2 器高12.2	陶器 橙褐色	銅緑釉を外面に掛ける			注口欠損　内部に鉄滓が充填している	肥前	19世紀前半
大土坑１中層 33図７	蓋 土瓶	口径40.9 高台径15.3 器高16.8	陶器 黄橙白～灰色 軟質	飴釉を内面口縁部から外面胴中位に掛け　内面胴下半はオリーブ色の灰釉　把手は型押し成型		底部露胎	焼成不良で、胎は軟質、釉の発色も悪い	肥前	不明
大土坑１中層 33図８	土瓶	口径40.9 高台径15.3 器高16.8	陶器 淡緑灰白色 軟質　精良	黒釉を内面口縁部から外面胴中位に掛け　内面胴下半は露胎把手は型押し成型		口唇部釉剥ぎ	内面に使用変色あり	肥前	不明
大土坑１中層 33図９	土瓶	口径7.2 最大径13.7	磁器 灰白色	型作りで、型押しで外面に菊花文や珠文などを陽刻している鉄釉を外面胴下位まで掛け、葉や口縁部は呉須が施し、菊花部は鉄釉拭き取り　外面の胴下位以下と内面口縁部下位以下は透明釉　外面胴下位には凹線が２条ある		底部露胎　受け部釉剥ぎ	底部煤付着	肥前	不明
大土坑１ 34図１	甕 半胴甕	口径(31.0) 最大径(39.4)	陶器 橙褐色	鉄釉全面掛け	外面肩部は沈線波状文と浮文、内面肩部には格子目タタキの当て具痕があるが、外面はナデ消されている	－		肥前	18世紀前半
大土坑１中層 34図２	甕	口径(36.6) 最大径(44.0)	陶器 橙褐色 マーブル手	鉄釉全面掛け	外面肩部は刻目突帯と櫛条の沈線、内面肩部には格子目タタキの当て具痕があるが、外面はナデ消されている	口唇部に胎土目跡がある	沈線は平行なので、１つの工具で一度に描いている　内面は発色不良なので倒立して焼成している	肥前	18世紀前半
大土坑１中層 34図３	甕	口径(38.6) 最大径(46.4)	陶器 にぶい紫灰色 マーブル手	鉄釉薄く全面掛け	外面肩部はカキ目の上に円形浮文、内面肩部には格子目タタキの当て具痕があるが、外面はナデ消されている	口唇部の内面側は釉剥ぎしている		肥前	17世紀後半



第33図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図９（1/3）

の小皿で、22の外面の火を受けた赤変しているラインは、21の径と一致するので、重ねて焼かれたものではなかろうか。

19図８は磁器の小皿で、見込みのアルミナが変色しているのは灯明皿として使用したためだろう。19図9･10は陶器の小皿で胎から肥前産と判断される。19図14は磁器の小皿で、口縁部の



第34図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図５(1/4)

打ち欠き部が黒変していることから、灯明皿として使用していたことがわかる。

20図７は磁器小皿で内面胴部に花文が配置されるというモチーフの構成が珍しい。

21図10は陶器小皿で口縁部の黒化は灯明皿として使用したためのもの。

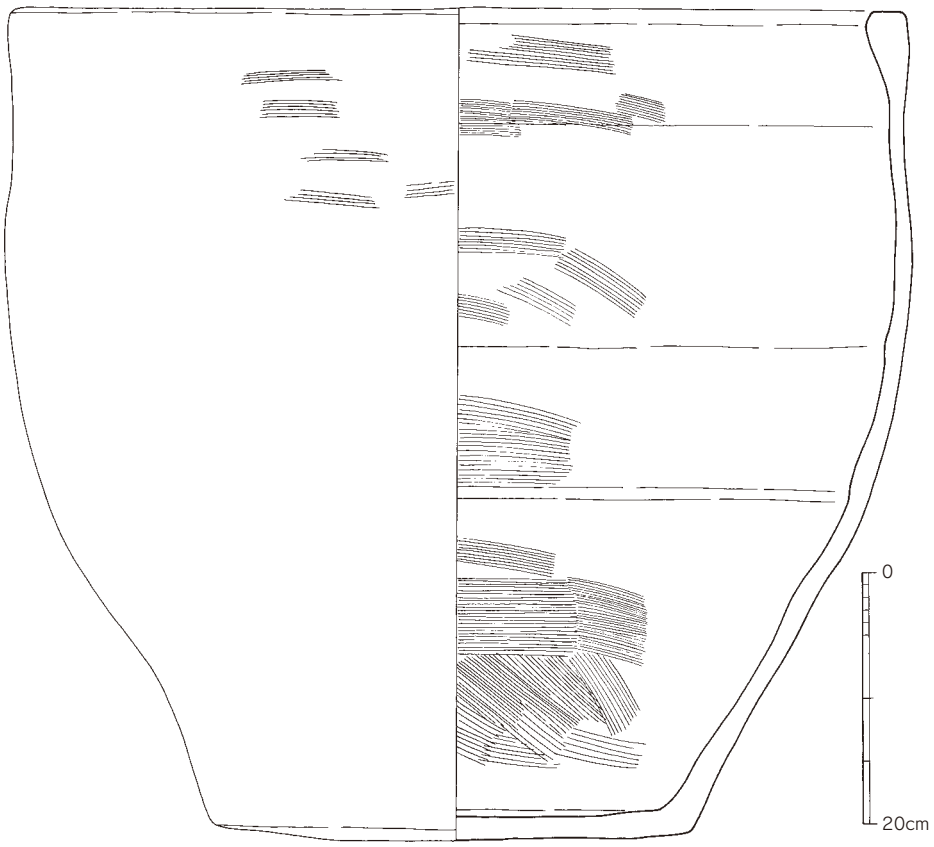
22図５は磁器の中皿で、多色の上絵があるが、発色がよくない。

23図３は磁器の皿で、欠損ではなく高台がなく、高台の付く位置には蛇ノ目釉剥ぎがあるのみで、成型途中での失敗品か、試作品なのか、類例を見ない。23図８は陶器の片口鉢で、内面から外面口縁部の透明釉は発色が悪く白濁する。

24図２は土師質土器の鉢で、内外面とも変色がなく、火入れや火鉢ではないようだ。24図３は瓦質の鉢で、本来器高が高いものだったようだが、欠損部を打ち欠いて新たな口縁部に整形して再利用している。24図４は陶器のこね鉢で、口縁部の釉は、灰白色の釉垂れがあるので白化粧土を使った可能性もあるが、藁灰釉の窯変とした。また、24図４と５は胎が近似しており、同じ系統の時期差の可能性がある。24図８は陶器の鉢で、畳付には見込みと同じように胎土目跡が残るはずだが、胎土目があったと思われる部分が剥落している。

25図1･2は陶器の鉢で、１は白化粧土の発色が悪く、掛け方も粗いことから、肥前産でなく二川焼の可能性もある。２は見込みに重ね焼き用の砂目跡があるのに、外底にはないので、重ね焼きの最下段であったのかもしれない。

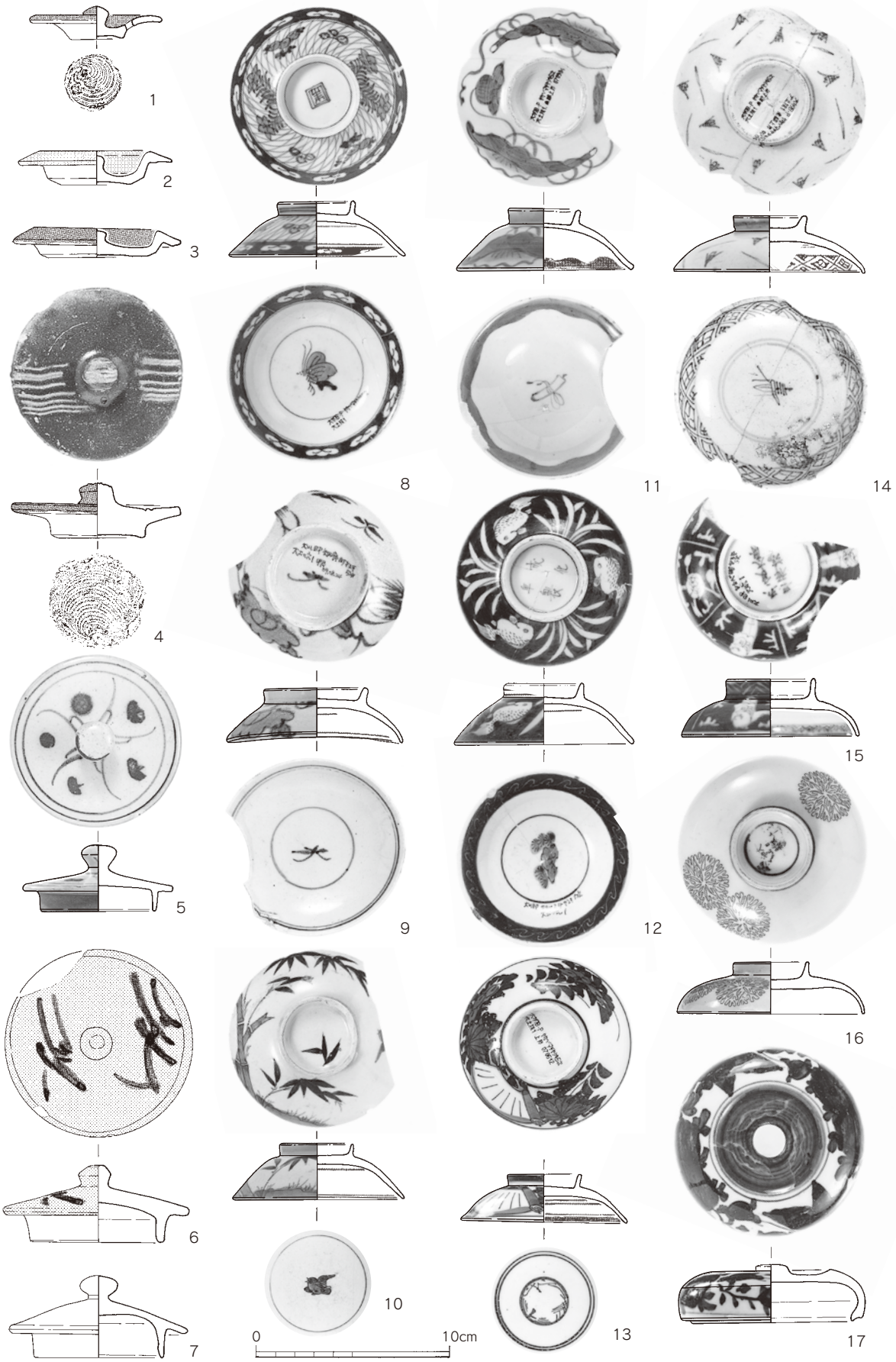
26図1･2･4から６は陶器の摺鉢で、１と２は見込みが使用により摩滅しているが、４から６は摩滅していない。小型の摺鉢であるためだろう。５は摺り目に赤色顔料が入っているのでベンガラを粉末にしたものではないか。６の見込みの重ね焼き痕は目跡ではなく、重ねた個体の底部の痕跡が残ったもの。



第35図　５次調査１号大土坑出土土器実測図(1/6)

表17　５次調査出土土器・陶磁器観察表16

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１南部上層 35図１	大甕	口径(72.0) 器高66.3 底径38.4	土師質土器 にぶい黄灰色	－	内面細かい目のハケ	不明		在地	不明
大土坑１黒色土 36図１ 図版１	蓋 急須蓋	裾径6.8 つまみ径1.2 器高1.7	陶器 にぶい暗黄灰色	黒釉を上面のみ	無文 底部糸切り	下半釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑１ 36図２ 図版１	蓋 水注蓋	裾径8.2 つまみ径1.1 器高1.7	陶器 にぶい黄灰色	暗緑灰色の灰釉を上面のみ	無文 底部ヘラ切り	下半釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑１中層 36図３	蓋 土瓶蓋	裾径8.8 つまみ径1.2 器高1.5	陶器 完形のため不明	黒釉を上面のみ	無文	下半釉剥ぎ	完形	肥前	不明
大土坑１中層 36図４ 図版１	蓋 土瓶蓋	裾径8.9 つまみ径1.8 器高3.0	陶器 暗紫灰色	鉄釉を上面のみ	上面に櫛状釉剥ぎを文様としている 底部糸切り	下半露胎	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑１中層 36図５	蓋 土瓶蓋	裾径8.0 つまみ径2.0 器高3.5	陶器 暗紫灰色	白化粧土を掛けた上に鉄絵と赤彩で文様を上絵描きし、透明釉を上面のみに掛ける		下半釉剥ぎ	完形	肥前	不明
大土坑１南部上層 36図６	蓋 土瓶蓋	裾径9.8 つまみ径1.6 器高4.1	陶器 灰色	長石釉を上面のみに掛けて、鉄絵を上絵描きする		下半釉剥ぎ	９割残存	萩焼か	不明
大土坑１上層 36図７	蓋 土瓶蓋	裾径9.2 つまみ径2.0 器高4.4	陶器 灰色	透明釉を上面のみに掛ける		下半釉剥ぎ	９割残存	不明	不明
大土坑１ 36図８	蓋	裾径10.0 つまみ径4.0 器高2.9	磁器 完形のため不明	透明釉　全面	内外面口縁部は墨引きの雲文帯で、外面は網目文内に桔梗文、内面天井部は蝶文、裏銘は二重圏に「」を呉須染付	受け部釉剥ぎ	完形	肥前	1820 ～ 1860
大土坑１中層 36図９	蓋	裾径8.9 つまみ径5.4 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は牡丹花文と蝶文で、内外面天井部に蝶文を呉須染付	受け部釉剥ぎ　砂目付着	９割残存	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１ 36図10	蓋	裾径8.9 つまみ径3.8 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は竹笹文、内面天井部は鳥文を呉須染付	受け部釉剥ぎ	９割残存 呉須が墨色なのは意図的か	肥前	19世紀後半 ～ 20世紀前半
大土坑１南部上層 36図11	蓋	裾径9.6 つまみ径4.0 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は牡丹花文、内面は口縁部がダミの波状文帯、天井部は巻物文を呉須染付	受け部釉剥ぎ　砂目付着	９割残存	肥前	1820 ～ 1860
大土坑１ 36図12	蓋	裾径9.4 つまみ径4.1 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は墨引きの金魚と水草文、内面は口縁部が墨引きの波状文帯、天井部は松文、裏銘は「成化年製」を呉須染付	受け部釉剥ぎ　砂目付着	完形	肥前	1820 ～ 1860
大土坑１上層 36図13	蓋	裾径8.9 つまみ径3.8 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は菊花葉文と扇文、内面は界線と天井部は環状松竹梅文をコバルト染付	受け部釉剥ぎ　砂目付着	９割残存	肥前か	19世紀後半
大土坑１南部上層 36図14	蓋	裾径10.0 つまみ径4.0 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は寿文と折松葉文、内面は口縁部に袈裟襷文帯、天井部は寿文を呉須染付	受け部釉剥ぎ　砂目付着	９割残存	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１ 36図15	蓋	裾径9.4 つまみ径4.8 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は墨引きで枠内に唐子文と花文が交互に入る　内面は口縁部に鋸歯文帯、裏銘は祥瑞焼銘を呉須染付　口錆あり	受け部釉剥ぎ　砂目付着	５割残存	肥前	1730 ～ 1740
大土坑１黒色土 36図16	蓋	裾径9.8 つまみ径4.0 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	茶とコバルトの２色銅版摺り染付で、外面は海草文　裏銘は「大日本柏山製」	受け部釉剥ぎ　砂目付着	ほぼ完形		19世紀後半
大土坑１中層 36図17	蓋 蓋物蓋	裾径9.8 つまみ径1.8 器高3.0	磁器 完形のため不明	透明釉　全面	外面崩れた花文をコバルト染付	受け部釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀後半
大土坑１中層 37図１	蓋 蓋物蓋	裾径9.4 つまみ径1.6 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は樹文を呉須染付	受け部釉剥ぎ　砂目付着	８割残存	肥前	1780 ～ 1860
大土坑１中層 37図２ 図版１	乗燭	口径3.4 底径7.3 器高11.9	陶器 橙褐色	透明釉を底部以外に掛ける	柱部は中空らしく、振ると穿孔により内部に落ちた粘土の存在がわかる　外底は削って上げ底にしている	底部露胎　口唇部釉剥ぎ	９割残存	肥前	不明
大土坑１南部上層 37図３	灯明受皿	口径7.0 最大径8.4 底径5.0	陶器 暗橙色	鉄釉を内面から裾外面中位まで	外底は糸切り	胴下半露胎 胎土目跡あり	８割残存	肥前	不明
大土坑１南部上層 37図４	仏飯器	口径8.5 裾径5.0 器高6.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面杯部に格子文地に菊花文、杯部底面と脚部には花弁文を呉須染付	底部釉剥ぎ	６割残存	肥前	不明
大土坑１黒色土 37図５	仏飯器	口径(6.4) 裾径4.0 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に半菊文を呉須染付	底部釉剥ぎ	８割残存	肥前	1780 ～ 1860
大土坑１中層 37図６	仏飯器	口径(6.1) 裾径3.8 器高4.8	磁器 灰白色	柿釉を全面に掛ける	無文	底部釉剥ぎ	６割残存	肥前	不明



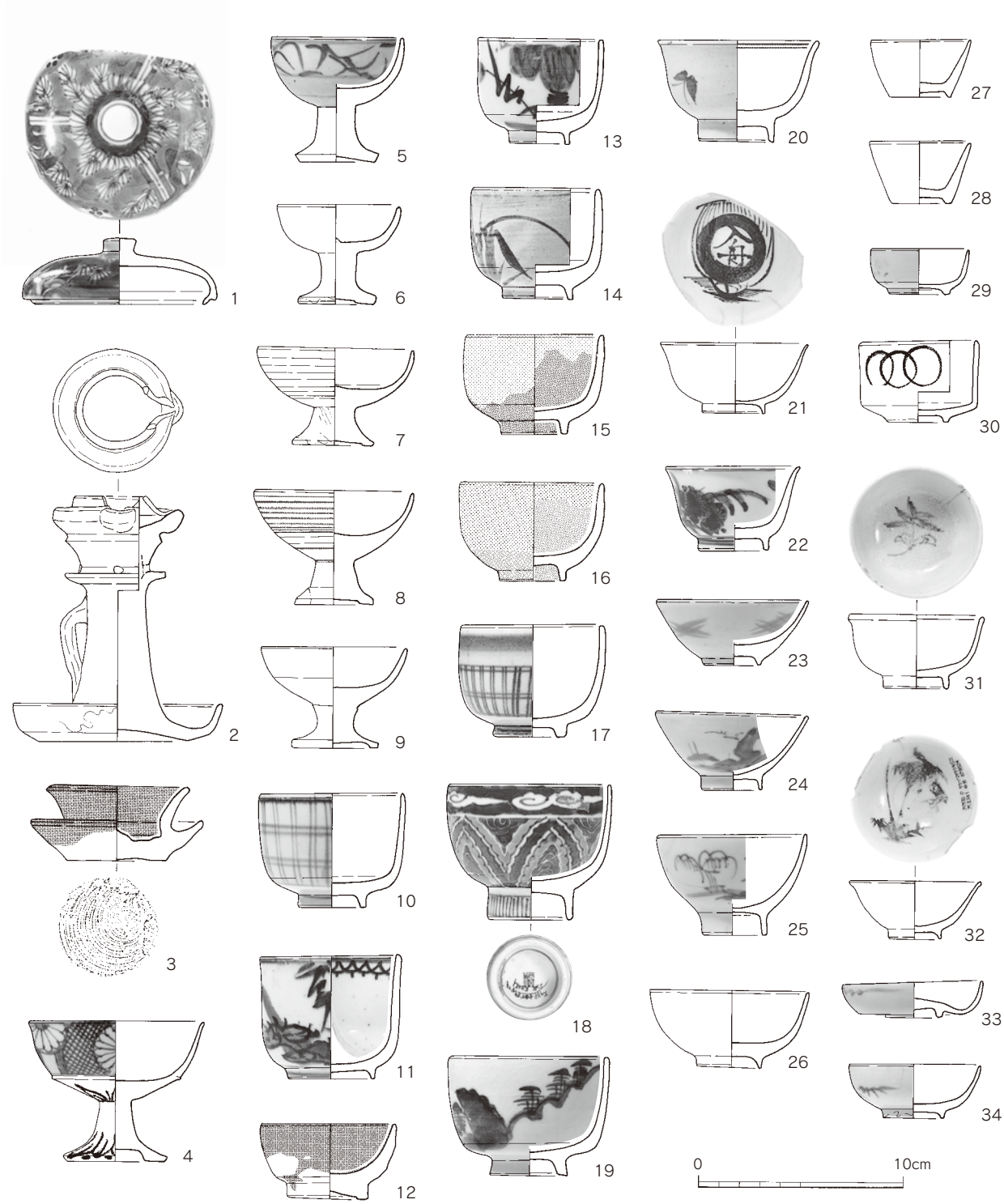
第36図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図10(1/3)

表18　５次調査出土土器・陶磁器観察表17

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) (　)は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所　見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１南部上層 37図７ 図版１	仏飯器	口径7.8 裾径4.0 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	底部釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑１南部上層 37図８	仏飯器	口径7.8 裾径3.9 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	界線を呉須染付	底部露胎	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑１南部上層 37図９	仏飯器	口径7.1 裾径3.2 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	底部釉剥ぎ	８割残存	肥前	不明
大土坑１ 37図10	小型碗 湯飲み	口径7.2 高台径3.4 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に二重格子文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
大土坑１上層 37図11	小型碗 湯飲み	口径6.9 高台径4.2 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に山水文、内面口縁部に複合半円文コバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１南部上層 37図12 図版１	小型碗	口径6.8 高台径4.0 器高3.6	陶器 発色不良のため軟質で灰白色	鉄釉を内面から外面胴下位まで掛ける		底部露胎	ほぼ完形　発色不良で、内面のみ発色している	肥前	1690 ～ 1780
大土坑１南部上層 37図13	小型碗 湯飲み	口径6.1 高台径2.9 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に山水文、内面口縁部に複合半円文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１黒色土 37図14	小型碗 湯飲み	口径6.4 高台径3.4 器高5.4	磁器 灰白色	発色不良で白濁した透明釉全面掛け	外面に水草文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１中層 37図15 図版１	小型碗	口径6.8 高台径3.1 器高4.8	陶器 灰色	飴釉の上に透明感のある灰釉を外面口縁部から内面胴上半に上掛け　灰釉は窯変が見られる		畳付釉剥ぎ	完形	小石原	不明
大土坑１中層 37図16	小型碗	口径7.1 高台径3.3 器高4.8	陶器 灰色	飴釉の上に透明感のある灰釉を外面口縁部から内面胴上半に上掛け　灰釉は窯変が見られる		畳付釉剥ぎ		小石原	不明
大土坑１中層 37図17	小型碗 湯飲み	口径7.1 高台径3.4 器高5.4	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面に口縁下に帯文と中位に格子文を呉須で染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	19世紀中葉
大土坑１ 37図18	小型碗 湯飲み	口径8.2 高台径4.2 器高6.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面に口縁下に墨引きの雲文帯、その下に花弁文、高台外面に櫛歯文、裏銘に「福」を呉須で染付	畳付釉剥ぎ	８割残存	肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 37図19	小型碗	口径7.7 高台径3.8 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面に１回転して１つの絵になる山水文を呉須で染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
大土坑１南部上層 37図20	小型碗 端反形	口径8.2 高台径3.8 器高5.0	磁器 灰白色	発色不良の透明釉全面掛け　貫入をり	外面に菖蒲花文と蝶文、内面に界線をコバルト染付　発色不良で黒色を呈する	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１上層 (黒色土) 37図21	杯	口径7.4 高台径3.2 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	見込みに帆掛船の帆の中央に円に「入舟」と描かれたモチーフがコバルト吹き付けで描かれている	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１上層 37図22	杯	口径6.4 高台径3.4 器高4.2	磁器 灰白色	光沢のある透明釉全面掛け	外面に菊花文と蝶文をコバルト染付発色不良で黒色を呈する	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 37図23	杯	口径7.5 高台径2.8 器高3.2	磁器 灰白色	発色不良の透明釉全面掛け　貫入あり	外面に斜格子文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１ 37図24	杯	口径7.4 高台径3.4 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉を高台以外に掛ける　貫入あり	外面に山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１中層 37図25	杯	口径7.4 高台径3.4 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１中層 37図26	杯	口径7.8 高台径3.1 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１上層 37図27 図版１	杯	口径4.8 高台径3.0 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑１中層 37図28 図版１	杯	口径5.0 高台径2.9 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	不明
大土坑１ 37図29	杯	口径4.6 高台径3.0 器高2.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	赤・緑彩で草花文を上絵付け	畳付釉剥ぎ	５割残存	肥前	不明
大土坑１中層 37図30	小型碗 筒形	口径5.8 高台径2.8 器高3.9	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に３つの円文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀後半 ～ 19世紀前葉

27図２は口縁部や高台の形態は18世紀後半から19世紀前半に見られるものだが、窯詰め技法が胎土目であることや、摺目単位が少ないことや、鉄釉の掛け分けがあることなどから、この器形の古い段階のものと考えられる。

28図１は陶器の半胴甕で、胎土から二川焼と考えられる。28図６は口縁内面側にだけ煤が付着していることから、何かを口に掛けて使用したことが想定される。欠損している範囲に、通風のための窓があっただろう。28図７は煤付きや黒変がないので火鉢ではなく植木鉢と判断した。



第37図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図11(1/3)

表19　5次調査出土土器・陶磁器観察表18

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑1中層 37図31	杯	口径6.6 高台径3.2 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	見込みに花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀後半
大土坑1中層 37図32	杯	口径6.4 高台径2.5 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	見込みに竹笹がコバルト吹き付けで、鳥が金彩で描かれている	畳付釉剥ぎ	8割残存	肥前	19世紀後半
大土坑1上層 37図33	杯	口径6.8 高台径2.8 器高1.8	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた竹笹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目が畳付とへたれた胴下位に付着する	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑1南部上層 37図34	杯	口径6.4 高台径3.0 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に竹笹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑1 38図1	鉢	底径16.0	陶器 淡暗紫灰～暗橙灰色 軟質	鉄釉の上に灰白色の灰釉が斑に入る釉を内外面に掛け、その上に藁灰釉を流し掛け　外底に墨書あるも記号らしく意味が通らない		外底釉剥ぎ	「タヒモ」を二本の縦線で消して「ヒヘモ」と横に書き換えている	肥前か	不明
大土坑1黒色土 38図2	急須	口径6.4 底径5.0 器高5.8	磁器 灰白色	型押し成型で、胴部の窪みに白化粧土を塗布、最後に透明釉を外面に掛ける		外底釉剥ぎ	把手のみ欠損	肥前	19世紀後半
大土坑1黒色土 38図3	急須	口径5.4 底径5.2 器高7.4	磁器 灰白色	型押し成型で、片部の梅花文の陽刻にコバルトを塗布		外底から胴下位釉剥ぎ	把手のみ欠損	肥前	19世紀後半
大土坑1黒色土 38図4	急須	口径6.6 底径6.4 器高6.2	陶器 淡暗紫灰～暗黄灰色	体部は型成型し、内底は小さなオサエの痕跡がある外面に花文・笹文の浮文を貼り付け、そこも異なる濃さの灰釉を掛けている　外面口縁部は鉄釉掛け		不明		不明	不明
大土坑1南部上層 38図5	水注	口径6.4 高台径5.8 器高10.0	陶器 橙灰白色	外面にオリーブ色の灰釉を掛ける		畳付釉剥ぎ 口唇部釉剥ぎ	胴下半は焼成不良で、釉の発色が悪く、外底の釉はちじれている	小石原か	不明
大土坑1中層 38図6	小型壺	口径(11.0) 最大径15.0	陶器 橙色	鉄釉外面施釉後櫛状掻き取り、内面肩部以下に鉄釉ハケ掛け		口唇部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑1南部上層 38図7 図版1	瓶 灰落とし	底径5.7	陶器 緑がかった灰白色	鉄絵の竹笹文を描いた後に外面透明釉を掛け、胴下位の屈曲部以下を掻き取り		胴下位露胎	完形　口唇部の欠けは煙管を打ちつけた時のもの	肥前	18世紀代
大土坑1中層 38図8	瓶	底径6.0	陶器 にぶい暗黄灰色　粒子がざらつく	外面に白化粧土を掛けた後、貫入の入る透明釉を外面と内面下位に掛け、外面は緑と黒彩の葉文の上絵付け		不明	胎が特徴的	京焼か	不明
大土坑1上層 38図9	瓶	底径8.8	磁器 灰白色	銅緑釉を外面に掛ける	外底に墨書あるも記号らしく意味が通らない	胴下位露胎	「スサ」を二本の縦線で消して「コヒ」と横に書き換えている	肥前	19世紀後半
大土坑1上層 38図10 図版1	焼塩壺	口径6.0 底径4.0 器高6.8	土師質土器 内面は赤変しているが、本来にぶい黄灰色　精良	－	内外面ナデ	不明	ほぼ完形	蒲池焼か	不明
大土坑1上層 38図11	焼塩壺	底径4.8	土師質土器 内面は赤変しているが、本来にぶい黄灰色　精良	－	内外面ナデ 外底糸切り	不明	ほぼ完形	蒲池焼か	不明
大土坑1南部上層 38図12	焼塩壺	底径4.0	土師質土器 内面は黒変しているが、本来にぶい黄灰色　精良	－	内外面ナデ 外底糸切り	不明		蒲池焼か	不明
大土坑1南部上層 38図13	焼塩壺	底径4.0	土師質土器 内面は赤変しているが、本来にぶい黄灰色　精良	－	内外面ナデ 外底糸切り	不明		蒲池焼か	不明
大土坑1黒色土 38図14	蓮華	短軸4.5	磁器 灰白色	薄い緑釉を全面に掛ける	型押し成型	畳付露胎		肥前	不明
大土坑1中層 38図15	ハマ	径6.2 器高2.0	陶器 砂粒を多く含む　灰白色	－	外面に鉄釉で円に棒の記号を描く	記号のある面が良く焼けているので、下面を接地している	8割残存	不明	不明
大土坑1中層 38図16	七輪窓の蓋	長軸9.8 短軸4.0 厚さ2.0	土師質土器 器面は黄灰白色だが、胎は淡橙色　金ウンモを多く含む	－	内面のカキ目が端部で途切れていることから、板作りではなく、同じ径の筒状のものを裁断している　つまみの凹凸は指オサエ	不明	ほぼ完形　胎から博多七厘のものではなく、在地ものだろう	在地	不明
大土坑1上層 38図17	小型瓶 仏花瓶	口径1.4 高台径3.3 器高9.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1780 ～ 1860
大土坑1中層 38図18	ミニチュア土鍋蓋	裾径5.5 つまみ径2.2 器高1.2	施釉土師質土器 にぶい暗黄灰白色	外面は透明釉の上に緑・黒・赤彩で上絵つけ　全面	型押しで、鹿と楓を陽刻している	裏面露胎	完形	在地	不明
大土坑1黒色土 38図19 図版1	合子	口径4.5 高台径1.4 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉　内面から外面口縁部	無文	底部露胎 受部釉剥ぎ	完形	肥前	不明
大土坑1黒色土 38図20 図版1	紅猪口 紅皿	口径4.0 高台径1.0 器高1.0	磁器 完形のため不明	透明釉　内面から外面口縁部	型押し成型で、外面に菊花文を陽刻する	底部露胎	完形	肥前	不明

第38図　５次調査 １号大土坑出土土器・陶磁器実測図５(1/3)

28図８は土師質土器の小甕で、外底の板状圧痕は幅が広い。

29図１から3･5･7は陶器の半胴甕で、１の内面の釉は発色が不十分なので何釉なのかわからない。２の口縁部が鋸歯状だが意図的に打ち掻いたものかもしれない。３は鉄釉の釉調から須佐唐津と想定される。５は胎の色調が斑で、密度が高く、鉄絵が稚拙で、釉掛けの省略が見られることから二川焼の可能性が高い。７は内面の釉切れ部の灰黒色は焼成不良の胎の色であって釉の発色ではない。

30図１は土師質土器の甕で、胎・調整・焼成など土師質瓦と同じものだが、径が小さいことと、下位の湾曲があることから甕と考えた。

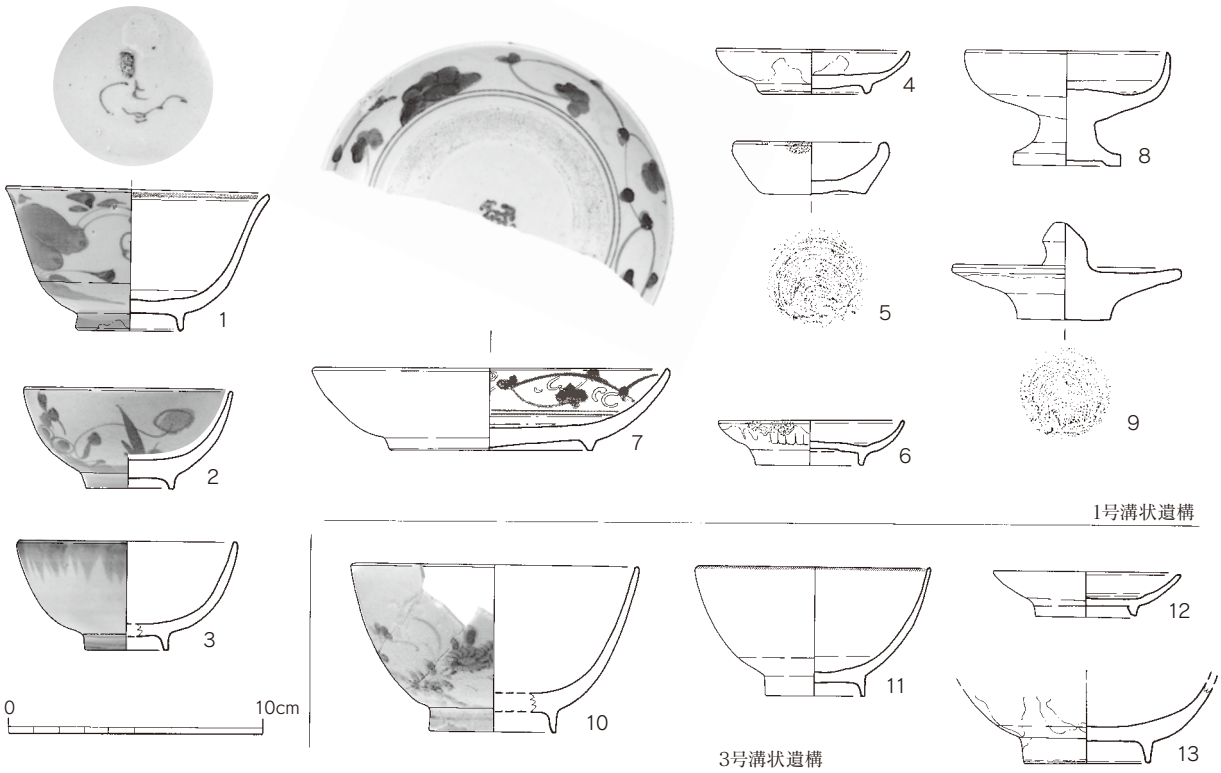
31図18は陶器の鉢で、胎が暗紫灰色なので、白化粧土を黄白色の下地とし、鉄絵を描いている。

33図１は陶器の瓶で、外面胴下位の釉が付着していない丸い部分は、釉薬に漬ける際に保持した指の跡だろう。外底には焼き台から外した際のものであろう欠損がある。33図２は陶器の尿瓶で、上半部は焼成が良いが、下半は飴釉が鉄釉状に発色する。33図６は土瓶の蓋と身ですが、いわゆる青土瓶である。

34図３は陶器の甕だが、内面の釉は薄く、露胎に見えるが、釉剥ぎした範囲と比べれば塗布されていることがわかる。36図15は染付の蓋で、裏銘は「五良大甫　呉祥瑞□」とあり、類例から最後の一字は「造」であり、「祥瑞焼」あるいは「祥瑞手」といわれるものである。銘については「呉」「祥瑞」ともに地名とする説と「五良大甫」「呉祥瑞」は人名とする説があり、後者では「五良太甫」は桃山時代～江戸時代に生きていた陶器商人とする説と、景徳鎮で陶芸を勉強し、中国名を「呉祥瑞」とした日本陶工とする説がある。本資料は釉調・胎から肥前染付である。

37図27は磁器の小杯で、27と28はほぼ同じものだが、畳付の形状が異なる。

38図10は焼塩壺で、胎は底部の中心部が暗紫灰色で、その周囲は淡赤黄灰色を呈する。外面口縁部が焼けているので外蓋がつくとわかる。38図18はミニチュアの土鍋の蓋で、胎は陶器ではないので、施釉土師質土器とした。胎は蒲池焼ではなく、搬入品だろう。



第39図　５次調査１・３号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3)

39図５は土師質土器の小皿で、口縁部の窪んだ部分に、39図6･12は磁器の小皿で６は外面口縁部に煤付着しているので灯明皿として使用したとわかる。６と12はつくりが同じ成型方法のなのでセットで購入したものだろう。

40図３は陶器の小型甕で、釉に漬ける際の指の跡が残る。

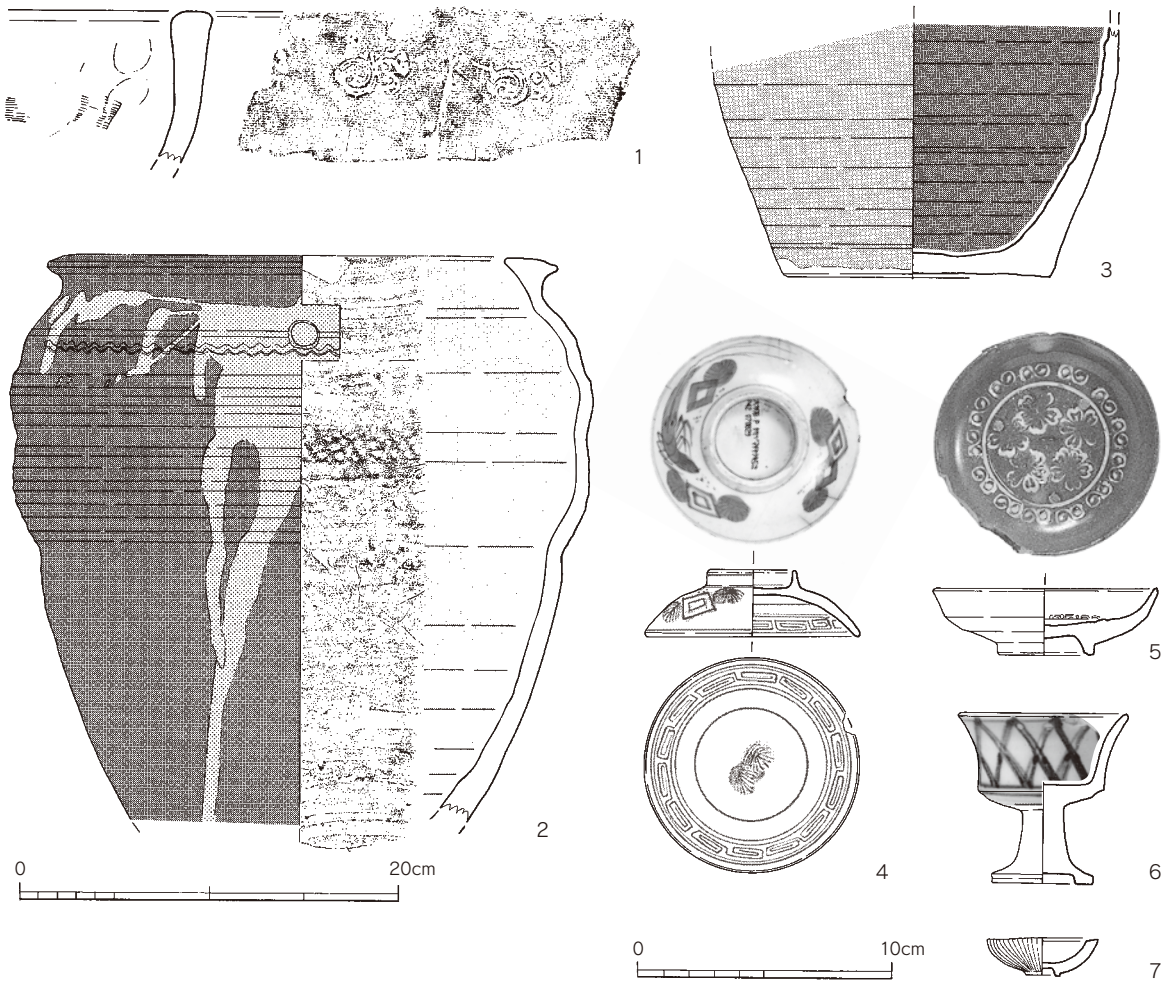
41図２は磁器の小皿で、同じ器形を重ねしており、上の個体の一部が付着している。41図３は陶器の香炉か火入れで、緑色の釉は灰釉ではなく、青磁に使う釉調である。41図６は軟質施釉陶器で､作りが悪い。近代に属するものだろうが､類例がないので産地･時期ともにわからない。

42･43図は土師質の瓦で、 42図６は凹面の中央部のみが暗褐色に変色しており、そこに汚水が流れたことがわかる。樋瓦であることを示す良好な資料である｡(写真４)42図７は雁振瓦としたが、径が小さいので丸瓦の可能性もある。

43図４は端部との接合部は凸面側に丸みがあるので、雁振瓦にあたる。4の凸面の変色は、凸面から端面外側が露出していたことを示す｡(写真４)42図２は樋瓦で凸面の黒変が著しく、凸面が屋内側に向いていたことを示している。

42図3･4、43図４は胎も内外面も橙褐色であり、胎土内の褐色パミスの多さから水田の赤瓦と考えられる。端部との接合部は内部側にオサエ列があり、外側は未調整である。

44図1･2･4は同じ調整が見られるので、同じ製作地の製品だろう。



第40図　５次調査ピット出土土器・陶磁器実測図(２は1/4、他は1/3)

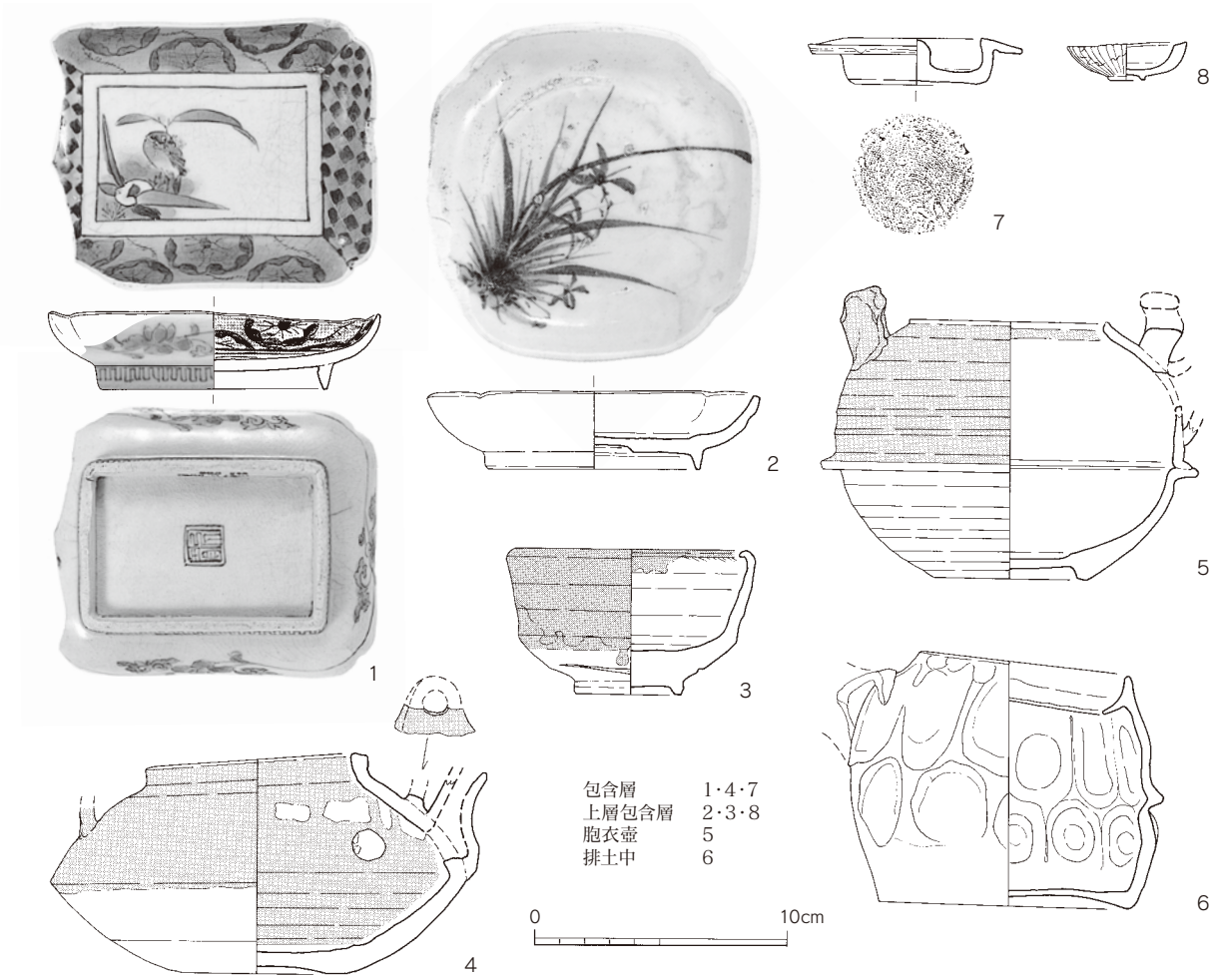
表20　５次調査出土土器・陶磁器観察表19

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
溝１ 39図１	碗 端反形	口径10.3 高台径4.2 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は花文、見込みは崩れてモチーフ不明、内面口縁部に口錆状を呉須染付	畳付釉剥ぎ	見込みに焼成時の付着物あり	肥前	19世紀中葉
溝１ 39図２	小型碗	口径8.2 高台径3.6 器高3.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	発色不良	肥前	不明
溝１ 39図３	小型碗	口径8.6 高台径(3.3) 器高4.3	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面雨降文の呉須染付	畳付釉剥ぎ	発色不良	肥前	不明
溝１ 39図４	小皿	口径7.6 高台径4.3 器高1.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ	発色不良で、貫入化している部分がある	肥前	不明
溝１ 39図５ 図版１	小皿	口径6.3 底径4.2 器高2.0	土師質土器 完形のため胎不明	－	無文	胎土目跡あり	完形 内面が黒変している	蒲池焼	不明
溝１ 39図６	小皿	口径7.4 高台径4.2 器高1.7	磁器 灰白色	透明釉　内面から外面口縁部	型押し成型で、外面菊花文を陽刻し、高台は貼り付け	底部露胎	６割残存 歪みあり	肥前	不明
溝１ 39図７	小皿 ５寸皿	口径(14.2) 高台径8.0 器高3.2	磁器 灰白色	発色不良で乳白色を呈する透明釉を全面に掛ける	内面に菊唐草文、見込みに５弁花文を呉須染付　赤絵を菊唐草文の上に唐草を、見込みに葉文足し、蛇ノ目釉剥ぎ部には花弁文が入る	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目に釉剥ぎ後アルミナ塗布	高台内部にカンナ痕	波佐見	1680 ～ 1740
溝１ 39図８	仏飯器	口径8.2 裾径4.2 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける		底部露胎	６割残存	肥前	不明
溝１ 39図９ 図版１	蓋 土瓶蓋	裾径8.9 つまみ径1.8 器高3.0	陶器 完形のため胎不明だが、器面は橙褐色	オリーブ色の灰釉を上面のみに掛ける		下半釉剥ぎ	完形 釉の白色部は発色不良	不明	不明
溝３ 39図10	碗	口径(11.4) 高台径(5.0) 器高6.5	磁器 灰白色	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面は菊花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1750
溝３ 39図11	碗	口径9.2 高台径4.0 器高5.0	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	口錆あり	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
溝３ 39図12	小皿	口径7.4 高台径4.0 器高1.8	磁器 灰白色	透明釉　内面から外面口縁部	型押し成型で、外面菊花文を陽刻し、高台は貼り付け	底部露胎	４割残存 歪みあり	肥前	不明
ピット7 40図１	鉢	－	土師質土器 橙灰白色 軟質粗放	－	外面に花付きの巴文のスタンプ 外面は燻した後にミガキ	不明	スタンプから水田焼とわかる	水田焼	不明
ピット7 40図２	鉢 半胴甕	口径27.0 肩径30.5	陶器 橙褐色	円形浮文貼り付け後全面鉄釉掛け、その後外面肩部に藁灰釉掛け流し　内面には格子目タタキ当て具痕が残る		口唇部釉剥ぎ	胎が紫色なのは焼成が強いためだろう	肥前	不明
ピット24 40図３	小甕か	底径10.3	陶器 橙褐色	外面オリーブ色の灰釉、内面鉄釉掛け		外底釉剥ぎ	釉の発色が良いのは胎が灰色の範囲	小石原	不明
ピット42 40図４	蓋	裾径8.3 つまみ径3.4 器高2.6	磁器 完形のため不明	透明釉を全面のみに掛ける	外面は海老文と菱形文で、内面口縁部に雷文帯、天井部に松文を呉須染付		裾部の欠損部が黒化	肥前	19世紀中葉
ピット42 40図５	小皿	口径8.8 高台径3.8 器高2.6	陶器 橙褐色	三島手のモチーフを見込みに刻印し、鉄釉を全面掛けた後、印刻部に白化粧土を掛けて、印刻部以外を拭き取って象嵌し、発色不良で黄色がかった透明釉全面掛け		畳付釉剥ぎ	８割残存	肥前	不明
ピット12 40図６	仏飯器	口径6.7 裾径4.0 器高6.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面格子文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	８割残存	肥前	不明
ピット42 40図７ 図版１	紅猪口 紅皿	口径4.5 高台径1.4 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉　全面	型押し成型で、外面菊花文を陽刻する	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	不明
上層包含層 41図１	小皿 変形皿 方形	長軸13.1 短軸10.0 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型　内面に花文と　文を対面の区画内に入れ、見込みに鳥文、外面胴部は牡丹唐草文、裏銘二重圏線内に福　呉須染付	畳付釉剥ぎ	８割残存	肥前か	19世紀中葉
上層包含層 41図２	小皿 変形皿 方形	口径13.0 高台径8.2 器高3.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面無文、内面見込み草花文と５弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡５つあり　蛇ノ目高台の台部釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
上層包含層 41図３	小鉢 香炉か	口径9.8 高台径4.2 器高5.7	陶器 灰白色 軟質	青磁釉を内面口唇部から外面胴中位まで掛ける	高台は貼り付け後削り出し	胴下位露胎	内面は口縁部以外は釉掻き取り	肥前	不明
包含層 41図４	土瓶	口径8.9 最大径16.6 器高8.5	陶器 にぶい橙灰色 混入物多い	オリーブ色の灰釉を胴中位まで、内面は口縁部と底部に鉄釉	把手部は型作り	底部露胎 口唇部は釉剥ぎ	外底部は黒く変色	小石原	19世紀代
胞衣壺２ 41図５	土瓶	口径7.8 最大径14.9 器高10.2	陶器 紫灰色 精良	鉄釉を外面胴中位以上と内面口縁部まで掛ける	把手部は型作り	底部露胎 口唇部釉剥ぎ	鉄釉は発色悪く、白濁している	肥前	不明
排土中 41図６	急須	口径8.0 最大径11.2 底径9.7	軟質施釉陶器 黄灰色	型押し成型で、外面に凹凸を作り、受け部を貼り付けた後、内面の受け部以下に透明釉を掛ける		底部露胎	つくりが悪い 内底と外面下半は煤付着	不明	不明
上層包含層 41図７ 図版１	蓋 土瓶蓋	裾径8.4 つまみ径1.1 器高1.8	陶器 完形のため胎不明だが、器面は橙褐色	黒釉を上面のみ	底面糸切り	裏面釉剥ぎ	完形	肥前	不明
ピット42 41図８ 図版１	紅猪口 紅皿	口径4.8 高台径1.4 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉　内面から外面口縁部まで	型押し成型で、外面菊花文を陽刻する	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	不明

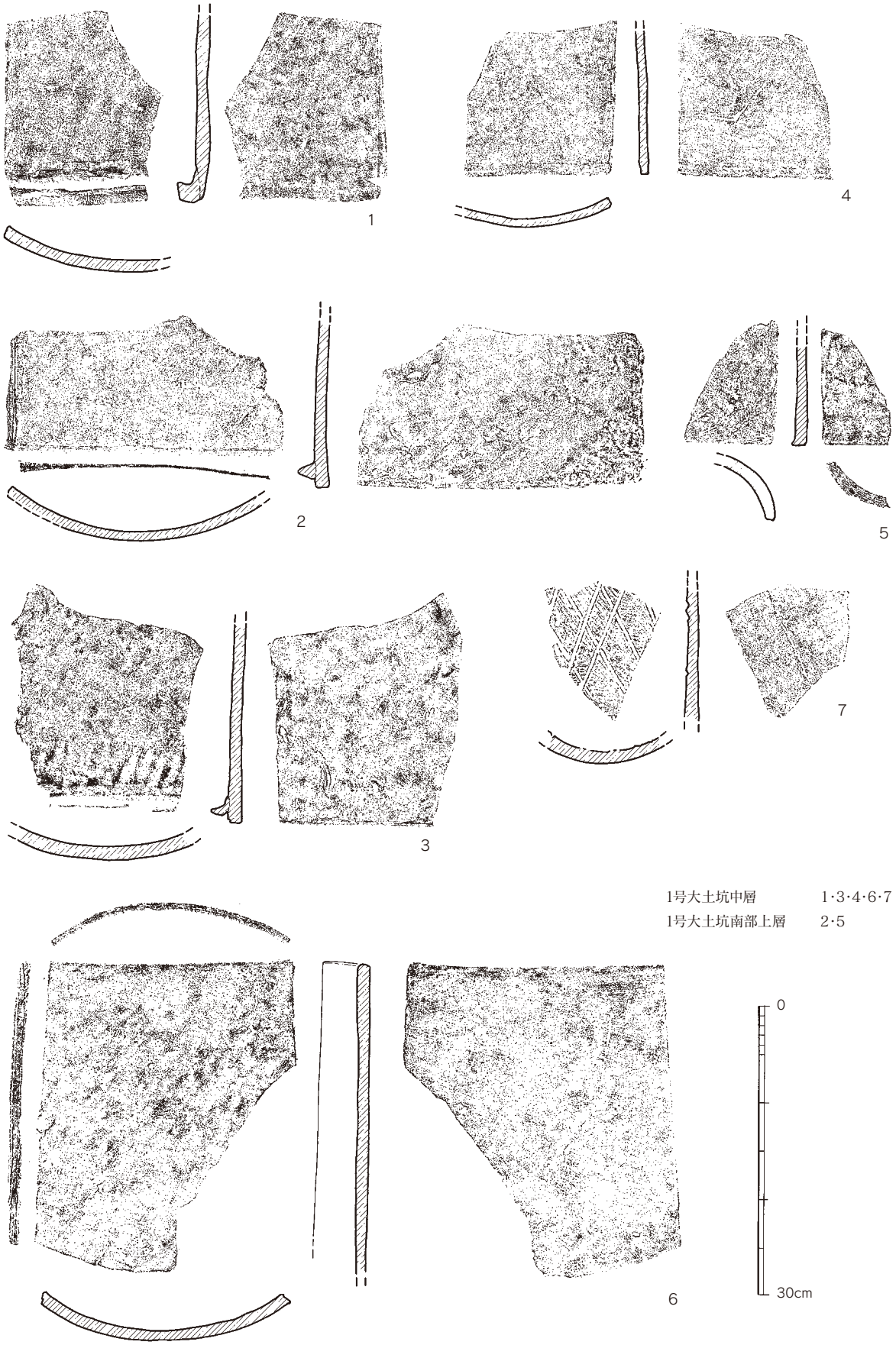
45図２は土人形の土馬で、騎人の痕跡ないが背中を窪ませているので、別造りの騎人人形と組み合わせた可能性がある。45図９は幼児人形で、頭の両横に穿孔があり、兜のしころの表現があるので、兜の鉢部は別造りで紐で組み合わせていたのではないだろうか。45図12は陶器の摺鉢で、内外露胎なので、口縁部のみ施釉する17世紀後半代の肥前産と考えられる。45図13は七輪のサナで、穿孔部の側面と外縁の側面は付着物がない。外縁の下半部は七輪の内面に固定されていたためで、焼けが弱い。45図14は円盤形の土製品だが中央に穿孔があるので、メンコ形土製品ではない。上面にのみ線刻文様があるが、近世にこのような小型の紡錘車は実用的ではないので、紡錘車ではないだろう。砲弾型ではなくとも独楽とされる例はあるので、独楽としたい。(注１)

46図3･4は窯道具の土製品で、丁寧に平坦面が作られているので、積み重ねる部材だろうか。まとめで後述するこしき炉の壁体だろうか。46図13は軽石製の砥石で、全面加工して小型の三角柱形状を呈している。曲面を研磨するための手持ち砥石と形態や大きさが同じなので、砥石に使う石材ではないが砥石と考えるべきだろう。46図14は硯で、側面・裏面に光沢のある付着物があるので、木枠に収めて膠などで固定していたものと思われる。

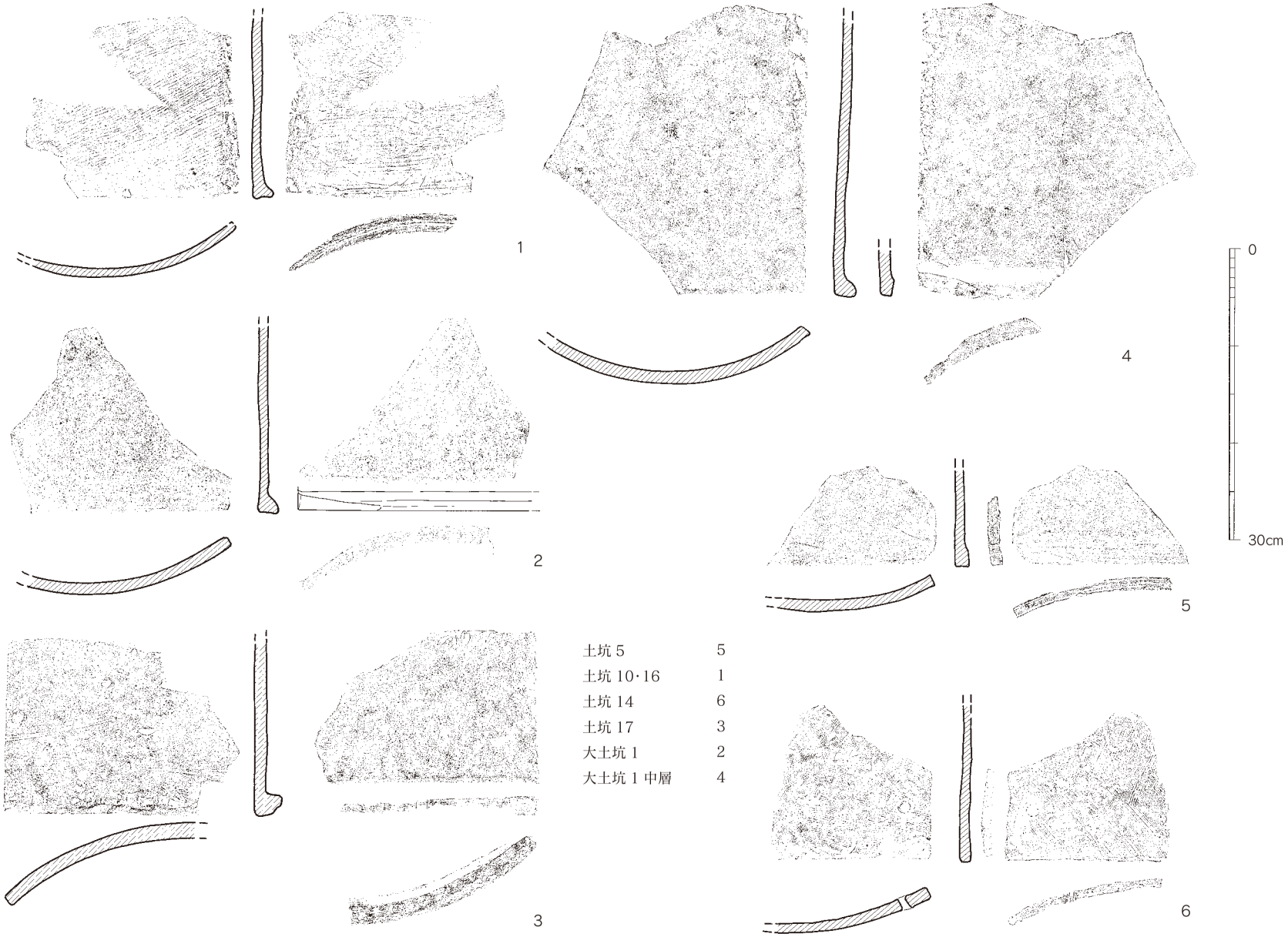
47図５は火打金で、三角形の下辺部分の中央部が使用により摩滅している。47図９～11は大型の縫い針だろう。9･10の短いものは莚で長いものは畳用だろうか。47図16は包丁で、17･18に比べて身が厚く、17･18は刃が付いておらず未成品の可能性があるが、包丁にしては幅が広い



第41図　５次調査包含層・２号胞衣壺・排土出土土器・陶磁器実測図(1/3)



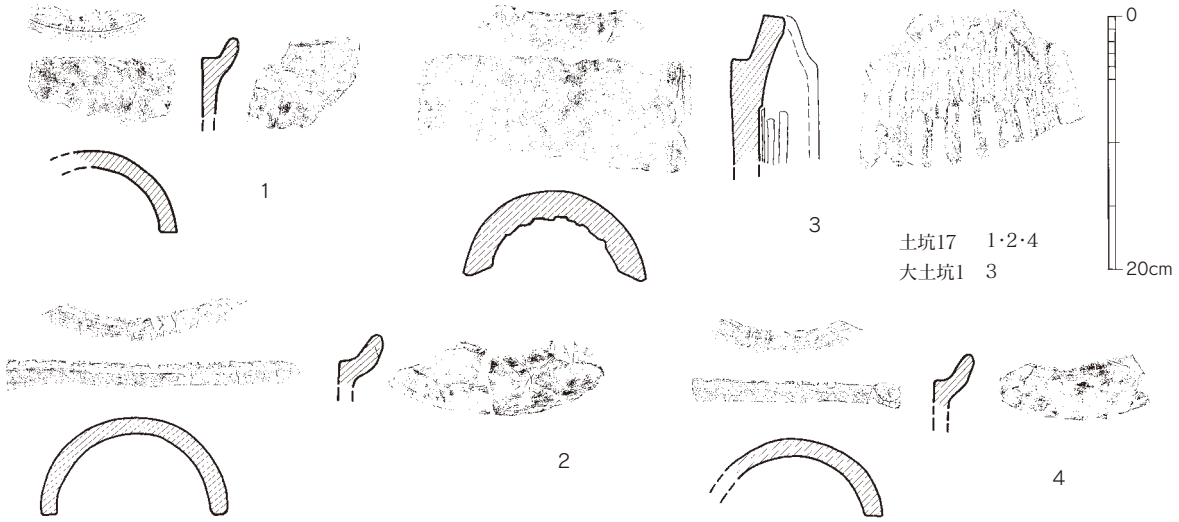
第42図　5次調査出土土師質瓦実測図1（1/6）



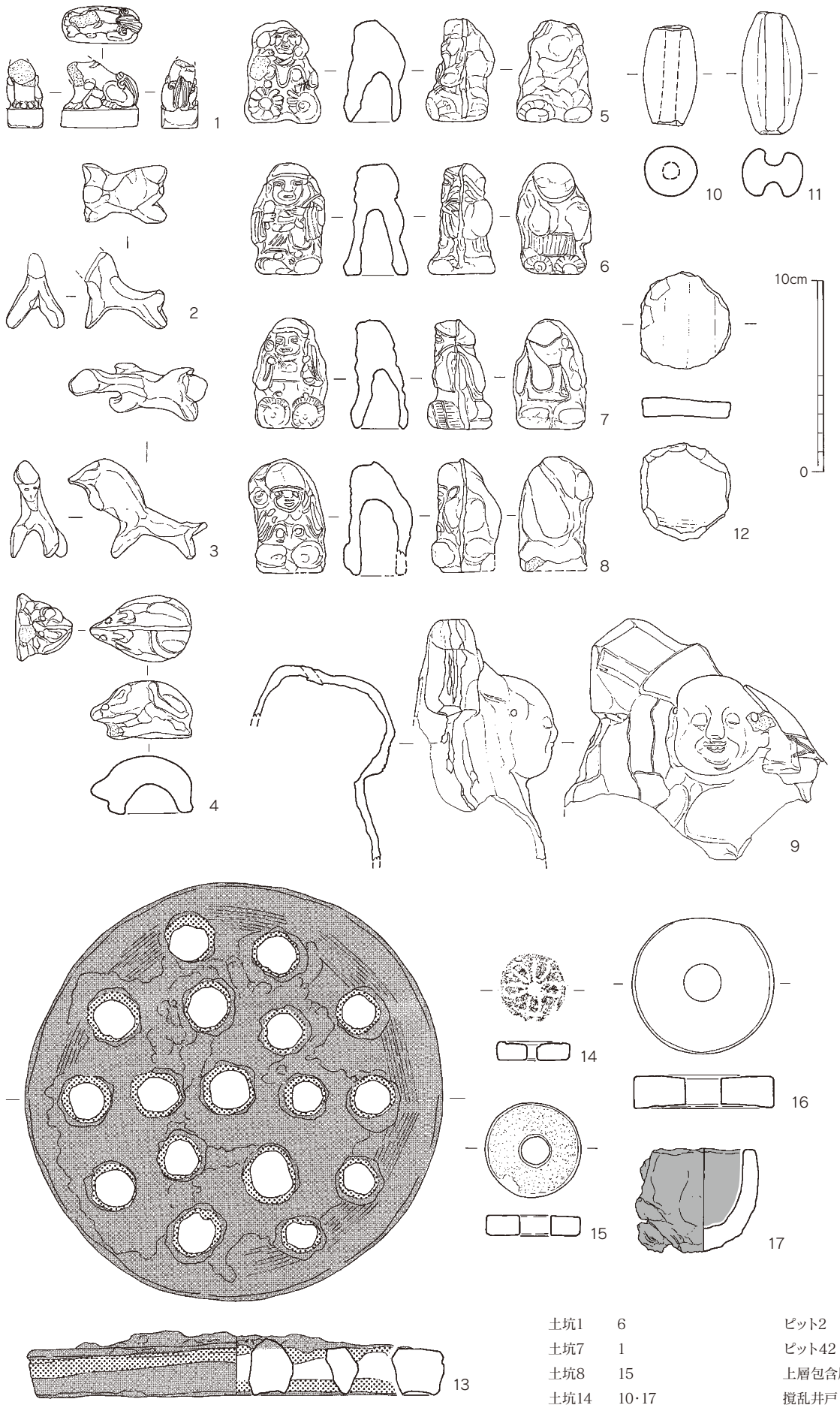
第43図　5次調査出土土師質瓦実測図2 (1/6)

表21　５次調査出土瓦観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類 胎の特徴	色調	調整・整形・装飾技法 凹面	凸面	上下端面・瓦当	側端面	製作技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１中層 42図１ 図版３	樋瓦	長さ19.6 幅16.3 厚さ1.2	土師質土器 黄灰白色が黒灰色を挟む	黄灰白色	目の細かいハケを丁寧に施す	目の細かいハケを丁寧に施す	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	１枚造り	白色粒子を多く含む　変色なし	在地	不明
大土坑１南部上層 42図２	樋瓦	長さ18.0 幅26.6 厚さ1.5	土師質土器 にぶい暗黄灰白色	灰黒色	ナデ	目の細かいハケ	ナデ	ケズリ	１枚造り	凸面から端面外側が変色	在地	不明
大土坑１中層 42図３ 図版３	樋瓦	長さ21.4 幅18.5 厚さ1.3	土師質土器 暗茶褐色が黄灰色を挟む	橙茶褐色	オサエ後ナデ	ハケ後ナデ	ナデ	—	１枚造り	凹面のみ器面摩滅	在地	不明
大土坑１中層 42図４ 図版３	雁振瓦	長さ15.0 幅15.3 厚さ1.0	土師質土器 橙茶褐色がにぶい黄灰色を挟む	橙茶褐色	目の細かいハケ	目の細かいハケ	ナデ 面取り	中央まで切り込みを入れ、折っている	１枚造り	器面摩滅も変色もなし	在地	不明
大土坑１中層 42図５ 図版３	丸瓦	長さ10.6 幅5.5 厚さ1.0	土師質土器 にぶい暗黄灰白	灰黒色	オサエ後ナデ	目の粗いハケを丁寧に施す	ナデ	ナデ	１枚造り	凸面端部は突出する	在地	不明
大土坑１中層 42図６	樋瓦	長さ32.5 幅26.3 厚さ1.2	土師質土器 にぶい暗黄灰白灰色	にぶい暗黄灰褐色	目の細かいハケ	目の細かいハケ	ナデ	中央まで切り込みを入れ、折っている	１枚造り	凹面のみ器面摩滅　変色あり	在地	不明
大土坑１中層 42図７ 図版３	雁振瓦	長さ14.2 幅12.4 厚さ1.2	土師質土器 橙灰色がにぶい灰色を挟む	橙灰色	目の粗いハケの後格子目沈線	目の細かいハケ	—	—	１枚造り	凸面のみ器面摩滅	在地	不明
土坑10・16 43図１ 図版３	雁振瓦	長さ19.0 幅16.4 厚さ1.2	土師質土器 灰黒色が灰白色を挟む	灰黒色	目の粗いハケを丁寧に施す	目の粗いハケを丁寧に施す	ナデ	—	１枚造り	側端側の凹凸面の器面剥落著しい	在地	不明
大土坑１ 43図２ 図版３	雁振瓦	長さ19.5 幅21.3 厚さ1.0	土師質土器 黄橙色が暗黄灰色を挟む	にぶい橙褐色～灰黒色	目の細かいハケ	目の細かいハケ	ナデ	—	１枚造り	器面摩滅なし 内外変色あり	在地	不明
土坑17 43図３ 図版３	雁振瓦	長さ18.5 幅20.1 厚さ1.6	土師質土器 にぶい黄灰白灰	灰白褐色	目の細かいハケ	目の細かいハケ	ケズリ	ケズリによる面取り	１枚造り	内外変色ほとんどなし	在地	不明
大土坑１中層 43図４	雁振瓦	長さ28.8 幅27.2 厚さ1.3	土師質土器 暗茶褐色が黄灰色を挟む	橙茶褐色	目の細かいハケ後ナデ	目の細かいハケ後ナデ	ナデ	中央まで切り込みを入れ、折っている	１枚造り	凹面のみ変色	在地	不明
土坑５ 43図５ 図版３	雁振瓦	長さ10.4 幅16.2 厚さ1.0	土師質土器 黄灰白色が黒灰色を挟む	明黄灰褐色	ハケ	ハケ後ナデ	ナデ	ケズリ	１枚造り	器面摩滅も変色もなし	在地	不明
土坑14 43図６ 図版３	雁振瓦	長さ16.4 幅16.4 厚さ11.3	土師質土器 灰色　白色粒子を多く含む	灰黒色	丁寧なハケ	丁寧なハケ	ナデ	ケズリ	１枚造り	釘孔あり	在地	不明
土坑17 44図１	丸瓦	長さ6.1 幅9.3 厚さ1.3	瓦質 灰色	灰黒色	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	１枚造り		在地	不明
土坑17 44図２	丸瓦	長さ4.4 幅15.0 厚さ1.4	瓦質 灰色	灰黒色	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	１枚造り		在地	不明
大土坑１ 44図３ 図版３	丸瓦	長さ11.8 幅14.5 厚さ2.5	瓦質 灰白色	灰黒色	摸骨痕が大きく窪むその周りに莫蓙のような圧痕あり	ナデ	ナデ	ヘラケズリが２面ある	１枚造り		在地	不明
土坑17 44図４	丸瓦	長さ4.5 幅13.6 厚さ1.3	瓦質 灰色	灰黒色	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラケズリが２面ある	１枚造り		在地	不明



第44図　５次調査出土瓦実測図(1/6)



土坑1	6	ピット2	7
土坑7	1	ピット42	14
土坑8	15	上層包含層	11
土坑14	10・17	撹乱井戸	5・8
大土坑1	2～4・9・12・13・16		

第45図　５次調査出土土製品実測図(1/3)

ので調理用ではなく、藁やい草などを切るための農作業用かもしれない。

49図1･4は椀で、1は外面モチーフは欠損と剥落のため判然としない。金彩が剥げた下に赤漆が残っているので、赤漆だけになっている部分も本来金彩があったのだろう。4は高台側面に穿孔して桜の樹皮と思われるもの縒った紐を通しているが、樹皮の先端は端部は欠損している。桜の樹皮は緊縛具として使用されることから、柄や板と緊縛していたことが予測される。9は端反形で低い高台が底部端につく変わった器形の椀である。22は脚付盤であろう。残存する脚の位置関係から３脚であろう。

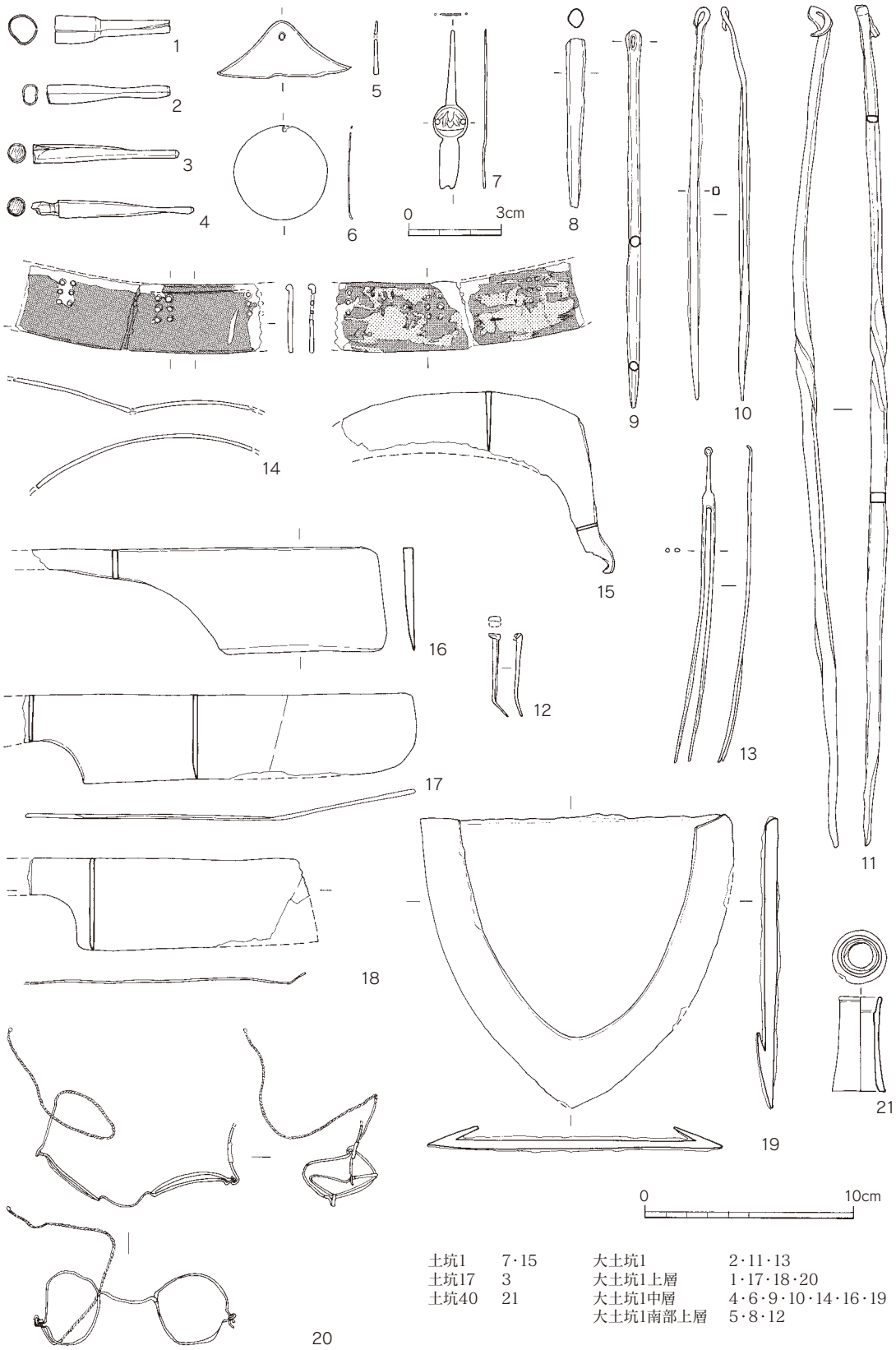
50図4･10･12は下駄で、４の台上面踵部の×印の沈線は秋田裕毅(文献１)によると、呪術的な封印の意味があるといわれている。10は歯の接地部分に砂が挟まっている。12は壺孔の周囲

表22　５次調査出土土製品観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類 胎の特徴	調整・整形・装飾技法	製作技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
土坑７ 45図１ 図版２	土人形 狛犬	長さ4.0 幅1.9 高さ3.5	土師質土器 暗黄灰白色	頭部は欠損、左右対称で、前足は融合している	型合わせ成型		在地か	不明
大土坑１上層 45図２ 図版２	土人形 土馬	長さ3.0 幅3.8 高さ4.0	土師質土器 暗灰白色	頭部は欠損だが鬣がある　尻尾は尖る	手捏ね		在地	不明
大土坑１上層 45図３ 図版２	土人形 土馬	長さ2.8 幅7.1 高さ5.2	土師質土器 黄灰白色	顔は粘土貼り付けで表現　尻尾は丸い	手捏ね	完形	在地	不明
大土坑１南部上層 45図４ 図版２	土人形 鼠	長さ3.6 幅5.3 高さ3.0	土師質土器 暗黄橙灰色	表裏型合わせた後に下面を押し上げる	型合わせ成型	完形	在地	不明
撹乱井戸 45図５ 図版２	土人形 大黒天像	長さ3.6 幅3.4 高さ5.8	土師質土器 金雲母なし 黄橙灰色	型合わせ成型の接合痕が隆起している　下面から穿孔あり	型合わせ成型	後面が高いのは型のずれ ほぼ完形	在地	不明
土坑１ 45図６ 図版２	土人形 大黒天像	長さ3.5 幅3.5 高さ5.7	土師質土器 金雲母なし 黄橙灰色	２つの型で成型したものの１片　表裏型合わせた後に下面を押し上げる	型合わせ成型	完形 変色なし	不明	不明
ピット２ 45図７ 図版２	土人形 大黒天像	長さ3.8 幅3.4 高さ5.7	土師質土器 金雲母なし 黄灰白色	型合わせ成型の接合痕が隆起している　下面から穿孔あり	型合わせ成型	後面も文様がよく出ている 完形	在地	不明
撹乱井戸 45図８ 図版２	土人形 大黒天像	長さ3.9 幅3.4 高さ5.3	土師質土器 暗橙灰白色	表裏型合わせた後に下面を押し上げる	型合わせ成型	器面摩滅 ほぼ完形	在地	不明
大土坑１中層 45図９ 図版２	土人形 幼児人形	長さ11.6 幅7.4 高さ10.2	土師質土器 黄白色	２つの型で成型したものを接合している　接合部はケズリ　頭の両横に穿孔があり、兜のしころの表現がある	型合わせ成型		在地	不明
大坑14 45図10 図版２	土錘 管型	長さ5.1 最大径2.9 重量30	黄灰色	手捏ね　ナデ　穿孔径0.8cm	―	ほぼ完形	在地	不明
上層包含層 45図11 図版２	土錘 有溝断面工字形	長さ6.3 幅3.0 厚さ2.4重量34	黄灰色 淡橙褐色	手捏ね　ナデ　孔幅1.0cm	―	完形	在地	不明
大土坑１上層 45図12 図版２	陶器片転用 円盤形製品	長軸4.9 短軸4.7 厚さ1.0	土師質土器 混入物あり 黄灰色	肥前陶器の擂鉢の転用 側縁は全周打ち欠いている	転用		在地	不明
大土坑１ 45図13 図版２	サナ	径21.8 孔径2.7～3.2 厚さ3.0	土師質土器 黄橙灰色	表裏面にハケが残る　穿孔の縁が尖っているので両面から穿孔しており、貫通させるのではなく抉り取っているとわかる　焼け方は両面とも同じくらいだが、上面より下面の方が付着物が多い		完形	在地	不明
P42 45図14 図版２	独楽か	径3.8 厚さ1.0	土師質土器 黄灰色	ナデで上面は花形のスタンプ　中央に径４mmの穿孔あり		完形	在地	不明
大坑８ 45図15 図版２	戸車	径4.0 孔径1.6 厚さ1.1	磁器 灰白色	表裏面にアルミナ付着　穿孔面に透明釉があるが側面は釉が摩滅して失われている		完形	肥前	不明
大土坑１黒色土 45図16 図版２	戸車	径7.2 孔径1.8 厚さ1.7	磁器 灰白色	穿孔面に透明釉があるが側面は釉が摩滅して失われている　側面の一部が集中的に磨り減っている　一面に高台の痕跡があるので、焼き台の転用だろう		完形	肥前	不明
土坑14 45図17 図版２	るつぼ	口径5.4 器高5.4	土師質土器 完形のため不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	外面の赤茶色の付着物は鋳鉄か	在地	不明

土坑1	11
土坑17	7·10
大土坑1	2·8
大土坑1上層	3～6·9·13·15
大土坑1中層	1
上層包含層	12

第46図　５次調査出土土・石製品実測図(1/3)

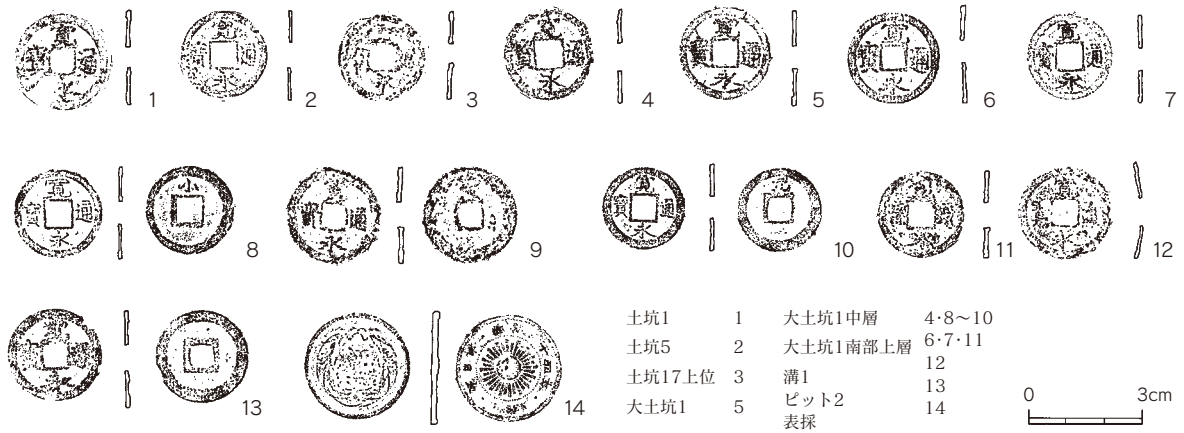


土坑1	7・15	大土坑1	2・11・13
土坑17	3	大土坑1上層	1・17・18・20
土坑40	21	大土坑1中層	4・6・9・10・14・16・19
		大土坑1南部上層	5・8・12

第47図　５次調査出土金属・鹿角製品実測図(1/3)

表23　５次調査出土土・石製品観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm、g) ( )は復元値	胎の種類 胎の特徴	調整・整形・装飾技法	製作技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
大土坑１中層 46図１ 図版２	棒状土製品	長さ13.7 幅2.8 厚さ3.0	土師質土器	下面がよく焼けており、付着物多い　上面は端部だけが赤化している	手捏ね　端部は斜めに裁断されている		在地	不明
大土坑１ 46図２ 図版２	棒状土製品	長さ12.5 幅2.7 厚さ2.9	土師質土器	下面がよく焼けており、付着物多い　上面は側端面だけが赤化している	手捏ね　側端面は裁断されている	上面に板状圧痕が残る	在地	不明
大土坑１中層 46図３ 図版２	棒状土製品	長さ16.3 幅5.1 厚さ4.2	土師質土器	上面がよく焼けており、付着物多い　下面は赤化しているのみ	手捏ね　端部は面取りで丸く仕上げられている	側面に融着物が剥がれた痕跡あり	在地	不明
大土坑１上層 46図４ 図版２	棒状土製品	長さ14.0 幅4.9 厚さ4.0	土師質土器	上面がよく焼けており、付着物多い　１側面と下面は付着物なし	手捏ね　各面は丁寧に整形されている		在地	不明
大土坑１上層 46図５ 図版２	板状土製品	長さ9.1 幅9.4 厚さ2.0	瓦質土器	平瓦片の転用で、上下面とも端部がよく焼けており、側端面は付着物あり		上下面とも中央が帯状に焼けていない	在地	不明
大土坑１上層 46図６ 図版２	板状土製品	長さ9.0 幅10.2 厚さ1.9	瓦質土器	平瓦片の転用で、上下面とも端部がよく焼けており、側端面は付着物あり		下面は１つの角だけが焼けておらず、上面は側端以外は焼けていない	在地	不明
土坑17上位 46図７ 図版３	置き砥石	長さ8.2 幅5.2 厚さ1.2重量86	頁岩 天草石	側面の丸みは使用によるもの　仕上げ砥石				
土坑１ 46図８ 図版３	置き砥石	長さ7.0 幅5.6 厚さ2.7重量156	頁岩 天草石	左側面は欠損、右側面と下面は整形面　仕上げ砥石				
大土坑１上層 46図９ 図版３	置き砥石	長さ9.8 幅5.3 厚さ0.8重量105	頁岩	上下面は使用面が剥離しており、側面は整形されている　仕上げ砥石				
大土坑１ 46図10 図版３	置き砥石	長さ8.3 幅5.9 厚さ1.8重量96	頁岩	下面は使用面が剥離しており、側面は整形されているが左側面の下部の角を使用している　仕上げ砥石				
土坑１ 46図11 図版３	置き砥石	長さ2.4 幅5.8 厚さ1.1重量25	頁岩	下面は研磨されていない整形面、側面は整形されているが右側面の上部の角を使用している　仕上げ砥石				
上層包含層 46図12 図版３	置き砥石	長さ17.7 幅7.3 厚さ5.7重量968	砂岩	側面は７面の使用面があり、上下端面は整形されている　粗砥石				
上層包含層 46図13 図版３	手持ち砥石	長さ5.2 幅6.3 厚さ3.8重量21	軽石	底面は平滑な平坦面で、他の面には丸みがある　仕上げ砥石				
上層包含層 46図14 図版３	石硯	長さ13.7 幅6.2 厚さ2.1重量359	凝灰岩	下面に沈線はあるが、文字にはなっていない　側面・裏面に光沢のある付着物がある				
上層包含層 46図15 図版３	石塔部材	長さ9.3 幅10.3 厚さ4.2重量638	凝灰岩	１面しか残っていないが、直方体で下部は別の部材に挿入する臍であろう。上面には沈線による装飾がある				



第48図　５次調査出土銭実測図(1/2)

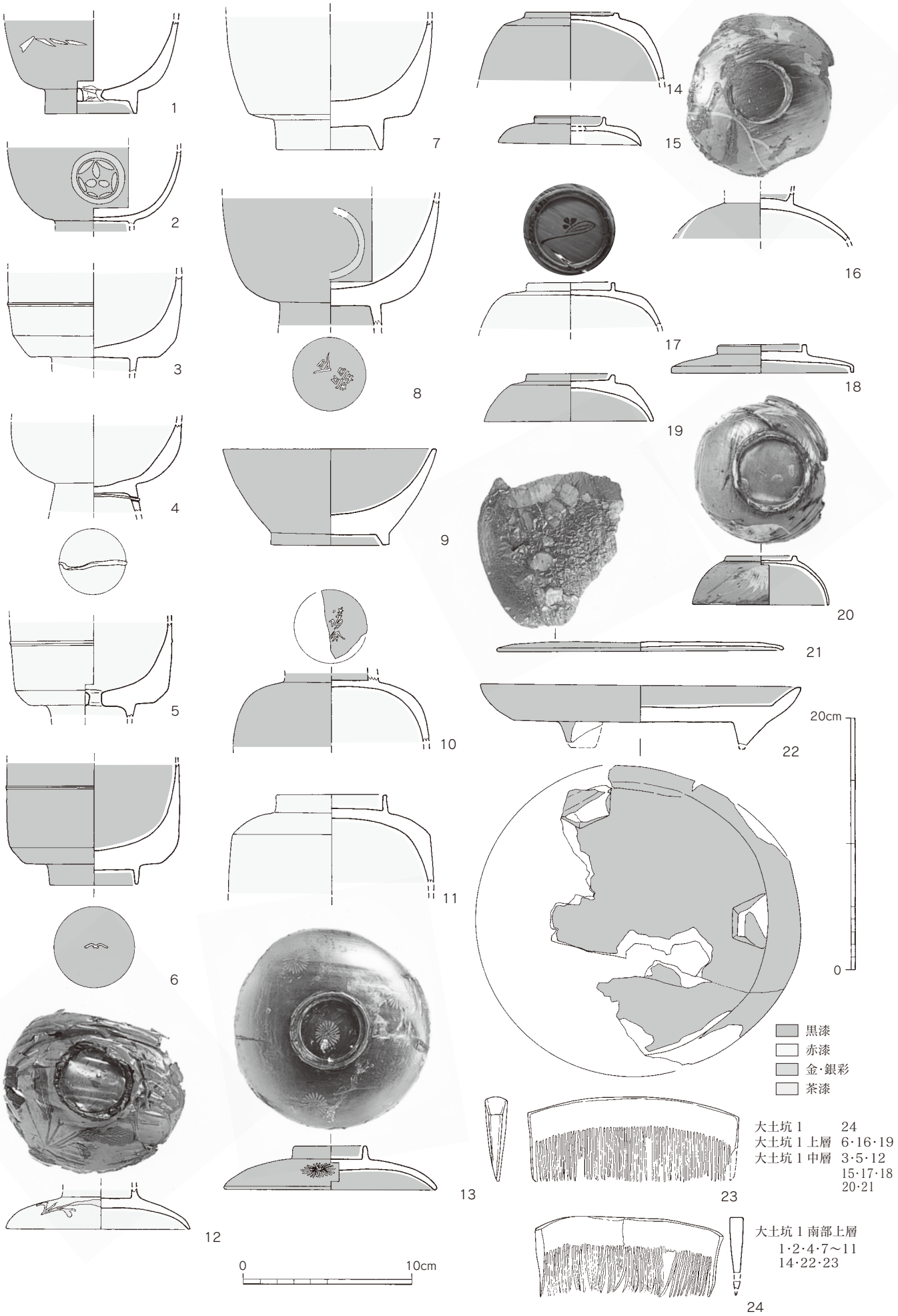
の窪みがに鼻緒が玉止め状態で残っている。

52図3は傘の手元ロクロ部分で、刻みの入る部分に小骨が入る。54図12は行灯の部材で、円盤形の窪みを穿った板材は秉燭や灯明皿を固定する台座であり、その台座を鉄釘で留めた方形の板材の縁には木釘列があるので、側板がつくことがわかるので、脚台部の天井板とわかる。四隅の断面方形の小柱は紙が貼られた部分であり、太い部分と細い部分があるので、細い部分から挿入して太い部分で固定したものと見られる。54図12は鋤の柄で、平鍬の臍孔に刺し込んだものであろう。

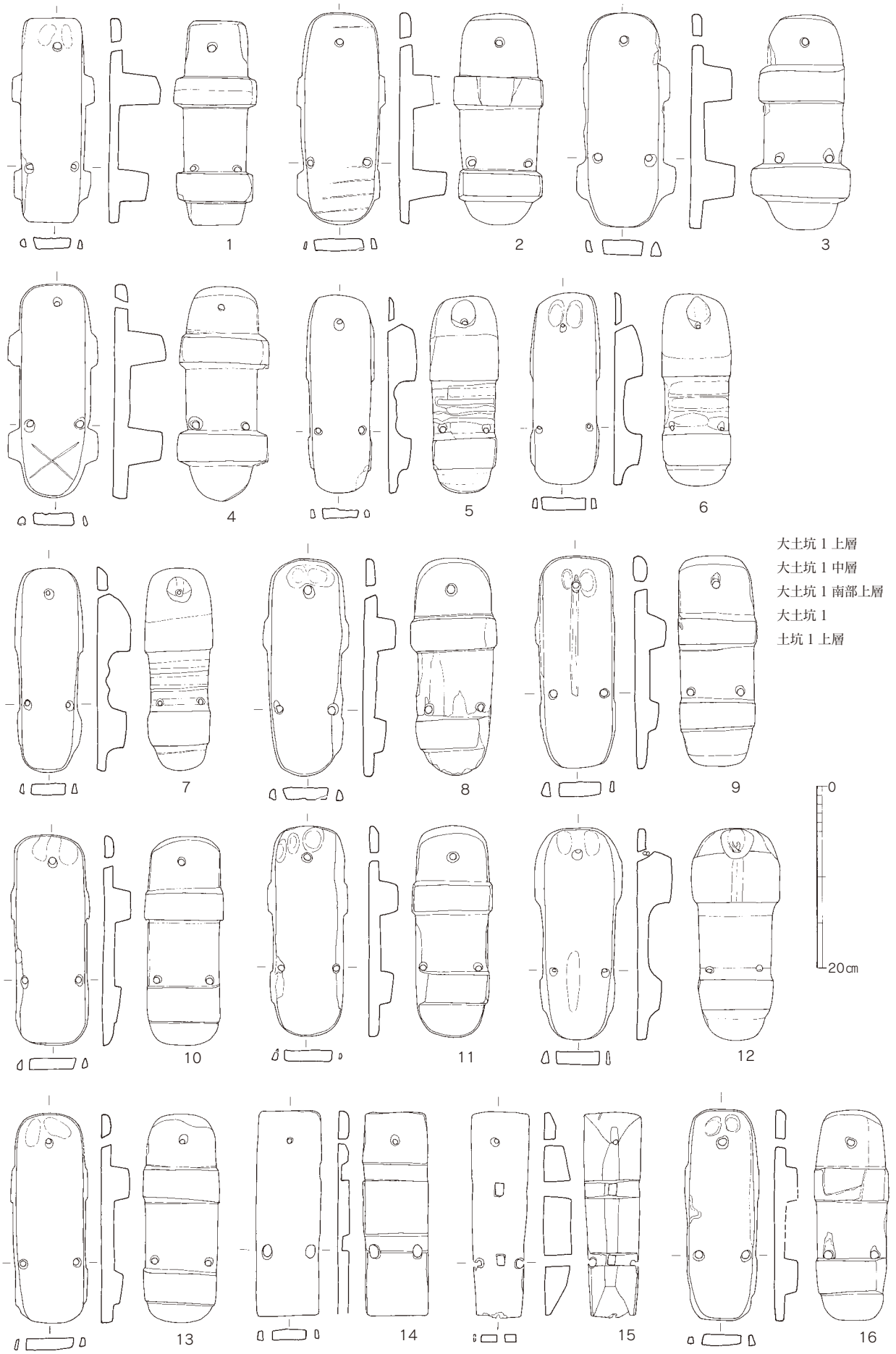
52図1・2、図版6-1は荷札木簡で、木簡1～3を付す。木簡1(図版6-1)は整理中に紛失したため

表24　5次調査出土金属製品観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm・g) ( )は復元値	特　徴
大土坑1 47図1 図版3	煙管吸口	長さ5.5 最大径1.4	真鍮製だが、緑青付着 完形
大土坑1 47図2 図版3	煙管吸口	長さ6.6 最大径0.8	完形 真鍮製　金メッキが1部だけ残っている
土坑17 47図3 図版3	煙管吸口	長さ7.0 最大径0.9	真鍮製　羅宇の木質と金メッキが残っている 完形
大土坑1 47図4 図版3	煙管吸口	長さ7.5 最大径0.7	真鍮製　羅宇の木質が残っている 完形
大土坑1南部上層 47図5 図版3	火打金 山形	長さ2.7 幅6.2 厚さ0.2	鉄製で、山形の頂部に穿孔　下辺は中央部が窪む波形
大土坑1中層 47図6 図版3	不明金属製品	径4.6 厚さ0.1	真鍮製　円盤で、わずかに中央が窪む穿孔部分が欠損しているが、ほぼ完形凸面側が光沢を持つほど研磨されている
土坑1 47図7 図版4	測定針	長さ5.2 幅2.1 厚さ0.1	完形 真鍮製　金メッキが1部だけ残っている　円形部分は毛彫りの蓮花文が入る
大土坑1南部上層 47図8 図版3	錐か	長さ8.0 最大径0.9	断面円形で、先端は欠損しているのか不明
大土坑1中層 47図9 図版3	縫い針	長さ18.2 頭部幅0.7 径0.4	頭部の穿孔は板を折り返したものだろう 断面円形
大土坑1中層 47図10 図版3	縫い針	長さ21.0 頭部幅0.7 径0.4	頭部の穿孔は板を折り返したものだろう 断面方形
大土坑1 47図11 図版3	縫い針	長さ40.5 頭部幅1.2 径0.9	上位は断面楕円形、中位以下は方形で、断面方形になる位置に捩れが入る
大土坑1南部上層 47図12 図版3	小釘	長さ4.1 頭部幅0.4	頭折れで、先端が折れているので抜かれたものか
大土坑1 47図13	簪	長さ15.2 最大幅0.7 厚さ0.1	真鍮製 毛彫などの文様はない
大土坑1 47図14 図版5	鎧小札	長さ11.2 最大幅3.1 厚さ0.2	当世具足で、復元した湾曲が大きいことから肩鎧か 鉄芯の上に黒漆を塗り、内面は金箔を貼る
大土坑1 47図15 図版3	鎌	長さ14.3 幅8.5 厚さ0.2	鉄製　先端欠損　基部は残っている
大土坑1中層 47図16 図版3	包丁	長さ14.3 幅5.0 厚さ0.1	鉄製　先端の丸みは意図的なもので、基部は欠損
大土坑1上層 47図17 図版3	包丁	長さ18.8 幅4.0 厚さ0.1	鉄製　先端の丸みは意図的なもので、基部は欠損
大土坑1上層 47図18 図版3	包丁	長さ13.4 幅4.3 厚さ0.1	鉄製　先端は欠損だが、基部は欠損でない可能性あり
大土坑1中層 47図19 図版	鋤先	長さ14.2 幅15.0 厚さ0.6	側縁の袋部は折り返しでも、別部材との鍛造でもないようなので、鋳造品だろう
大土坑1上層 47図20 図版4	メガネ フレーム	長さ9.7 高さ6.4 幅8.5	合金製　金メッキが1部だけ残っているレンズフレームと側部の部材は可動式
土坑40 47図21 図版3	鹿角製品	長さ4.6 最大径2.7	完形 外面は光沢を持つほど平滑で、上端に沈線が入り、内面側には段があるので、上部に別部材に挿し込んだものだろう
土坑1 48図1 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.4 孔径0.5	表面は残りが良いが、裏面は摩滅している　一部文字が欠損しているため分類できない
土坑5 48図2 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.3 孔径0.7	薄くやや脆い　紫色に変色している 「永」の打ち込みから亀戸(四ツ宝)銭(1708年初鋳)
土坑17上位 48図3 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.3 孔径0.6	銅質悪く、摩滅して薄くなっている　「永」の打ち込みから亀戸(四ツ宝)銭(1708年初鋳)
大土坑1中層 48図4 図版4	寛永通宝 鉄銭	径2.3 孔径0.6	残りよく、錆び膨れもない　錆のため字体の分類が不確実
大土坑1 48図5 図版4	寛永通宝 古寛永	径2.5 孔径0.6	「永」の打ち込みから近江坂本銭(1716年初鋳)　(1656初鋳)　裏面は笵ずれしている
大土坑1南部上層 48図6 図版4	寛永通宝 古寛永	径2.3 孔径0.7	表面は摩滅が少ないが、裏面摩滅しており、やや笵ずれがある　武蔵小菅銭(安政6年初鋳)
大土坑1南部上層 48図7 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.3 孔径0.7	銅質は良いが、表裏面摩滅して薄くなっている　「永」の打ち込みから亀戸(四ツ宝)銭(1708年初鋳)
大土坑1中層 48図8 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.5 孔径0.6	銅質は良く、残りもよい　裏面に「小」が入るから小梅銭(1735年初鋳)　裏面はやや笵ずれがある
大土坑1中層 48図9 図版4	寛永通宝 文銭	径2.3 孔径0.7	銅質は良く、残りもよい　(1668年初鋳)
大土坑1中層 48図10 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.1 孔径0.6	銅質は良く、摩滅のため凹凸が小さくなっている　裏面に「元」が入るから高津新地所鋳銭(1740年初鋳)
大土坑1南部上層 48図11 図版4	寛永通宝 古寛永	径2.4 孔径0.6	銅質は良く、摩滅も少ない　建仁寺銭(1636年初鋳)
溝1 48図12 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.4 孔径0.6	銅質は良いが素がわずかに入る　「宝」の字体から不旧手(1726年初鋳)
ピット2 48図13 図版4	寛永通宝	径2.5 孔径0.6	銅質は良く、摩滅のため凹凸が小さくなっている　「通」の字体から水戸銭(1717年初鋳)
表採 48図14 図版4	一銭銅貨	径2.8	明治34年銘

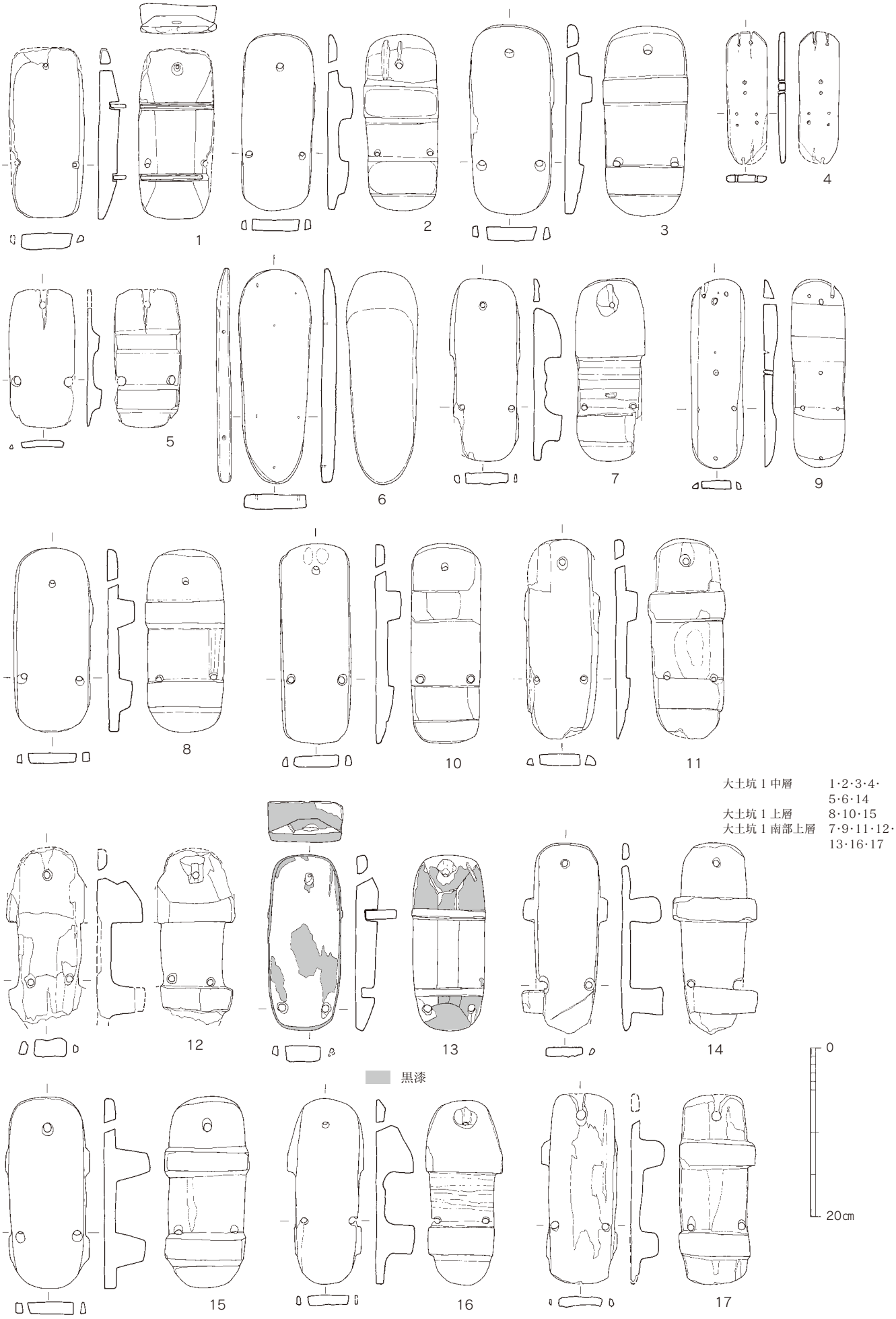


第49図　５次調査出土木製品実測図１（22は1/4、他は1/3）



大土坑１上層	5･6
大土坑１中層	1･2･3･8･12･13
大土坑１南部上層	7･9･10･11･14･15
大土坑１	16
土坑１上層	4

第50図　５次調査出土木製品実測図２(1/6)

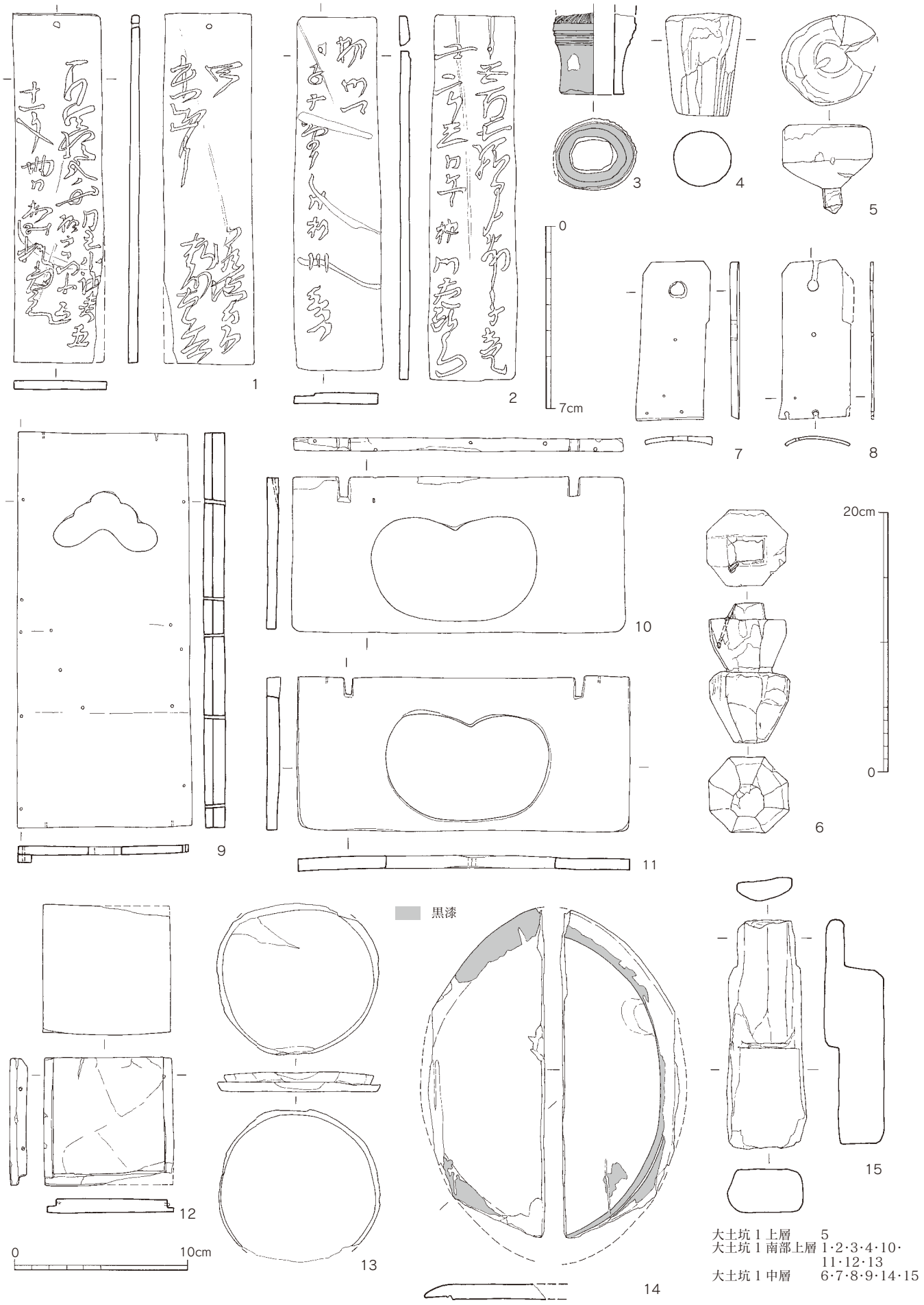


第51図　５次調査出土木製品実測図３(1/6)

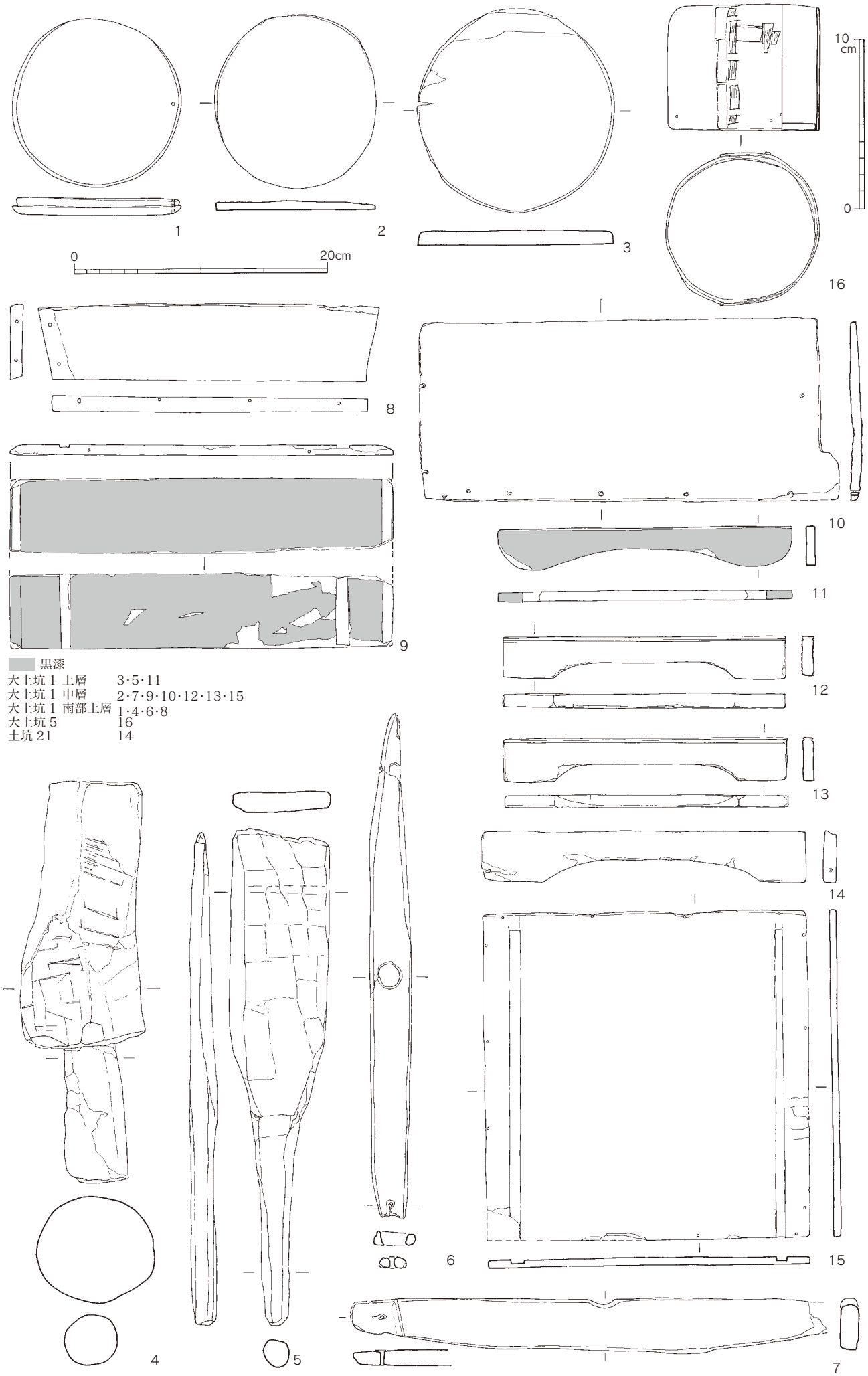
表25　５次調査出土木製品観察表１

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　　徴
大土坑１南部上層 49図１ 図版５	椀 腰丸形	高台径5.5	歪みなく、底部に穿孔あり 外面黒漆 内面赤漆　外面に赤漆で下地塗りした上に金彩で不明モチーフを描いている　漆の遺存状態悪い
大土坑１中層 49図２ 巻頭図版	椀 腰丸形	最大径(10.4)	内外面黒漆を下塗りした上に内面のみ赤漆を塗る 漆膜の剥落が著しい 金彩で円に三つ葉文の家紋文
大土坑１南部上層 49図３ 図版５	椀 壺形	最大径(10.2)	内外赤漆　無文 歪みのため一部復元して実測
大土坑１中層 49図４ 図版５	椀 腰丸形	最大径(10.1)	内外面赤漆　歪みあり 高台側面に穿孔して、桜の樹皮を通している
大土坑１南部上層 49図５	椀 壺形	最大径(9.6)	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆を塗る 漆膜の剥落が著しい 底部に穿孔あり
大土坑１上層 49図６ 図版５	椀 壺形	最大径(9.6)	内外黒漆　無文 高台外面に重なる山形が赤漆で描かれている
大土坑１南部上層 49図７ 図版５	蓋 一文字腰形	最大径(12.2) 高台径6.4	内外赤漆　無文　ほぼ完形
大土坑１南部上層 49図８	椀 腰丸形	最大径(12.8) 高台径7.1	歪みは少ないが、遺存状況は悪い　外面黒漆　内面赤漆　外面は金彩で円に不明モチーフ、裏銘に「請合」を赤漆で描く
大土坑１南部上層 49図９ 図版５	椀 端反形	口径(12.6) 高台径(7.0) 器高5.8	内外黒漆　無文 歪みのため一部復元して実測
大土坑１南部上層 49図10	椀 壺形		外面黒漆　内面赤漆　裏銘に赤漆で「請合」 歪みなし　径が小さいので蓋にしたが、小型の身の可能性もある
大土坑１南部上層 49図11 図版５	椀 一文字腰椀	つまみ部径(6.3)	内外赤漆　無文 歪みあり　接合して９割残存　漆の遺存状況は悪い
大土坑１南部上層 49図12	椀 腰丸形	つまみ径4.4	内外赤漆
出土地不明 49図13 巻頭図版	蓋 平形	つまみ径4.4 裾径12.8 器高2.8	内外面黒漆で、外面は銀彩で菊花文を描く　ほぼ完形
大土坑１南部上層 49図14 図版５	蓋 壺形	つまみ径5.4 最大径(11.0)	内外黒漆　無文　９割残存
大土坑１中層 49図15	蓋 平形	つまみ径(4.2) 裾径8.4 器高1.6	内面赤漆　外面黒漆で、銘の存在は欠損のため不明　歪みはない
大土坑１上層 49図16 巻頭図版	蓋	つまみ径4.1	外面黒漆、内面赤漆で、外面は赤漆と金彩で波の上を飛ぶ鶴３羽を描く　９割残存
大土坑１中層 49図17 巻頭図版	蓋 腰丸形	最大径(10.4)	内外赤漆　外面に黒漆で葉と三つ葉文を描く　９割残存
大土坑１中層 49図18 巻頭図版	椀蓋 平形	つまみ径5.4 裾径10.8 器高1.7	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆を塗る
大土坑１上層 49図19 図版５	蓋 一文字腰形	つまみ径5.2 裾径9.0 器高2.8	内外黒漆　無文　ほぼ完形
大土坑１中層 49図20 巻頭図版	小蓋 腰丸形	つまみ径4.4 裾径8.2 器高3.0	内外面黒漆で、外面は金彩で鶴文を対面に描く　接合してほぼ完形
大土坑１中層 49図21 巻頭図版	合子蓋か	裾径(17.0)	内外面黒漆で、外面は赤漆と金彩で梅樹文を描く　遺存状態悪くひずみあり
大土坑１南部上層 49図22 図版５	脚付皿	径(26.0) 器高3.0	内外面黒漆塗りで、内底のみ赤漆を塗る 外底は削り出しの脚がつく　位置関係から本来４つだろう　やや歪みあり
大土坑１南部上層 49図23 図版９	櫛	長さ5.0 幅12.5 厚さ1.3	完形 漆塗りなど装飾はない

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　　徴
大土坑１ 49図24 図版８	櫛	長さ4.3 幅11.0 厚さ1.3	変形し、中央部で欠損している 変形しているので、本来は幅12cmほどあったと思われる
大土坑１中層 50図１ 図版７	下駄 連歯下駄	長さ22.4 幅9.0 厚さ5.5	完形　歯は右側が摩滅　後歯が摩滅で極端に低くなっている　前壺は右に偏っているので、左脚用で、親指のあたる位置が窪んでいる
大土坑１中層 50図２ 図版７	下駄 連歯下駄	長さ23.1 幅9.7 厚さ5.2	ほぼ完形　前歯が欠けている以外、、摩滅や欠損がない　前歯と前壺の間が長い
大土坑１中層 50図３ 図版７	下駄 連歯下駄	長さ22.5 幅10.9 厚さ4.7	前壺の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みが大きい　歯は左側が摩滅し、裾が右に張り出しているので、右脚用　ほぼ完形
土坑１上層 50図４ 図版７	下駄 連歯下駄	長さ22.5 幅10.0 厚さ7.8	前壺の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みが大きいが、歯は右側が摩滅する　踵部分に×印がある　完形
大土坑１上層 50図５ 図版７	下駄 ぽっくり	長さ21.8 幅7.4 厚さ3.2	歯の間に大きな鑿痕が３つが残る　歯は右側が摩滅 完形
大土坑１上層 50図６ 図版７	下駄 ぽっくり	長さ21.0 幅7.5 厚さ4.8	加工痕が残り、つくりが粗い　前壺が左に偏っており、穿孔も同じ方向に偏っている　ほぼ完形
大土坑１南部上層 50図７ 図版７	下駄 ぽっくり	長さ22.4 幅7.4 厚さ3.7	歯の間に大きな鑿痕が３つが残る　歯は右側が摩滅し前歯の裾が左に張り出しているので、左脚用　完形
大土坑１中層 50図８ 図版７	下駄 連歯下駄	長さ23.8 幅9.5 厚さ4.8	前壺の周囲が窪んでいるが、孔の左の窪みが大きい　ほぼ完形　横緒穴の右側が摩滅しているので右脚用だろう
大土坑１南部上層 50図９ 図版７	下駄 連歯下駄	長さ23.2 幅8.8 厚さ3.4	後歯は左側が張り出すので、左足用　完形　後歯が摩滅で極端に低くなっている
大土坑１南部上層 50図10 図版７	下駄 連歯下駄	長さ23.0 幅8.7 厚さ2.9	前壺の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みが大きく、後歯は左側が摩滅するので、右足用　完形　後歯が摩滅で極端に低くなっている
大土坑１南部上層 50図11 図版７	下駄 連歯下駄	長さ23.2 幅8.8 厚さ3.3	前壺の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みの形から左足用　完形　後歯が摩滅で低くなっている
大土坑１中層 50図12 図版７	下駄 連歯下駄	長さ23.2 幅9.0 厚さ2.5	後歯が斜めに摩滅して、台と同じ角度になっている　ほぼ完形
大土坑１中層 50図13 図版７	下駄 連歯下駄	長さ23.0 幅8.4 厚さ3.1	前壺の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みが大きく、後歯は左側が摩滅するので、右足用　完形
大土坑１ 50図14 図版７	下駄 挿し込み式 連歯下駄	長さ22.4 幅7.0 厚さ1.3	台部はほぼ完形　遺在状態が悪い
大土坑１南部上層 50図15 図版７	下駄 露卯下駄	長さ22.5 幅6.3 厚さ2.8	台部はほぼ完形　遺在状態が悪い　上面は踵部分に×の線刻あり
大土坑１ 50図16 図版７	下駄 連歯下駄	長さ23.1 幅8.1 厚さ2.5	前壺の周囲が窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後歯は右側が摩滅するので、左足用　完形
大土坑１中層 51図１ 図版７	下駄 挿し込み式 連歯下駄	長さ20.1 幅8.8 厚さ3.0	後歯の端部が欠損するだけでほぼ完形 ほぼ完形だが遺在状態が悪い　後歯が摩滅で極端に低くなっている
大土坑１中層 51図２ 図版７	下駄 連歯下駄	長さ20.8 幅8.7 厚さ2.8	前壺の周囲が窪んでいるが左右同じぐらい　後歯は右側が摩滅するので左足用 完形
大土坑１中層 51図３ 図版７	下駄 連歯下駄	長さ22.2 幅10.0 厚さ3.4	完形　前歯も摩滅で低くなっているが、後歯の摩滅は著しい
大土坑１中層 51図４ 図版８	下駄 草履底	長さ15.6 幅4.6 厚さ0.9	裏は右側が摩滅するので、左足用　ほぼ完形　孔のほとんどに木釘が残る
大土坑１中層 51図５ 図版８	下駄 連歯下駄	長さ16.2 幅7.7 厚さ1.8	歯は右側が摩滅するので左足用　ほぼ完形　子供用



第52図　５次調査出土木製品実測図４（1・2は1/2、6・9～11・14・15は1/4、他は1/3）



第53図　５次調査出土木製品実測図５（16は1/3、他は1/4）

表26　５次調査出土木製品観察表２

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　　徴
大土坑１中層 51図６ 図版８	下駄 草履底	長さ24.2 幅8.5 厚さ3.1	裏は左側が摩滅するので、右足用　ほぼ完形　木釘でなく鉄釘で、釘頭が露出していない
大土坑１南部上層 51図７	下駄 ぽっくり	長さ21.5 幅8.2 厚さ3.3	歯の間に大きな鑿痕が３つが残る　歯は左側が摩滅　台の先端の弧が右に偏っている　完形
大土坑１上層 51図８	下駄 連歯下駄	長さ21.5 幅9.5 厚さ3.1	歯は左側が摩滅するので、右足用　完形　前歯と後歯の摩滅の差は小さい
大土坑１南部上層 51図９ 図版８	下駄 草履底	長さ22.0 幅6.2 厚さ1.8	前壺が左に偏り、裏は左側が摩滅するので、右足用　ほぼ完形　孔のほとんどに木釘が残る
大土坑１南部上層 51図10	下駄 連歯下駄	長さ23.1 幅8.6 厚さ3.6	前壺の周囲が窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後歯は右側が摩滅するので、左足用　完形　後歯が摩滅で極端に低くなっている
大土坑１南部上層 51図11	下駄 ぽっくり	長さ23.3 幅9.6 厚さ3.8	前壺の周囲が窪んでいるが左右同じぐらい　後歯は右側が摩滅し、左側が張り出すので右足用　完形　前壺に紐が残る
大土坑１南部上層 51図12	下駄 ぽっくり	長さ20.1 幅9.1 厚さ5.3	中心孔の穿孔が長方形　前歯は右側が摩滅　ほぼ完形
大土坑１南部上層 51図13	下駄 露卯下駄	長さ20.6 幅8.2 厚さ4.7	表裏黒漆塗り　ほぼ完形
大土坑１中層 51図14	下駄 連歯下駄	長さ22.4 幅10.0 厚さ4.9	踵側が狭く、歯は高い　歯は右側が摩滅する　ほぼ完形
大土坑１上層 51図15	下駄 連歯下駄	長さ22.5 幅10.0 厚さ4.4	完形　均一なつくりで、摩滅がほとんどない
大土坑１南部上層 51図16	下駄 ぽっくり	長さ22.0 幅8.9 厚さ4.3	加工痕が残り、つくりが粗い　前歯の裾が左に張り出しているので左用 ほぼ完形
大土坑１南部上層 51図17	下駄 連歯下駄	長さ22.2 幅14.6 厚さ4.0	台座の遺存状態が悪い　前歯は右が摩滅し、後歯は左が摩滅する　摩滅の程度は同じ ほぼ完形
大土坑１ 図版６	荷札木簡	長さ約15 幅約3 厚さ約0.5	遺物が整理中に紛失したため、作図できず、Ｘ線写真のみ掲載している　法量は概数
大土坑１南部上層 52図１ 図版６	荷札木簡	長さ13.6 幅3.5 厚さ0.4	穿孔あり　側面を一部欠損 表裏面に削り痕が残る
大土坑１南部上層 52図２ 図版６	荷札木簡	長さ13.7 幅3.6 厚さ0.4	穿孔あり　穿孔部分で中央から割れている　表裏面に削り痕が残る
大土坑１南部上層 52図３ 図版８	和傘部材 手元ロクロ	長さ4.6 幅4.8	外面黒漆塗りで、やや歪みあり 本来は最大径4.2cm前後だろう
大土坑１南部上層 52図４ 図版８	栓	長さ5.9 最大径7.3	側面に孔があいているが、これは木目の節が脱落したものだろう
大土坑１上層 52図５ 図版８	独楽	最大径5.1 器高5.0 芯径1.0	変形し、欠損している 上面中央は半球状に窪む 芯は鉄で断面方形
大土坑１中層 52図６ 図版８	碁盤脚	長さ10.7 最大径6.2	上端面に方形の臍を作り、挿し込むもの 側面は８面に面取りしている
大土坑１中層 52図７ 図版８	不明木製品 側板	長さ9.0 幅3.9 厚さ0.5	７・８がセットになる　薄く、側面に釘孔はない　上端の穿孔は釘孔には大きいので、棒が挿入されたものか
大土坑１中層 52図８ 図版８	不明木製品 側板	長さ9.1 幅4.0 厚さ0.5	７・８がセットになる　薄く、側面に釘孔はない　上端の穿孔は釘孔には大きいので、棒が挿入されたものか

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　　徴
大土坑１中層 52図９ 図版８	側板	長さ30.4 幅13.5 厚さ1.6	松葉形の透かし窓なので、縦長の側板だろう　端部には別の部材を木釘で留めて肥厚させている
大土坑１南部上層 52図10 図版８	膳脚 足打折敷	長さ12.0 幅25.6 厚さ1.0	ハート形の透かし窓がある 側面に木釘がないので、２脚だろう
大土坑１南部上層 52図11 図版８	膳脚 足打折敷	長さ12.0 幅25.8 厚さ1.0	ハート形の透かし窓がある 側面に木釘がないので、２脚だろう
大土坑１南部上層 52図12 図版８	側板	長さ7.5 幅7.3 厚さ0.9	箱の側板で、上端面は斜めに加工されている以外は平坦で、側面には木釘孔が２つあるが、下端面には見られない
大土坑１南部上層 52図13 図版８	曲げ物底板	長軸9.3 短軸9.1 厚さ1.2	欠損のため楕円形に見える　側縁は丸みを持つ　抉り込みは幅1.8cm程の幅の工具によるもの　側面に木釘孔はない
大土坑１中層 52図15 図版８	留め具か	長さ17.5 幅6.5 厚さ4.6	上下端で互い違いに臍が作られているので、部材を繋いで固定する部材だろう
大土坑１南部上層 53図１ 図版８	曲げ物底板	径13.2 厚さ0.7	段差があるが、側面に木釘孔なし 表裏端部の木釘孔は柄の留め具を固定したものだろう
大土坑１中層 53図２ 図版８	曲げ物底板	長軸12.8 短軸12.6 厚さ0.7	段も側面の木釘孔もなし
大土坑１上層 53図３ 図版８	曲げ物底板	径15.3	ほぼ正円形 段差はなく斜めに削る
大土坑１南部上層 53図４ 図版８	木槌	長さ31.5 最大径9.7 柄部径4.8	中央部が全周同じように窪んでいる
大土坑１上層 53図５ 図版８	羽子板形木製品	長さ39.2 幅7.7 厚さ2.4	柄がつく板状もので、先端を両側から削っているが、尖ってはいない　何か鉄の刃を挿入したかも知れない
大土坑１南部上層 53図６ 図版８	網針形木製品	長さ40.0 幅3.5 厚さ1.1	先端は尖っており、基部は小さな抉りが入る　中央に径2.2cmの孔があるので、そこに紐を通して編むものだろう　ゴザ作りと関係あるか　黒漆
大土坑１中層 53図７ 図版８	桶把手	長さ4.4 幅37.7 厚さ1.5	把手で、端部には斜めに挿入痕あり　中央部が窪む
大土坑１南部上層 53図８ 図版９	箱の側板	長さ7.0 幅26.8 厚さ1.2	側縁には片側にしか木釘孔がなく、側端面も同じであることから、互い違いの組み合わせで側板を形成していたようだ
大土坑１中層 53図９ 図版９	箱蓋	長さ30.2 厚さ0.8	全面黒漆塗り 側端部で約1/4残存
大土坑１中層 53図10 図版９	箱の側板	長さ14.2 幅32.5 厚さ0.8	側縁には片側にしか木釘孔がなく、対面は臍になっているので、臍部分を最後に固定したものである
大土坑１上層 53図11 図版９	足打折敷の脚	長さ3.0 幅23.2 厚さ1.2	黒漆塗り　接地部は漆が剥離している
大土坑１中層 53図12 図版９	膳脚 足打折敷の脚	長さ3.5 幅22.3 厚さ0.9	12・13はセットで、下端部に溝があるので、ここに板を挿入するものである 側端面・上下端面には木釘孔なし
大土坑１中層 53図13 図版９	膳脚 足打折敷の脚	長さ3.4 幅22.3 厚さ0.9	12・13はセットで、下端部に溝があるので、ここに板を挿入するものである 側端面・上下端面には木釘孔なし
土坑21 53図14 図版８	膳脚 是打折敷の脚	長さ2.0 幅23.3 厚さ0.7	側面の片側に木釘孔があるので、方形脚か　上端は欠損しているので、もう少し長いものか　つくりは粗雑
大土坑１中層 53図15 図版９	膳	長さ26.0 幅25.4 厚さ0.7	表裏黒漆で、上面の端部は木釘あり、縁がつく　裏面の溝彫りされている部分には脚がつくが、釘固定ではない
土坑21 53図16 図版９	曲げ物	径9.0 器高7.4	側面に木釘跡があるが、 底板を止めるには高い

写真のみを掲載している。片面のみの使用で長さ約20cm、厚さ5mm程だったと記憶している。釈文は下に提示した通りである。重なってはいなかったがほぼ同じ場所から出土した。

木簡2・3は表裏使用されており、表裏で日付と人名が異なっている。2は裏面の冒頭に×印らしいものがあり、3は３本の横線で内容を抹消しているように見える。表裏で筆跡も異なるようなので、使用済みの面に×や横線で印をして反対面を再利用したものと考えられる。出荷先で再利用されたものであるとすれば、2は11月に某所から発送されて出荷先に届いた木簡を翌年１月に再利用して発送し、3は某所から12月18日に発送されて出荷先に届いた木簡を翌年２月に再利用したことになる。

干支が書かれている面を表面とすると、下記のようになる。○は穿孔を表す。

なお、54図9〜11は、『矢加部屋敷Ⅲ』ではこの形態のものを鋤と報告している。今回、1・5次調査出土資料が増加したが、やはり他の部材と組み合わせる臍孔がないので、牛馬に引かせる通常の唐鋤と考えた。しかし、先端に鉄刃をつけるような加工がなく、柄の断面が逆台形なものも

木簡1

・「四□〔百カ〕□□□□□〔服カ〕□□

○未正月□〔日カ〕柳川六郎太」

・「□〔百カ〕□小袖□□

○〆百四拾参匁

○拾□小□

十一月州日柳川□〔日カ〕左衛門」

一三四・三四・二　九〇一一型式

木簡2

・○「□〔柳〕□〔川カ〕□□□□

○子十二月十八日柳川□左衛門」

・○「五百十八□〔柳〕□〔川カ〕□布子壱

丑二月□〔五カ〕□□〔了カ〕□□□〔石右カ〕左衛門」

一三四・三四・二　九〇一一型式

木簡3

・ヘキ「筑後久留米領矢加部　大坂　ならや

野田喜兵衛様　□□氏」

一三四・三四・二　九〇一一型式

共通しており、土留め材の杭にするため再加工した結果ではない。鋤以外に考えられるものとして脱粒用の棒だが、柄にするのであれば断面逆台形でなく握りやすく円形にするべきであり、民俗例にもない。まとめで後述するが、堆肥小屋と思われる４次調査100号土坑から出土していることから、堆肥作りに使う鋤かもしれない。堆肥造りに使われたと考えられる土坑からは炭化物や籾殻が互層に堆積しているが、深い土坑であり、上から投入した後で均さなければほぼ水平に同じ厚さの層にはならないことから均すための道具なのではなかろうか。先端に鉄製の刃をつけた痕跡がないのはそのためだろう。鋤の一種であろうからここでは鋤として報告しておく。

図版５－２は大學目薬の目薬瓶で、明治32(1899)年に田口参天堂から発売されたものである。昭和７年に両口点眼式目薬瓶が発売されるまでの間のものだろう。図版５－３は「みや古染め」の染料瓶で、桂屋商店から明治29(1896)年に発売された家庭用染料である。

図版10－６は写真のみ掲載したもので、２本の撚り紐２本で、先端は帆綱結びで、中央に２つの止め結びの結び目にもう１本の紐を通したもの。

注

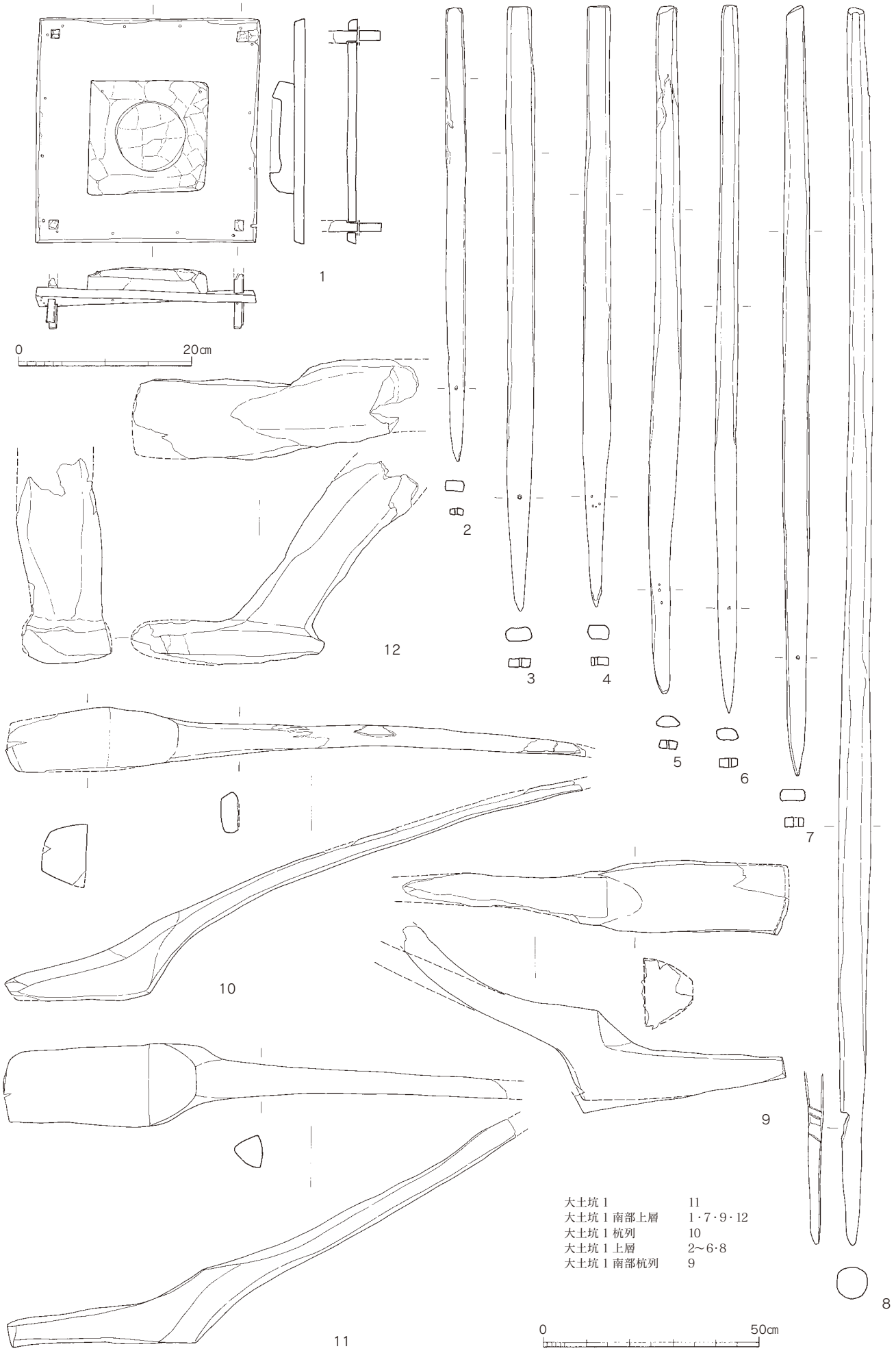
1　江戸遺跡研究会2001「遊・玩具６羽根つき・独楽」『図説　江戸考古学研究事典』柏書房

参考文献

1　秋田裕毅2002『ものと人間の文化史104　下駄』法政大学出版局

表27　５次調査出土木・ガラス製品観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　徴
大土坑１南部上層 54図１ 図版９	行灯台座	長さ26.0 幅25.5 厚さ4.0	鉄釘で周囲を止めている 板は周囲に木釘があるので、下に側板がつくとわかる 板は下面が平滑になっている
大土坑１上層 54図２ 図版９	柄杓の柄	長さ52.8 幅2.8 厚さ1.5	小型の柄杓
大土坑１上層 54図３ 図版９	柄杓の柄	長さ69.6 幅3.1 厚さ2.0	柄杓を固定する釘孔が３つある
大土坑１上層 54図４ 図版９	柄杓の柄	長さ70.0 幅3.2 厚さ1.8	側面の一部に窪みがあるが、意図的なものかわからない
大土坑１上層 54図５ 図版９	柄杓の柄	長さ79.7 幅3.6 厚さ1.4	断面長方形の扁平部分が長く、通常の柄杓の柄ではないかもしれない
大土坑１上層 54図６ 図版９	柄杓の柄	長さ82.2 幅2.6 厚さ1.3	側面の一部に窪みがあるが、意図的なものかわからない
大土坑１南部上層 54図７ 図版９	柄杓の柄	長さ89.1 幅3.1 厚さ1.5	基部が欠損している　乾燥のためやや反っているので、長さに誤差あり
大土坑１上層 54図８ 図版９	棒柄	長さ143.1 径3.6	長柄杓の柄であろう　先端の柄杓に差し込む部分だけ断面長方形だが、それ以外は断面円形
大土坑１南部杭列 54図９ 図版９	鋤	長さ91.7 幅16.6 厚さ24.0	柄を欠損している　完形で、乾燥で歪んでいるので図は復元
大土坑１上層 54図10 図版10	鋤	長さ117.6 幅19.1 厚さ15.3	柄の先端を欠損している　乾燥で歪んでいるので図は復元
大土坑１ 54図11 図版10	鋤	長さ134.2 幅13.2 厚さ14.3	ほぼ完形で、乾燥で歪んでいるので図は復元による
大土坑１南部上層 54図12 図版10	小型鋤	長さ31.3 幅9.6 厚さ5.0	１本作りで、平鍬の臍孔に挿し込むものだろう　乾燥による歪み大きい
大土坑１上層 図版５－１	瓶 青ガラス 両口点眼式目薬瓶	長さ8.8 幅2.8 厚さ1.6	型合わせ「EYE LOTHION ROHTO」「Z21」の陽刻がある面の対面にはシールを貼る枠が洋式盾形に陽刻されている
撹乱井戸 図版５－２	瓶 透明ガラス 目薬瓶	底面長軸2.9 底面短軸1.6	型合わせ珠文列で囲まれた内部に　「大學目薬」「参天堂薬房」の陽刻あり　側面は縞状、底面は田の字型の陽刻あり
撹乱井戸 図版５－３	瓶 透明ガラス 染料瓶	口径2.1 最大径3.2 高さ6.1	型合わせ　「みやこ染」の陽刻の対面に目盛りが陽刻され、底面には「三」の屋号が陽刻されている
大溝２ 上層包含層 図版５－４	瓶 透明ガラス ポマード瓶	口径3.6 底径4.5 器高4.0	円柱状　側面は点描格子で、窓が対面にあり、裏銘に「・意匠登録No30148・」と上下逆に「IUZUTSUBAKI」の陽刻がある
撹乱井戸 図版５－５	瓶 磁器 ポマード瓶	口径3.6 最大径4.8 高さ5.4	肩の張る甕形で、裏銘にウテナの文字をデザイン化した三つ葉の陽刻がある昭和４(1929)年発売
撹乱井戸 図版５－６	瓶 磁器 ポマード瓶	口径3.6 最大径4.8 高さ5.1	肩の張る甕形で、底に２つの点が陽刻されている　裏銘がないが、同一規格なので、ウテナだろう
出土地不明 図版５－７	瓶 緑ガラス ニッキ瓶	口径0.7 底径2.1 器高12.3	口縁部は打ち欠き外し　完形 型合わせ　口縁部が曲がっているのは口縁部の処理の失敗　気泡あり



第54図　５次調査出土木製品実測図６（9～11は1/12、他は1/6）